

改訂版

佐賀県の淡水魚

人と川と自然を考える



改訂版

佐賀県の淡水魚

人と川と自然を考える



今では見られなくなった実りの秋を告げる佐賀平野の風物詩「四つ手網漁」。方言で「じゅぶ」と呼ばれた。写真は昭和45年10月、佐賀市鏡島町

目次

佐賀県の主要河川	4	セボシタビラ	30
はじめに	5	タイリクバラタナゴ	31
大切にしたい故郷の淡水魚		ニッポンバラタナゴ	32
木村清朗	7	カゼトゲタナゴ北九州個体群	33
淡水魚とは	8	淡水魚と二枚貝について	34
用語解説	9	・「春の水辺にて」	
魚の各部名称	12	中島睦子	36
スナヤツメ南方種	13	ハクレン	37
カワヤツメ	14	コクレン	38
カライワシ	15	カワバタモロコ	39
ニホンウナギ	16	ハス	40
マアナゴ		オイカワ	41
(レプトセファルス幼生)	17	カワムツ	42
コノシロ	18	ヌマムツ	43
エツ	19	ヒナモロコ	44
コイ	21	ソウギョ	45
ゲンゴロウブナ	22	アオウオ	46
・「クリークの片隅で」		タカハヤ	47
岩田淡水	23	ウグイ	48
ギンブナ	24	モツゴ	49
オオキンブナ	25	カワヒガイ	50
テツギョ	26	ムギツク	51
ヤリタナゴ	27	タモロコ	52
アブラボテ	28	ゼゼラ	53
カネヒラ	29	カマツカ	54

ツチフキ	55	メナダ	82
ズナガニゴイ	56	カダヤシ	83
ニゴイ	57	グッピー	84
・「川と魚たちの未来」 田中信明	58	ミナミメダカ	85
イトモロコ	59	クルメサヨリ	86
コウライモロコ	60	オヤニラミ	87
ドジョウ	61	スズキ	88
ヤマトシマドジョウ	62	ブルーギル	89
アリアケスジシマドジョウ	63	オオクチバス	90
アリアケギバチ	64	ヒイラギ	91
ナマズ	65	クロダイ	92
アカザ	66	ナイルテラピア	93
ワカサギ	67	シマイサキ	94
アユ	68	ヤマノカミ	95
・「野鳥と魚」		カマキリ(アユカケ)	97
平野正徳	69	カジカ	98
アリアケシラウオ	70	ウツセミカジカ	99
アリアケヒメシラウオ	71	イダテンギンポ	100
シラウオ	72	ドンコ	101
ニジマス	73	・「佐賀低平地における	
サケ	74	『水文化』の特性と再生	
ヤマメ	75	於保泰正	102
アマゴ	76	カワアナゴ	103
タウナギ	77	ミミズハゼ	104
ニホンイトヨ	78	ヒモハゼ	105
ボラ	80	シロウオ	106
セスジボラ	81	ワラスボ	107

佐賀県内の主要な河川

ムツゴロウ	108	・「水を創る」 井上一夫	135
タビラクチ	110	・釣り日記「あの川この堀」	136
トビハゼ	111	・河畔歳時記	137
マハゼ	112	・川は面白いぞ	
ハゼクチ	113	多布施川で投げ網打ち	139
アシシロハゼ	114	・見て見てこんな大物	140
アベハゼ	115	・「淡水魚飼育の魅力」 濱野大作	140
シロチチブ	116	・捕ったら飼ってみよう	141
ショウキハゼ	117	・知っておきたい漁業制度	144
シモフリシマハゼ	118	・内水面漁協一覧	146
ヌマチチブ	119	・「魚の地方名」(一覧表付き)	
チチブ	120	力丸喬之	147
ゴクラクハゼ	121	・参考文献	152
カワヨシノボリ	122	・協力していただいた方々	153
シマヨシノボリ	123		
オオヨシノボリ	124		
クロヨシノボリ	125		
トウヨシノボリ	126		
ヨシノボリ類の見分け方	127		
ウロハゼ	128		
スミウキゴリ	129		
ウキゴリ	130		
ビリンゴ	131		
カムルチー	132		
クサフグ	133		
その他の水辺動物	134		
ミナミヌマエビ、スジエビ、			
テナガエビ、アメリカザリガニ			



- | | | |
|--------|-------|--------|
| ① 筑後川 | ⑨ 祇園川 | ⑰ 玉島川 |
| ② 安良川 | ⑩ 六角川 | ⑱ 松浦川 |
| ③ 寒水川 | ⑪ 牛津川 | ⑲ 巖木川 |
| ④ 田手川 | ⑫ 塩田川 | ⑳ 徳須恵川 |
| ⑤ 城原川 | ⑬ 中川 | ㉑ 半田川 |
| ⑥ 嘉瀬川 | ⑭ 浜川 | ㉒ 有浦川 |
| ⑦ 神水川 | ⑮ 多良川 | ㉓ 有田川 |
| ⑧ 多布施川 | ⑯ 糸岐川 | |

はじめに

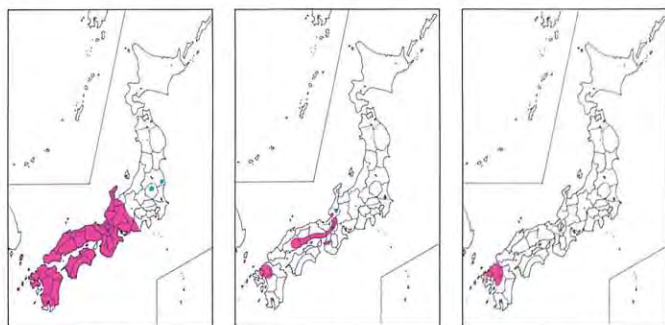
佐賀県の淡水魚の由来

淡水魚のうち特に純淡水魚（一次淡水魚）は、陸と海で区切られた狭い水域に生息する。支流から支流への移動は別として、海や峠を越えて別な河川に移動することができないため、河川ごとに生息する魚は異なるはずである。しかし、実際には佐賀県内に生息する淡水魚の多くは、日本最大の淡水域である琵琶湖を含む西日本に共通しており、東シナ海や対馬海峡をはさんだ中国大陸についても同じことが言える。

これは、今からおよそ90万年前から2万年前にかけて訪れたギュンツ氷期、ミンデル氷期、リス氷期、ウルム氷期の4回の氷河期などの折に海水面が低下し、当時は平原であった東シナ海の海底で、大陸と西日本の各河川が合流して一つの大きな河川になったことがあるためと考えられている。

さらに細かく見ると北部九州には、ヒナモロコ、セボシタビラ、カゼトゲタナゴやアリアケギバチなどが見られる。これらは、最後の海退期であるウルム氷期に渡って来て、本州まで侵入することができなかったものの子孫である可能性が高いと考えられている。

純淡水魚以外ではヤマノカミ、アリアケシラウオ、ハゼクチなどの回遊魚や周縁的淡水魚が有明海および、その流入河川に見られる。この中には、アリアケヒメシラウオやエツのように、その後独自の進化を遂げたものもある。



カフムツの分布

カネヒラの分布

カゼトゲタナゴの分布

「フィールド図鑑淡水魚」(東海大学出版会)より転載

このように、佐賀県や有明海沿岸を含めた北部九州の淡水魚は日本と中国大陸との接点として、ひいては日本列島の成立の過程を示唆する重要なものとして注目されている。

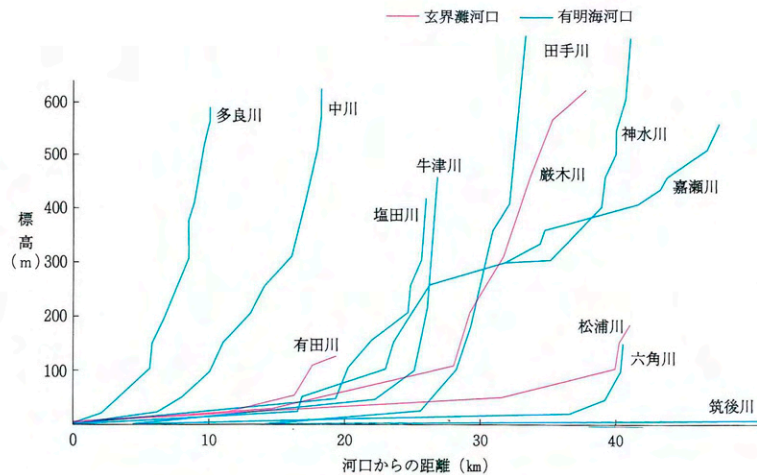
佐賀県の河川概況

県内の河川は、筑後川、嘉瀬川、松浦川、有田川、六角川、塩田川（多良岳を水源とする中小河川を含める）を中心とした6つの水系に大別することができる。それぞれ独自の景観を持ち、生息する淡水魚類相も異なる。

水系名	源流部	下流部	河口	主な河川
有田川水系	松浦・杵島丘陵地帯	———	玄界灘	有田川
松浦川水系				松浦川
				厳木川、玉島川
筑後川水系	脊振・天山山岳地帯		有明海	田手川、城原川
嘉瀬川水系				嘉瀬川
六角川水系	松浦・杵島丘陵地帯			六角川
塩田川水系				塩田川
	多良岳山岳地帯	———		中川、浜川

このうち、脊振・天山山岳地帯、多良岳山岳地帯を水源とする河川は、急峻な上流部を持ちヤマメなどの溪流の魚が生息する。これに対し、松浦・杵島丘陵地帯に水源を発する河川は中流域が発達する。塩分濃度の低い有明海に注ぐ河川には、ヤマノカミなどの他では見られない魚が生息する。このうち、佐賀平坦地を流れるものは長大な感潮域と発達したクリークを持つため、北部九州特産魚やタナゴの仲間が豊富である。これに対し、多良岳に源を発する河川の多くは源流から一気に海まで流下するため河口付近まで礫底となっており、純淡水魚は乏しいがヨシノボリ類が多くウツセミカジカも生息する。また、玄界灘に注ぐ河川にはサケやイトヨなどの冷水性の回遊魚が見られる。

佐賀県は小さな県でありながら、このような理由で有数な淡水魚の宝庫となっている。しかし、近年ではほとんどの河川には砂防ダムや河口堰など多くの堰で分断され、クリークや用水路は圃場整備により巨大で単調な水路へ



と変貌した。また、ジャンボタニシ対策のため、水田からの排水が塩び管に切り替えられ産卵のため遡上できる水田も減少してしまった。こうした生息環境の変化のほか外来魚の侵入などによって、県内の淡水魚類相も大きく変貌していくことが予想される。

このような中で、本書は 20 世紀末期の県内の自然の記録として貴重なものとなることであろう。また本来は、このような本は私のような若輩者ではなく、専門家による綿密な研究に基づいて出版されるべきものであると思うが、教育の現場で若い人々の自然離れが急速に進みつつあることを実感し、何らかの形で世に公表される必要性を痛感した。また、本書が世に出ることで 21 世紀を担う子供たちの中から興味を持ってくれる人間が現れることを期待して、不完全なものながら世に出すこととした。

また、本書が出版されるにあたっては、多くの人の惜しみないご協力とご尽力があったことを末筆ながら明記し謝意を表す。なお、この本は 1993 年 8 月から 1995 年 4 月まで佐賀新聞に 78 回に渡って連載された「さかの淡水魚」を加筆修正したものを元に、新たに 15 種を加えたものである。

田島正敏

改訂にあたって

1995 年に佐賀新聞社より小著「佐賀県の淡水魚」を世に出して 19 年経つ。この間、河川工事では多自然型工法が当たり前になり、さらに淵の再生や水田魚道が作られるなど、自然環境への関心や配慮はさらに高まった。また、小著はとうの昔に絶版となり、プレミアムをつけても手に入らない状態になっているらしい。淡水魚の研究も遺伝子やタンパク質の相違に着目した研究により、これまでの色斑型や地方型とされてきたものの多くが別種、別亜種へと格上げされたり、名前や分類が変更されるなど多くの成果がもたらされた。また、県内の分布状況も移入種の分布拡大を含め、新たな分布記録も相次いだ。

こうした中、佐賀県立図書館より小著の電子書籍化の相談を受けた。どうせならば内容の改訂も行いたいとの提案にも快諾をいただき、このような形で再び世に出すことができたことに感謝したい。

改訂にあたっては、1995 年から 2013 年までの間に県内で新たに記録された魚のうち、15 種・亜種と 1 雑種を新たに掲載した。また、既掲載の 93 種・亜種のうち、新たな知見が得られたものは、新たに加筆した部分の文字色を変えることで区別できるように配慮した。なお、1995 年版「佐賀県の淡水魚」を PDF 形式で見られるようにしているので比較していただければ、削除した部分についても調べることが可能であろう。また、環境省版第 4 次レッドリスト（絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト）において今後の生存が危惧されているものについては、レッドリストのカテゴリー名を明記した。

最後に、電子版作成にあたっては（株）ドミック α の草場氏と米満氏に大変お世話になったこと、写真や魚、生息情報の提供など多くの方々のご協力があったことをここに記し、謝意を申し上げる。

2014 年 3 月 31 日 田島正敏

大切にしたい^{ふるさと}故郷の淡水魚

木村 清朗 (元九州大学農学部教授)

私は大学に入るまで、杵島郡山内町にすみ、子供の頃から釣りが好きであった。佐賀県の淡水魚類をとくに勉強したわけではないが、故郷の魚はやはり懐かしい。

本県の北は玄界灘に、南は有明海に面している。玄海には東から玉島川、松浦川、有田川などが、有明海には筑後川、嘉瀬川、六角川、塩田川、鹿島川、多良川などが注いでいる。玉島川はアユ釣りの発祥の地とされ、玉島神社には「神功皇后垂綸の石」が祭られ、その伝説は全国に流布されている。奈良時代になると、大伴旅人、家持父子による玉島川のアユ釣りの歌が、万葉集に集録されていて有名である。当時はうら若い女性がアユを釣っていたようである。どんな方法によったのであろうか。

佐賀県の山はもともと浅く、森林があまり発達していないので、筑後川下流部を除けば、どの川も規模が小さく、水量豊かとはいえない。常に、慢性的な水不足に悩んだといわれ、藩政時代から治水、利水工事が行われてきた。

唐津藩主寺沢志摩守広高が造った大黒井手(井堰)、佐賀鍋島藩の成富兵庫茂安による馬頭井手は、いずれも松浦川中流にあり、現在も補修されながらその機能を発揮している。大黒井手上流の伊万里市桃の川で、40年も前に私はアユの友釣りを楽しんだことがある。結構、型が良かった。魚には比較的やさしい堰だったのであろう。また、この井手まで3月に唐津湾から遡ってくるウグイ(イグ)は、全長30~40cmで、雄の腹部は赤くなって美しい。ハりに掛かるとスピードがある強い引きをみせ、爽快そのもの。今も夢にでてる楽しい思い出である。

本県の川は小なりといえども、上流ではヤマメが、中流ではオイカワ、コイなどが釣り人達を楽しませている。玄海側の川へ、時々、冷水性のサケが秋に遡上する。古老によれば、産卵もしていたらしい。中流のヨシや水草の蔭では、オヤニラミが静かに胸鰭と目玉を動かしていた。その俗称も面白い。鰓蓋の縁で緑色に光る斑紋を「夜の目」、本当の眼を「昼の目」に見立てて、山内町あたりではヨルメヒルメと呼ぶ。近頃は希少種の仲間入りをしている。

子供の頃、このオヤニラミ様を焼いて食べた記憶もある。今なら確実に罰が当たるであろう。

有明海側では中下流域に佐賀平野が広がり、わが国でも有数の、穀倉地帯になっている。古くから干拓が行われた関係で、網の目のように灌漑用のクリークが発達し、ほとんどの河川が繋がっている。これらの地域を巡ると、成富兵庫の名前を聞く所が多い。

このような先達や維新以降の事績には、技術的な制約もあり天然の石や土と水がそれぞれの連携を失っていない。クリークについていえば、環境が変化に富み、水草類がよく繁茂して平野部の魚類、とくにコイ科の仲間の生息や繁殖に絶好の場を提供することになった。コイ、フナ類、美しい体色のタナゴ類、美味しいオイカワやカマツカ、産卵が面白いツチフキ、これらを狙うナマズ、ウナギ、カムルチーなどの楽園であった。

また大小の溜地や近年建設されたダム湖などには、コイ以外に他地方からゲンゴロウブナ、ワカサギ、あるいは外来種のブラックバスやブルーギルなどが、移殖されている。

淡水魚類に関していえば、大陸に近いこともあって、佐賀、福岡の両県は九州でも最も種類が豊富である。本書の主な執筆者、田島正敏教諭(県立白石高校)によれば、移入種も含めて29科88種5亜種に及ぶ。結構多様性に富んでいる。そして、川やクリーク、溜地などにすむこれらの魚類は、戦後しばらく県民の重要な蛋白源であったことを忘れてはならない。

有明海は比較的浅く、最大潮位差6mをこえる。広大な干潟ができるなど、生物の生産力が高く、水産上重要な水域である。その環境条件は、朝鮮半島西岸や中国大陸東岸によく似ている。魚類相をみると、海と川を往来するエツ(カタクチイワシ科)、アリアケシラウオ、アリアケヒメシラウオ属、ヤマノカミ(カジカ科)、ハゼクチ、ムツゴロウ(ハゼ科)などが大陸と共通の特産種である。

純粋の淡水魚では、カゼトゲタナゴ、絶滅危惧種のヒナモロコ(コイ科)は、日本の他地方では決してみられない。

わが国の淡水魚のほとんどは、地史的に古くから大陸と関係が深いのだが、上記の特産種の多くは佐賀、福岡県を中心にしてすむのみで、比較的新しい時期に九州へ分布してきたのであろう。その理由は、第四紀の数回にわたる

氷河の盛衰と関係づけられている。氷期には広大かつ厚い氷床が地球の高緯度地方に発達したため、温暖な現在より海水面が 120m、研究者によっては 200m も下がっていたという。その際に九州北部と、朝鮮半島や大陸とが地続きになって各水系がつながり、魚類相を交換したらしい。旧ソ連邦の故 G.U. リンドベルク博士は、このような立場で、世界各地の淡水魚や汽水魚の地理的分布を明快に説明している。

さて、佐賀県では近年、水辺が急激な都市化の波に吞まれ、ダムや河口堰、取水堰の建設、河川工事、水の富栄養化、クリークの統合、整備などにより、生息魚類各種の減少が昨今、取りざたされている。ヒナモロコにいたっては生存しているかどうかあやふやだ。メダカもドジョウも減った。エツは漁業の対象として、将来も大丈夫だろうか。心配の種が尽きない。

それでも私たちの足元を注意深くみると、まだまだ淡水魚 類の姿を結構目にすることができる。本書では、そのような魚類がたくさん美しい写真とともに紹介されていて、とても楽しい。私は、どうかこのような仲間とその生息環境が、無事に 21 世紀に引き継がれることを切に望むものである。限りない欲望と便利さの追求に、少しブレーキが必要ではあるまいか。

(きむら・せいろう 福岡市在住、農学博士、武雄高一鹿兒島大水産学部—九州大大学院農学研究科水産学専攻博士課程単位取得退学、農学部助手、助教授を経て教授、1995 年 3 月定年退官、2009 年 6 月 10 日逝去。主な研究分野は日本産淡水性サケ・マス類の生活史に関する研究、西日本における淡水魚類の生態学的研究、淡水魚類による環境評価に関する研究)

淡水魚とは

淡水魚といえば、普通に考えれば淡水に住む魚ということになる。しかし、淡水魚は淡水のみで生活するのではない。ご存じのようにアユは秋にふ化した稚魚が春まで海で生活するし、ウナギはフィリピン沖の深海底に戻って産卵する。また、一般に、海水魚と思われているものでも汽水域から純淡水域に侵入するものも意外と多い。以下に、生活環による淡水魚のグループ分けを述べる。なお、円口類(ヤツメウナギの仲間)は厳密には魚ではないが慣例に従って魚として扱っている。

純淡水魚

淡水で一生を過ごす正真正銘の淡水魚で、コイやドジョウの仲間やナマズやギバチの仲間などの他にカワヨシノボリなどの陸封魚も含まれる。海水への抵抗性がほとんどなく、海に入ることができないため、分布の拡大には氷河期などの海岸線が後退した時期に、複数の河川が合流して 1 つの大きな河川や湖になることが必要である。現在の分布は、日本列島が形成されてきた過程のような過去の地史を物語っているものと考えられている。

通し回遊魚

淡水と海の間を必ず往復する魚のことで、サケの仲間、ハゼの仲間、などがこれにあたる。さらに産卵との関係から、ウナギやヤマノカミなど海に入って産卵するものを降河回遊魚。サケ、イトヨなど産卵のために川に上るものを遡河回遊魚。また、アユやヌマチチブなどのように産卵とは直接関係なく、遡河または降河を行うものを両側回遊魚と細かく分けることがある。

周縁性淡水魚

ボラやスズキのように通常は海で生活しているが、時として淡水域や汽水域にも侵入してくるものや、マハゼのように汽水域の魚としか呼べないものも含まれる。

用語解説

亜種 (あしゅ)

離れた地域に生息する一見別種に見える 2 つの集団が、交雑して孫以上の子孫を残すことができる場合に用いる。

脂ビレ (あぶらびれ)

サケ科やギギ科などの背ビレと尾ビレの間にある鰭条のないヒレ。

アノモシーテス幼生 (あんもしーてすようせい) ヤツメウナギ類の幼生。目と口器は未完成で、ろうと状の口をもつ。

移入種 (いにゅうしゅ)

他地域から人為的に持ち込まれた種。本来、外来種と同義語であるが、外来種がその語感から国内他地域からの持ち込みを含まないニュアンスがあるために、外来種に代わって使用されるようになった。

咽頭歯 (いんとうし)

咽頭(口と消化管の間)にある歯。コイ科魚類に発達する。

浮き石 (うきいし)

河床に見られる石で下面が土砂に埋没していないもの。魚の隠れ家や餌場などとして利用されることが多い。

栄養塩類 (えいようえんるい)

植物や植物プランクトンが必要とする無機塩類 (肥料)。

塩水浴 (えんすいよく) 1～3%の食塩水に1～10分ほど泳がせて寄生虫などを除去する方法。

追い星 (おいぼし) 繁殖期に見られる皮膚が硬く変化した白色の小点～イボ状の突起。雄に現れるものが多い。

回遊 (かいゆう)

海や川に生息する動物が、成長段階や環境の変化に応じて生息場所を移動する現象。

学名 (がくめい)

ラテン語で表記された世界共通の名前。通常は、属名+種小名の2つの単語で表される。研究の進歩によって度々変更される難点がある。

型 (かた)

亜種ほどの違いは見られないが、若干の違いが見られる場合の区別として用いられる。後の研究によって区別の必要が無くなることもあるが、種や亜種に昇格することも多い。

感潮域 (かんちょういき)

河川の中で潮の干満の影響を受ける水域のこと。汽水域とその上の淡水域の一部も含まれる。有明海湾奥部では淡水 (あお) 取水を行っていた所は感潮域に含まれる。

鰭条 (きじょう)

ヒレに見られる筋。棘と軟条のこと。

汽水域 (きすいいき)

河口付近に見られる海水と淡水の混じりあった塩分の薄い水域のこと。塩分に触れると河川水に含まれていた物質が凝集沈殿するため、濁泥のあるところと考えてもよい。

鰭膜 (きまく)

鰭のうち、鰭条以外の膜状の部分。

棘 (きよく)

鰭条のうち、硬くて先端のとがっているもの。

銀毛 (ぎんけ)

サケ・マスの仲間で河川で生活していた幼魚が、降海に備えてパーマークが消失して銀一色になったもの。スモルトともいう。

ケイ藻 (けいそう)

ケイ酸質の殻を持つ単細胞植物。濁泥の表面の黄土色や河川中流域の石の表面のヌメリはケイ藻の集団による。水生昆虫や魚の餌となる。

硬骨魚類 (こうこつぎょるい)

硬骨質の骨格を持つ魚の仲間。上あごと下あごの両方をもつ魚のうち、サメやエイの仲間(軟骨魚類)を除くすべての魚を指す。

国内移入種 (こくないいにゅうしゅ) →移入種

固有種 (こゆうしゅ)

世界中で狭い特定の地域にしか生息しないもの。

婚姻色 (こんいんしょく)

産卵期に現れる目立つ色合いのこと。野生動物では、雄に現れるものが多い。

鰓耙 (さいは)

魚のエラの鰓弓から前方に伸びる突起。味覚を感じる組織があり、餌を濾しとる働きをする。一般に大きな餌を食べる魚では間隔が広く、小さな餌を食べる魚では間隔が狭くなっている。

在来種 (ざいらいしゅ)

外来 (帰化) 種や国内でも別な水系から移入された種に対して、もともとその地域に生息していた種。

砂泥底 (ざでいてい)

砂と泥が混じった状態の水底。

砂礫底 (されきてい)

礫は石のことで、砂と礫 (小石) が混じった状態の水底。

仔魚 (しぎょ)

ふ化してから各鱗条数が成魚と同じになるまでの個体。

脂瞼 (しけん)

眼や眼の周囲に見られる透明な厚い膜。前方視界の確保や水の抵抗を抑える働きがある。

止水域 (しずいいき)

湖沼や人工的に作られたため池やクリークなど流れのほとんどない水域。

沈み石 (しずみいし)

河床に見られる石で下面が半ば土砂に埋没しているもの。ハゼ科などの産卵床となる以外は、利用する魚はあまり多くない。

すみわけ

同じ生活様式をもつ2種が生活の場所や時間を違えることで、競争を回避して共存を可能としていること。

瀬 (せ)

川の浅いところを示す。魚にとっては餌場として機能することが多い。白波が立つような場所は早瀬といい、底質は浮き石になっていることが多い。水面が穏やかな場所は平瀬といい、底質は沈み石になっていることが多い。

側線 (そくせん)

水流や水圧を知覚する器官。多くの魚の体側に点列状に並んでいる。

側扁 (そくへん)

タイやコノシロのような体高に対して左右方向の幅が薄い魚の体型。(「魚の各部分名称」を参照)

遡上 (そじょう)

魚などが流れをさかのぼること。海から川への移動の他、下流から上流への移動、クリークから水田への移動などがある。

大陸系遺存種 (たいりくけいぞんしゅ)

中国大陸と日本が陸続きだった時代に、中国大陸から日本に分布を拡大したものの、その後の環境の変化で減少し、現在では高山や有明海のような限られた場所に生き残っているような種。

託卵 (たくらん)

子供の世話をする動物の巣を乗っ取り、自分の子供の世話をさせること。オオヨシキリに託卵するカッコウなどが有名である。

稚魚 (ちぎょ)

鱗条数が成魚と同じになってから、鱗が完成するまでの個体。

地方名 (ちほうめい)

標準和名に対して方言での呼び名のこと。同じ呼称でも地方によっては別なものを指していたり、利用価値の低いものは区別せず数種を混称していたりするので注意を要するが、その地方の文化と生き物との関わりや利用度を推測することができる点では重要である。

潮間帯 (ちようかんたい)

大潮の満潮時には海面下になるが、干潮時には干出するような場所。

底生魚 (ていせいぎょ)

カレイやヒラメ、多くのハゼの仲間のように、通常、水底に接して生活している魚。

軟条 (なんじょう)

鱗条のうち先端のとがついていないもの。柔らかく節がある。最後の2本の軟条は付け根で癒合していても1本と数える。

年魚(ねんぎょ)

シロウオやハゼクチのように誕生から1年で一生を終える魚。ただし、古文書では特にアユのみを示している。

パーマーク

サケ・マスの仲間で淡水で生活する幼魚期の体側に共通に見られる小判型の模様。サクラマスの河川残留型であるヤマメなどは成熟してもパーマークは失われない。

標準和名(ひょうじゅんわめい)

日本国内で通用する標準的な生物名。学名と異なり変化することがない。

富栄養化(ふえいようか)

栄養塩類が増加すること。また、そのような湖を富栄養湖といい、植物プランクトンによつて緑色に濁っている。

淵(ふち)

川で水深が深いところ。県内では「がぶろ」とよばれ、魚の住みかになつていることが多い。瀬よりも流速が遅いため、シルトを堆積させるため健全な淵のある河川では瀬も健全に保たれる。淵ほど深くない場合には「トロ」と呼ばれる。

淵尻(ふちじり)

淵の終わりの水深が浅くなる場所。淵から水が流れ出すところ。

浮泥(ふでい)

粘土粒子にミネラルや有機物が結合して成長し、沈殿するようになったもの。潮流などで簡単に舞い上がるので有明海特有の濁りの原因であると同時に、有明海の高い生物生産性や水質浄化能力の原因となっている。

PH(ペーハー)

水素イオン濃度のことで、PH7が中性。それより大きい方がアルカリ性、小さい方が酸性。PH1、14が最も酸性度、アルカリ性度が強い。

変態(へんたい)

イモムシがさなぎになったり、さなぎがチョウになるような、生物の成長過程で見られる形態の大きな変化。

未成魚(みせいぎょ)

うろこが完成してから最初の成熟を迎えるまでの個体。

幼魚(ようぎょ)

ふ化してから成魚になるまでの個体を一般的に示す。厳密な意味では使用しない。

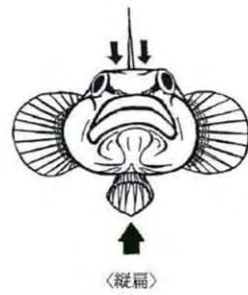
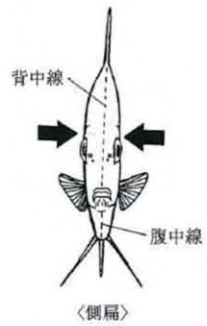
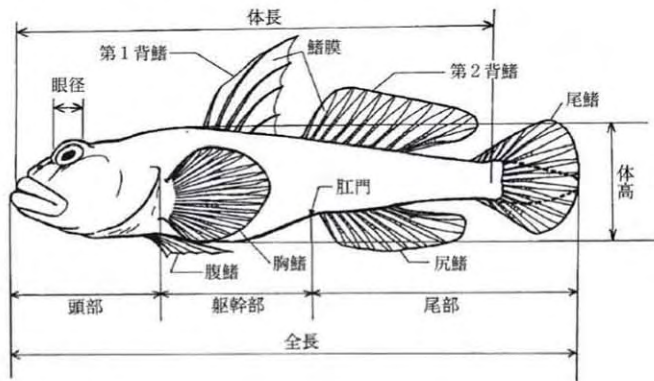
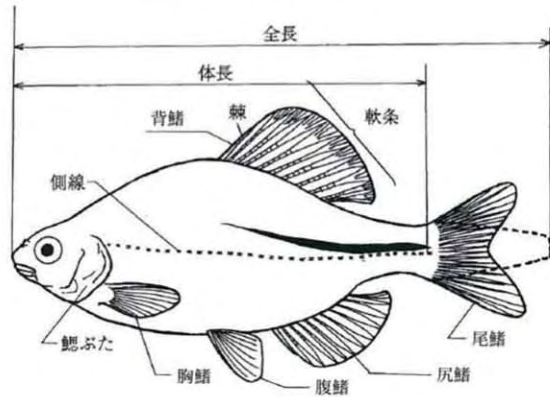
陸封(りくふう)

本来は海と淡水の間を回遊していた魚が、何らかの原因で一生を淡水で過ごすようになること。

レプトセファルス幼生(れぷとせふゐるすようせい)

カライワシ上目(ウナギ目、カライワシ目など)の魚に共通する柳の葉のような形の平たい透明な幼生。レプトケパルスとも発音する。

魚の各部名称



スナヤツメ南方種

Lethenteron sp.S

ヤツメウナギ科

絶滅危惧Ⅱ類

- 地方名 やつめうなぎ、めくらうなぎ(幼生)
- 大きさ 20cm
- 生息域 中～下流域

ヤツメウナギの仲間は、国内で回遊性のミツバヤツメとカワヤツメ、一生を淡水で過ごすシベリアヤツメとスナヤツメの4種が知られている。県内で普通に見られる20cmほどのヤツメウナギはスナヤツメと考えるとほぼ間違いない。しかし、これらは互いによく似ており、その区別は吸盤状の口器やその歯の形を見る必要がある。

産卵期は、4月～6月とされ、上流の砂礫底で産卵する。卵からふ化すると3年間を盲目のアンモシーテス幼生として川底に潜って、泥底の有機物を食べて生活する。

4年目の冬には眼、えら穴とも完成して成体になるが、他のヤツメウナギ類と異なり吸血生活は行わない。変態と同時に消化管は退化し餌をとらなくなる。春に産卵を終える頃には体長も3cmほど短くなって死亡する。

県内では多布施川に多く、佐賀市水道局付近では3月～4月にかけて石に口器で吸着している姿が岸辺から観察できる。また、1993年下流の佐賀市伊勢町の小水路で昼間に遊泳中のレンガ色のアンモシーテス幼生が捕獲されている。この他、巖木川や田手川にも生息情報がある。田手川ではアンモシーテス幼生を、「めくらうなぎ」と呼んでいる。

「かんの虫」の薬として、まごたろうむし(ヘビトンボの幼虫)の代用として利用される。

生物に関する遺伝子や酵素の変異等を使った研究の進展は近年めざましく、淡水魚の系統の分類についても、様々な新しい知見が得られるようになった。スナヤツメについても同様で、これまで形態的特徴から単一種とされていたスナヤツメは、中部地方以北に分布する北方種と秋田以南に分布する南方種の2種が含まれていることがわかった。このような種のことを隠蔽種といい、今後様々な生物において発見されていくものと思われる。ちなみに、北方種はカワヤツメやシベリアヤツメと近縁で、南方種はそれらとはやや遠縁に当たるとされている。

県内の分布については上記のほかに城原川、安良川、佐賀市久保泉町から神埼町にかけてのクリークからも確認されており、県内の扇状地地形に広く分布するものと思われる。本種の幼生はツルヨシが茂るような湧水のあるような微細な砂の中に潜って生活しており、その確認にはそうした所を掘る必要がある。



1993.4.3 多布施川(佐賀市)



口器 1993.4.3
多布施川(佐賀市)



1995.4.24
アンモシーテス幼生
眼は皮下に埋没しエラ穴は溝状
多布施川(佐賀市)
中原正登氏捕獲

カワヤツメ

Lethenteron camtschaticum

ヤツメウナギ科

絶滅危惧Ⅱ類

- 地方名 やつめうなぎ
- 大きさ 50cm
- 生息域 中～下流域、玄界灘側にまれに見られる

魚類という言葉は、いわゆる普通の魚である硬骨魚類とサメやエイなどの軟骨魚類の両方を示すことが多い。しかし、このほかにも軟体動物であるタコやイカをはじめ、昆虫と同じ節足動物であるエビやカニなども魚扱いされることも少なくない。国外でも同様で、クラゲの英名はジェリーフィッシュ、イカはカトルフィッシュといった具合である。

ところで、円口類に分類されるヤツメウナギもウナギどころか魚ですらない。あえて言えばカエルやサンショウウオを魚と呼ぶのに近い。しかし、軟骨とはいえ脊椎骨をもつ遊泳生物なので、魚として扱うことが普通である。

1993年3月上旬、唐津市の半田川で47cmのカワヤツメが1個体捕獲された。写真の個体はこの時のものである。カワヤツメは本来、日本海側では島根以北に、太平洋側では茨城県以北に分布するとされており、県内の河川に遡上して来ることはまれである。

ヤツメウナギ類の幼生は、眼が未完成で7対のえら穴もまだ溝状につながっており、アンモシーテスと呼ばれる。ふ化後、1年ほどは河川中下流の軟泥底に潜って生活し、変態(眼やえら穴が完成)して降海する。海では吸盤のような口と鋭い歯で、大型の魚に食いつき、吸血生活をする。2～3年の海中生活の後、夏場に河川に遡上するが餌をとらず、春先に産卵して死亡する。

遡上期のものはかなり美味で、新鮮なものは蒲焼きにする。多量のビタミンAを含み、「とり目(夜盲症)」の薬として知られている。



1993.3.8 半田川(唐津市)熊本常夫氏捕獲



口器 1993.3.8(同上)

カライワシ

Elops hawaiensis

カライワシ科

- 地方名 ー
- 大きさ 120cm
- 生息域 河口・汽水域

本来は海水魚であっても時々淡水域にやってくる魚や海水と淡水の中間の汽水にしか見られない魚などをあわせて周縁性淡水魚という。カライワシはそのような魚の1つで、東シナ海、西太平洋、ハワイ諸島、東インド洋などに広く分布する暖海沿岸性の海水魚である。

本種はサケなどと違って、必ずしも淡水生活は必要ではないのだが、幼魚は汽水域や時に淡水域まで侵入する。長い回遊の旅の途中で有明海にやってきて、さらに餌を求めて河川に侵入するのだろうか、これまで鹿島川水系の中川や黒川の感潮域の上限付近で数個体を捕獲している。

眼にはボラのように脂けんがあり、口は大きくて、上顎は眼の後端よりもさらに伸びている。深く切れ込んだ尾びれをもつスマートな体型で、成長すると全長 1.2m、体重は 10kg 程に成長する。

カライワシはイワシの仲間のような和名であるが、ニシン目のマイワシなどとは全く系統が異なり、ウナギやマアナゴのようにレプトセファルス幼生期があるため、ウナギに近い仲間だと考えられている。

産卵は沖合いで行われると考えられているが、産卵場所などは分かっていない。釣りなどであがっても、小骨が多いため国内ではふつう食用に利用されることはない。



1998.9.22 鹿島川水系黒川(鹿島市)

ニホンウナギ

Anguilla japonica

ウナギ科

絶滅危惧 I B 類

- 地方名 おなぎ、びりんそー、びろっそ、よしのこうなぎ、あお、くろ、ごま、がねくい、かにくい、ぎんうなぎ、くちぼそ、しけうなぎ、そうめんご(しらす)
- 大きさ 100cm
- 生息域 上流～河口・汽水域、ため池・クリーク

ウナギは12世紀頃までは「むなぎ」と呼ばれていたらしい。「むなぎ」には「棟木」「胸黄」「胸開き」など諸説ある。

ウナギを知らぬ人はいないが、その産卵生態は最近まで不明であった。体内卵が見つからないため寄生線虫が子供と間違えられて胎生と信じられたこともある。古くは、アリストテレスが「地底からミミズがわきウナギとなる」と書いているし、日本にも「山芋変じてウナギとなる」という言葉がある。

現在ではマリアナ諸島付近の中層で産卵し海流に乗ってアジア各地に分散すると考えられている。仔魚は柳葉状でレプトセファルス幼生と呼ばれ、近海で変態してウナギ型のシラスになり河川に遡上する。うろこが完成してクロコと呼ばれる頃には著しく遡上力を増し、普段は河川と連絡のないようなため池にまで入り込む。

昔から利用度の高い魚で、県内でも多くの地方名を持つ。玄海側では「あお」、「くろ」、「ごま」の3つのうちで、「あお」を最良とし、「ごま」は最下級とし養殖の対象としない。

これに対し、有明海側では有明海のカキ礁に見られる「しけうなぎ」を最良、その次に筑後川に多い「あお」を良とし、「がねくい(くろ)」を最下級とする。かつて養殖が行われない頃、東京築地市場では有明海沿岸産のウナギは他の産地の約2倍で取引されていたという。

ニホンウナギの産卵場については2005年6月に東京大学の塚本教授らの孵化直後のプレレプトセファルスの大量捕獲によりマリアナ海嶺のスルガ海山であることがわかった。

近年、ニホンウナギのシラスの河川への遡上は激減しており、とうとう環境省の第4次レッドリストにおいて絶滅危惧 I B 類とされるまでになった。現在、国内で販売されるウナギの蒲焼きにはニホンウナギのほか、ヨーロッパウナギ(アンギラ種)、ニューギニアウナギ(ビカール種)、アメリカウナギ(ロストラータ種)等がある。ちょっとややこしい話になるが産地表示には「国産のアメリカウナギ」や「中国産のニホンウナギ」等というものがある存在することになる。いずれにせよ、これらのウナギ類の中にはニホンウナギ以上に絶滅が心配されているものもあるので、早期の完全養殖が望まれるところである。



1991.10.27 嘉瀬川(佐賀市久保田町)



ウナギのシラス 1995.3.28 塩田川(嬉野市塩田町)

マアナゴ (レプトセファルス幼生)

Conger myriaster

アナゴ科

- 地方名 あなご、どくら
- 大きさ 12.5cm
- 生息域 河口・汽水域

「変態」という用語は、成長に伴って形態が変化することを意味する用語で、イモムシが蛹(さなぎ)を経てチョウになったり、オタマジャクシがカエルになったりすることを示す。魚にも変態するものがある。ヤツメウナギ科の魚は、アンモシーテス幼生から変態して成体(親)になるし、アナゴ科やウミヘビ科を含むウナギ目の魚も変態する例である。

これら魚の幼生は透明で偏平な柳の葉の様な形をしており、レプトセファルスと総称される。「薄い頭」を意味するこの名称は、これらの幼生が新種とされていた頃、新属の呼称として設定されたものであった。その後、これらがウナギやアナゴ類の幼生であることが判明して以降は、属名としての価値は失われているが、現在では単に柳葉型の幼生を示す名称として使われている。

一口にレプトセファルス幼生と呼んでも、親の種類数だけ幼生の種類があるわけで、それが何の幼生なのかは体形や筋節数、微少な色素胞の有無などで区別される。

ウナギのレプトセファルス幼生もマアナゴの幼生とよく似るが、こちらは約6cmでシラスウナギに変態してしまう。逆に、マアナゴの8.5cm以下の幼生は、まだ発見されていない。

いずれにせよ「鮨ネタ」のアナゴや「蒲焼き」になるあのウナギも子供の頃はこのような姿だったとは、にわかには信じられない体形である。



レプトセファルス幼生 1994.3.29 半田川(唐津市) 熊本常夫氏捕獲



レプトセファルス幼生 1994.3.29 (同上)

コノシロ

Konosirus punctatus

ニシン科

- 地方名 おやのしゃくせん、このしろ、つなし、はびら、はびろ
- 大きさ 30cm
- 生息域 河口・汽水域

夏に松浦川河口の松浦大堰の魚道を見ていると、網を入れなくても多くの魚を観察することができる。40cm ほどの黒色の大型魚の大群はボラである。また、そのわきの浅瀬ではヨシノボリ類の稚魚の群が流れに抗して遡上の機会をうかがっている。流れの速い魚道のコンクリート壁の藻をついているのはセスジボラ、ときどき姿を現すのがヒイラギやクサフグといった具合である。それらに混じって3～4cm ほどのスリムな小魚が数十尾の群をなして、足下の急な流れに逆らって上っていく姿が見える。それがコノシロの幼魚である。

体は側扁しており腹縁は鋭い稜線を形成し、全体として包丁を思わせるような形になっている。また、背ビレの最後方の軟条が糸状に長く伸びているのが最大の特徴である。

ニシンの仲間は主にプランクトンを食べるプランクトンフィーダーであり、飼育にあたってはミジンコやブラインシュリンプ(アルテミア)を与えていたが、量の確保がたいへんである。ある日、試しに与えてみたミジンコウキクサ(1mmほどにしか成長しないウキクサの一種)を喜んで食べてくれたのは助かった。口を開けたまま、小刻みに上下に頭を振りながら目まぐるしく泳ぎ、ものの数分もたつとミジンコウキクサはすべてなくなってしまう。

鮭ネタの「こはだ」は10cm 前後のコノシロのことである。また、コノシロの幼魚に似た「はだら」「もうかり」と呼ばれる魚はサッパのことで、岡山名物の「ままかり漬け」の材料にされる。県内では利用されないため、岡山に向けて出荷されているらしい。



幼魚 1994.8.11 松浦川(唐津市)



背ビレ後端の鱗条が伸張する 1994.8.11 (同上)

エツ

Coilia nasus

カタクチイワシ科

絶滅危惧 I B類

- 地方名 えつ、うばえつ
- 大きさ 60cm
- 生息域 下流～河口・汽水域、有明海側のみ

有明海は、泥の海というイメージがあるが、実際に泥深いのは有明海の中でも湾奥部だけで、締め切りにより消滅した諫早湾の他は、佐賀県の沿岸くらいである。この水域が、有明海の生物相の独自性を維持しているといっても過言ではない。

カタクチイワシ科のエツも世界中で、有明海湾奥部だけに生息する日本固有種である。

体色は銀白色で背側が淡青褐色で、生時は金色の輝きがあるが、死ぬと色はさめてしまう。体形は腹縁が鋭く、刀のような体形である。胸ビレの条が数本、糸状に著しく伸長している。主上顎骨の後部も立派なヒゲを思わせるように後に大きく張り出しており、とても「煮干し」の材料にされるカタクチイワシの親戚とは思えない。

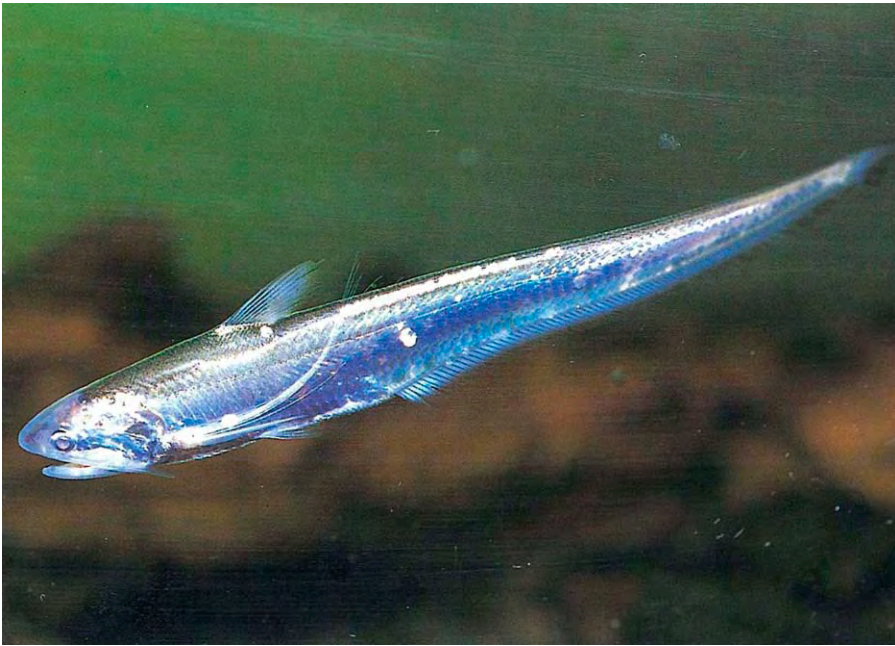
有明海沿岸各地には弘法大師が流したヨシの葉がエツになったという伝説もある。

産卵は筑後川と六角川の感潮域の上限の淡水域で行われる。河口付近でふ化した稚魚は、河川やクレークで成長し秋に海に入る。

しかし、主な産卵場である筑後川では、産卵群自体が漁の対象となっている上に、筑後大堰によって産卵域を大きく減らしている。六角川の場合は、既に完成している河口堰が稼動すれば産卵場そのものが消失するところであったが、幸運なことにこちらの淡水化は回避された。



1995.3.14 塩田川(鹿島市) 藤井秀男氏提供



胸ビレは糸状に伸びる 1995.3.14 塩田川(鹿島市) 藤井秀男氏提供



主上顎骨は伸長する 1995.3.14 塩田川(鹿島市) 藤井秀男氏提供



1995.3.14 (同上)

エサをこしとるための鰓耙
1995.3.14 (同上)



幼魚 1991.8.4 佐賀江水系のクリーク(佐賀市)

コイ

Cyprinus carpio

コイ科

- 地方名 こい、のごい、ひごい、まごい
- 大きさ 100cm
- 生息域 上流域下部～河口・汽水域、ため池、クリーク

水中では屈折率の違いからあらゆるものが大きく見える。慣れない頃はすべてのものが陸上の1.5倍から2倍に見えてしまうものだ。大学の卒業論文のため、潜水調査をしていた時のことであるが、川岸のヨシの根元のえぐれにカワムツの稚魚を百数十尾を数えたところで、その薄暗い奥に何か気配がした。おそるおそる首を突っ込んでみると、直径3cmほどもありそうなる模様様の壁があった。それをたどっていくと、ギョッとするほど大きな魚の眼がじろっとこっちを見ていた。冷静に考えると80cm程度のコイだったと思うが、その時は1.5m位に見えていたわけである。この時以来、川の水を飲むことに抵抗はなくなったように思う。

コイはヒゲがあるのが特徴のようにいわれるが、2対つまり4本のヒゲを持っていることはあまり知られていない。前方の1対は短く、後方のヒゲが長く目立つ。

昔から馴染みのある魚で、以前は県内の平野部の水田では田植え後から夏季に水を落とすまで水田での養殖が行われていた。草取りの手間も省け、コイの成長も著しかったという。また、古くから観賞用に品種改良も行われており、様々な品種が創出されている。こうした飼育品種は、野生のコイ(ノゴイ)より体高が高くなっており、ヤマトゴイと総称されて区別されることがある。

コイ科の魚は口に歯を持たないため吸引摂餌を行う。そのかわり喉に咽頭歯を持つ。コイなどの大型魚は、この歯で貝類などもかみ砕いて飲み込むのである。その威力は10円玉をも曲げてしまうほどである。



1993.9.11 牛津川(多久市)



コイの顔 1993.9.11 (同上)

国内移入種

ゲンゴロウブナ

Carassius cuvieri

コイ科

- 地方名 ふな、へらぶな、げんごろうぶな
- 大きさ 62cm
- 生息域 下流域～河口・汽水域、ため池、クリーク

もともとは琵琶湖にのみ生息する日本固有種である。しかし、以前は成長が早いことから食用として、近年では釣りの対象として各地に移植され、全国に広まっている。

県内では昭和 8 年より、琵琶湖から取り寄せたものを増殖して放流された。その過程で、本家のものより「優しい面構え」に変異し「榮鮒」の名を頂戴している。

他のフナが雑食性でミミズを餌として釣るのに対し、ゲンゴロウブナはプランクトンフィーダーであり、芋や麩等で釣る。体もプランクトン食に適した形に特化している。例えば他のフナが水底をあさるために口が下向きに突出するのに対し、プランクトンを捕食する本種は前方にまっすぐ突き出す。消化管も 2 倍ほど長い。

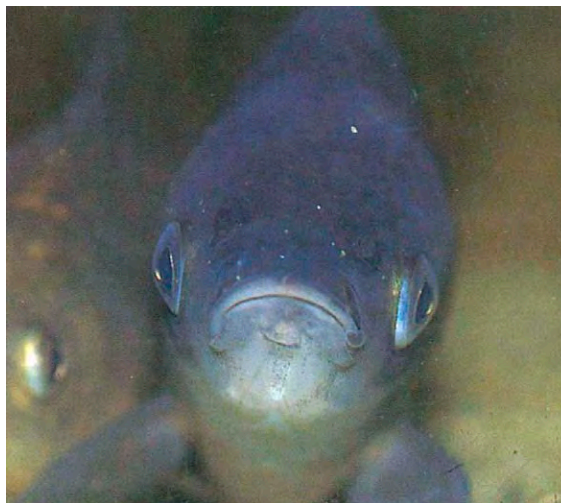
また、えらの前半分の白色の部分は水から餌をこし取る機能を持ち、鰓耙(さいは)と呼ばれる。この鰓耙は他のフナが 50 本前後なのに対して、プランクトン専食するゲンゴロウブナは 110 本ほどである。見分けがつかない場合は、この鰓耙の数を数えればよいのだが、厄介なことに野生化したゲンゴロウブナには鰓耙数が 90 本程度しかないものがある。在来のフナとのあいのことということで、釣り人はこれを「はんべら」「あいべら」等と呼んでいるようである。

プランクトン食性で成長が速いことから、富栄養湖の多いフィリピンへ移植され、地元の漁師から有り難がられ、当時の大統領夫人の名前を頂き「イメルダフィッシュ」の名を頂戴したそうである。

全国各地に移植され広く人為分布するようになったゲンゴロウブナではあるが、本来の分布域である琵琶湖・淀川水系では、ブラックバスなどの捕食のためか数を減らし環境省の第 4 次レッドリストでは絶滅危惧 I B 類に指定されている。



1992.9.12 田手川(神崎市神埼町)



ゲンゴロウブナの顔 1992.9.12 (同上)

クリークの片隅で

岩田 淡水 (佐賀市)

私が釣りの対象とするヘラブナのふるさは滋賀県の琵琶湖である。琵琶湖固有種のゲンゴロウブナがルーツで、このゲンゴロウブナを人工的に改良したのがヘラブナだ。明治時代、大阪の河内地方で大がかりに養殖、全国に出荷されるようになったため、カワチブナとも呼ばれているが、佐賀平野クリークや北山ダムにいるヘラブナは、佐賀市蓮池町の養魚家が昭和8年、琵琶湖産のゲンゴロウブナを親ブナとして改良し、佐賀の古い呼び名の栄（さかえ）を取って「栄ブナ」と命名、産卵フ化させた体長3センチの稚魚3万3千余匹を放流したのが始まり。いらい昭和39年まで県当局や内水面漁業協同組合などの手で放流が続けられ、環境に恵まれて在来のマブナをはるかにしのぐ旺盛な繁殖力で広がり、九州のヘラブナの宝庫といわれるまでの魚影となったものである。

佐賀平野のたたずまいは近年、大きく変容した。大小迷路のようだったクリークが土地改良事業によって統廃合され、人間的サイズを超える直線の水路に画一化された。それと一緒にネコヤナギなど田園に彩りを添えていた木々の緑も消えてしまった。集落が緑のベールを取りはずされて、不思議に遠く、そしてひとかたまりに見えるようになった。むかし、佐賀平野のクリークには「ヌクメ」という人工魚巢が設置してあった。ヌクメの語源は「温める」である。ぬくぬくと保護、温存するという意味だ。水落ち後ここに居着いたコイやフナを獲る堀干しと泥揚げは佐賀平野の農家の年中行事であり、風物詩でもあった。しかし、姿を消した。農業の変革、農村の生活様式の変化、都市生活者との混住化、それに伴う共同体の崩壊…時代の流れという言葉だけではすまされない寂しさを釣りが趣味の私は感ぜずにはおれない。

あの浮き草のホテイアオイ。堀の片隅に浮かび、淡紫色の花を咲かせていた間は、可愛い気もあった。が、いまはどうだろう。汚れた水の栄養をたっぷり吸収して、ネズミ算式に大繁殖し、堀を占拠している。浮き草稼業の気ままさなんて、うっかり気を許した人間を嘲笑するかのようではないか。

魚たちは本能的に敏感だ。こんな場所からは脱出する。だから堀によって

魚影の濃淡が極端だ。釣りのポイント選びのヒントにはなるが、悲しいことである。自然のなかに自らを没し、魚たちと対話する釣り。私たちは佐賀平野のクリークをこよなく愛している。クリークを単にかんがい用水確保という「有限の価値」化するのではなく、水遊びや釣りを通して語らう「無限の価値」ある場として生かすことが大切ではないだろうか。

(いわた・たんすい、本名・岩田誠、佐賀県内水面漁場管理委員、日本へら鮎釣研究会本部常任理事、同佐賀さかえ支部長)

堀

覚え書き

魚のたまり場「ヌクメ」

佐賀平野に網の目のように発達している堀（クリーク）は、江湖（えご）の名残だ。この堀に、所々に魚を集めるために「ヌクメ」が作られていた。堀底を深く掘り下げ、材木を立て並べ魚のたまり場としたもので、「カメ」とか「ガメ」とも呼ばれた。これはヌクメに割れた瓶（かめ）を入れることが多いことから命名されたいらしい。

規模は瓶を入れただけのものから、中には大工の手を入れ、棟を張り、ヌクメ内が小屋ぐらいのものもあったという。材料の木は松を1年間水に浸しておき、つるつるに皮がはげたものを使うと魚の付きがよく、位置は日当たりのよい深みで、入り口が南向きが最上とされた。

ギンブナ

Carassius sp.

コイ科

- 地方名 んぶな、ふな、ほんぶな、まぶな
- 大きさ 25cm
- 生息域 中流～河口・汽水域、ため池・クリーク

フナは急流以外なら、どこにでも見られる普通の魚である。裏を返せば、環境に非常によく適応するという点でもあり、事実大きな形態の変異が見られる。例えば、ため池のフナは体高も高くゲンゴロフナも顔負けであったりする。その上、分類も混乱しており意外に面倒な魚である。

金魚を含めて、他のフナ類の染色体数は100本(2倍体)であるが、ギンブナだけは、150本(3倍体)である。3倍体は種なしスイカの例のように、子孫を残すことができないはずなのだが、どっこい3倍体のギンブナは立派に繁栄している。

実は、ギンブナは雌性発生という特殊な発生を行う。精子は発生のきっかけを与えるだけで、受精の直後に精核は卵から放出され、父親の形質は遺伝せず、子供は母親とまったく同一な遺伝子を持つクローンとなる。そのため、発生の開始にはドジョウの精子さえも有効であり、その場合もあいの子を生じることがない。実際、関東地方のギンブナは雌ばかりだという。

フナ類は、日本産魚類のなかで分類するのが最も困難なグループとされる。国内のフナ類の分類は混乱してきたが、今のところ最も有力と思われるのは次のような分け方である。つまり、琵琶湖・淀川水系の固有種であるゲンゴロフナは独立の種であるとして、それ以外のフナ類(ギンブナ、ニゴロブナ、ナガブナ、キンブナ、オオキンブナ)は同一種の別亜種であるとし、このうち3倍体で雌性発生をするものをギンブナとする考え方である。2倍体のフナと3倍体のフナは鰓耙数や赤血球の大きさ(2倍体は15 μ m以下、3倍体は16 μ m以上)等でも区別できる。九州にはゲンゴロフナの他にはギンブナとオオキンブナが分布するとされていたが、これまで九州のオオキンブナは各部の数値がギンブナと重複が大きいとされており、特に区別が困難な原因になっていた。私自身もギンブナとオオキンブナについてはずいぶんと混乱しており、背びれ条数17本の個体を取りあえずギンブナとして扱うこととし、「県内で調べた十数匹の中には、雄は少なからずいたのだが、不思議なことにすべて15cm以下であり、雌は18cm以上のものばかりであった。」と書いているが、この記述はオオキンブナについてのものになる。ただし、この考え方にも異論もあり、今後再び変更される可能性がある。



1994.5 多布施川(佐賀市)



ギンブナの顔 1994.5 (同上)



金魚とフナ類の「あいの子」は、テツギョ(鉄魚)と呼ばれる。

1995.10 多布施川水系の水路(佐賀市)

オオキンブナ

Carassius auratus buergeri

コイ科

- 地方名 きんぶな、ふな、ほんぶな、まぶな
- 大きさ 30cm
- 生息域 中流～河口・汽水域

琵琶湖から移入されたゲンゴロウブナと区別して、釣り人の間では、在来の方類は「まぶな」とも呼ばれる。

日本固有種のゲンゴロウブナを除き、ユーラシア大陸にはキンブナ系とギンブナ系のフナがあるとされる。

日本にも全国に分布するギンブナの他に、キンブナ系のフナとして、東日本のキンブナ(15cm)、諏訪湖一帯のナガブナ(25cm)、琵琶湖には鮎寿司に用いられるニゴロブナ(35cm)が分布し、西日本にはオオキンブナが広く分布している。

オオキンブナはギンブナより体高が低く顔立ちも異なる。体色もギンブナのオリーブ色に対し黄色が強く、腹側の各ヒレも赤みが強い。食性を反映して鰓耙数も少なく消化管も短い。背ビレの軟条は14～16本でギンブナの15～18本よりやや少なく、その分背ビレの基底長も短くアンバランスな感じを受ける。

しかし、特に九州のオオキンブナは形態的には、ギンブナと微妙に重複するところが多く、何をもって区別できるとは明言しかねるところがある。確かに、河川に見られる30cmほどのフナは体高が低く、体色も黄味が強いのだが、背ビレ条数は17本であることが多い。ただし、松浦川のフナは背ビレ条数が16本のものの割合が高いようだ。

ギンブナのところで述べたが、これまで九州のフナ類についてはよく調べられていなかったが、ちゃんと区別すると西日本でもギンブナは雌ばかりであることがわかってきた。さらに、近年の遺伝子レベルの研究によると、これまで形態的に分けられていた国内のフナ類の6種(ゲンゴロウブナ、ギンブナ、ニゴロブナ、ナガブナ、キンブナ、オオキンブナ)は、ゲンゴロウブナ以外の5種のフナ類は同種(別亜種)であるということで落ち着きそうである。つまり、釣り人たちがギンブナとオオキンブナを区別していなかったのは実に慧眼であったのかもしれない。

また、有明海側のものと松浦川のものでは背ビレの軟条が異なることから、メダカやスジシマドジョウ類の例のように、今後、県内の「まぶな」たちも有明海側のものと玄界灘側のものが区別される可能性は十分高く、水系を超えてのフナ類の移動も遠慮いただきたい。



1994.5.5 塩田川(嬉野市塩田町)



オオキンブナの顔 1994.5.5 (同上)



金魚とフナ類の「あいの子」は、テツギョ(鉄魚)と呼ばれる。

1995.10 多布施川水系の水路(佐賀市)

テツギョ

Carassius auratus × *C. sp.*

コイ科

- 地方名 ー
- 大きさ 25cm
- 生息域 ー

時折、三つ尾のフナが捕獲されることがある。このようなキンギョ(金魚)とフナの「あいの子」はその体色から「テツギョ(鉄魚)」と呼ばれる。そもそも、キンギョは約1700年前の中国南部で発見された赤いフナ(緋フナ)が起源であると考えられている。約400年前の明時代には盛んに品種改良が行われ、その頃に日本に伝わったと考えられている。

県内で捕獲されたこの鉄魚は、飼育されていた金魚が何らかの理由で野外に放たれ(捨てられ?)たものが、在来のフナ類と交配して生まれたものなのだろう。

アライグマやマングース、ジャンボタニシなど野外に捨てられたり逃げ出したりした生き物が問題を引き起こす例は非常に多い。佐賀城のお堀のハスやヒシが消えたのもミドリガメ(ミシシッピーアカミガメ)のしわざであったらしい。雑食性のこのカメは植物以外にもいろんなものを食べているはずである。

テツギョは、見るからに雑種化したことがわかる例であるが、我々が意図せずに雑種化させてしまうものは意外に多い。中国大陸から持ち込まれたタイリクバラタナゴは、日本固有亜種のニッポンバラタナゴを雑種化することによって絶滅の縁に迫っていることは有名な例である。また、メダカ類で最初に明らかにされたように国内のほとんどの純淡水魚は地域ごとに異なる遺伝子集団であることが多い。このため、国内から(場合によっては県内から)であっても、他地域から持ち込んだ魚を野外に放すことは、別種へと進化した(または進化しつつある)集団を地球上から消滅させる危険性のある行為であることを忘れてはいけない。



金魚とフナ類の「あいの子」は、テツギョ(鉄魚)と呼ばれる。
1995.10 多布施川水系の水路(佐賀市)
濱野大作氏捕獲

ヤリタナゴ

Tanakia lanceolata

コイ科

準絶滅危惧

- 地方名 たばや、でんばや、べんばや、べにばや、あかぶち、せきたんつー
- 大きさ 10cm
- 生息域 中～下流域

和名は「槍」のような「たなご」の意味である。かつて、唐津に勤務していた頃、生徒に名前を聞かれてそう教えたところ、川にもタナゴがいるのかと驚かれたことがある。海に棲む方はウミタナゴといい、コイ科のタナゴ類とは「あかの他魚」である。

しかし、その繁殖法はいずれも変わっている。ウミタナゴの方は胎生（卵を体内でふ化させ稚魚を出産する）の魚として有名である。これに対しコイ科のタナゴ類はイシガイ科の淡水産二枚貝の中に卵を産みつける。

ヤリタナゴの雄の婚姻色は背側が緑青色を帯び、胸ビレ付近の腹側は淡い桃色で美しい。また、背ビレと尾ビレの縁には赤色の帯が見られるが、特に尻ビレは鮮やかである。産卵期は春から夏にかけてでありそれ、以外の季節では婚姻色は消失している。しかし、水槽内では水草を多く入れたり十分な隠れ家を与えることでリラックスさせておくとほぼ1年中雄の婚姻色を保つことができる。これに対して、雌の体色は肩に不明瞭な暗色斑が見られるが基本的に銀一色で、短い産卵管がある以外、これといった特徴はない。

タナゴの仲間では比較的流れの速い水域を好み、県内河川の中下流域に広く分布する。体高が低く眼径ほどもある長い1対のヒゲを持つことの他に、背ビレの条ではなく膜の方に紡錘型の黒色斑が1つずつあり、全体として1列に並んでいることが特徴である。これらの形態的特徴は同属のアブラボテにもあてはまるが、色彩が大きく異なるため、背ビレの膜を見ることがヤリタナゴの最も確実な識別法である。



婚姻色 1993.4.3 多布施川(佐賀市)



婚姻色が現れはじめた雄 1993.4.3 (同上)

アブラボテ

Tanakia limbata

コイ科

準絶滅危惧

- 地方名 たばや、でんばや、べんばや、べにばや、しぶたい、しぶたご、しびんた、せきたんつー
- 大きさ 7cm
- 生息域 中流域

県内では、タナゴの仲間は「でんばや、べんばや」等と混称されるが、アブラボテだけは「しぶたい、しびんた」等と呼ばれ、他のタナゴ類と区別されることがあるようである。県外には「くそばえ・くそぶな・にがぶな」などの地方名がある。いずれも、鯛、鮠（はや）、鮠に似たまづい魚、または体色から出た呼称と思われる。和名のアブラボテは油色の平たい魚の意味で、もともと大阪付近の呼称である。

タナゴの仲間では最も速い流速を好み、名古屋以西に広く分布する。瞬発的な突進速度がずば抜けており、水槽の中で飼育すると他のタナゴ類よりもよく馴れ、持ち前の突進力で餌を独り占めし、成長速度も他を圧倒する。

貝から泳出したばかりの稚魚は他のタナゴと同様に背ビレにカゼトゲタナゴを思わせるような黒色斑紋が見られるが、2cm を超える頃には消失して、背ビレと尻ビレの先端がやや黄土色を帯びてくる。さらに、ヒレを含めた体全体が黄土色を帯びる。成熟すると黄緑暗褐色に変化する。黄土色だったヒレは、黒色と鮮やかなオレンジ色の縞模様が現れシックな色調になる。また、このような婚姻色は、九州産のものが一際鮮やかであるらしい。

成熟した雄の鼻先には白色のいぼの様な構造が見られる。これは「追い星」と呼ばれる角質化した固い組織で、成熟した雄によく発達する。繁殖期に他の雄を突っついて排除する時に使われる。

初めて見た人は皮膚病と勘違いするようであるが、人間で例えれば思春期のニキビの様なもの、繁殖期の終わりには脱落してしまう。

アブラボテは有明海側の河川では普通に見られる魚であるが、玄界灘側の河川には非常に少ない。1976 年の松浦川水系を対象とした調査記録を見ても私たちが行った調査でも松浦川水系で本種が確認されたのは、松浦川では伊万里市松浦町桃川～大川町大川の水路を含んだ一帯と徳須恵川の伊万里市南波多町高瀬付近のみである。どちらも、同じような盆地地形である。現在、安定してアブラボテの姿を確認できるのは南波多町の高瀬付近のみである。いるところにはうんざりするほどいるけど、そのようなところはあまり多くないということなのだろうか。メダカやシマドジョウ類の例のように有明海側のもとの玄界灘側のものでは異なる遺伝子集団の可能性も高く、生息地が局限される松浦川水系のアブラボテは、その生存に十分配慮を要する魚である。



婚姻色 1991.10.27 多布施川(佐賀市)



1994.8.1 六角川(武雄市)

カネヒラ

Acheilognathus rhombeus

コイ科

- 地方名 たばや、でんばや、べんばや、べにばや
- 大きさ 13cm
- 生息域 中流～下流域

日本最大のタナゴで、県内全域の平野を流れる河川に普通に見られる。しかし、全国的には琵琶湖から広島県東部までと北部九州に分布するのみである。

雄の婚姻色は大変豪華である。白濁したピンク色に染まった尻ビレと後方に伸長した背ビレを一杯に広げて縄張りを主張する様子は、他のタナゴを見慣れた目には「でかい」の一言につきる。特に 10cm を超えるような大型の雄の頭部は金属光沢を増し、まるで鉄兜をかぶったようで異様な迫力さえある。

バラタナゴ類をそのまま大きくしたような魚であるが、微小なヒゲを持ち体側のブルーの線は境界が不明瞭で金属光沢もない。また、やせた未成魚は体高も低くヤリタナゴと紛らわしいが、背ビレを広げて黒色点列の位置を見ればよい。夏の終わり頃から婚姻色を呈し始め、水面上からも美しいピンク色の尻ビレで一目でそれとわかる。

産卵は秋で、優勢な雄が二枚貝を中心に縄張りを作る。他の雄を追い払い、陶醉したような表情で体をけいれんさせ雌を誘う。雌は臭いで貝の出水管の位置を確認し、腹部を貝に打ちつけるようにして産卵管を挿入し、瞬間的に 1 個から数個の卵を産みつける。直後に雄は雌を追い払い入水管の前で放精する。こうした一連の動作を何回も繰り返す。稚魚は冬を貝の中で過ごし、4 月頃に貝から泳出する。泳出して間もない稚魚の腹部はシマヨシノボリの雌の婚姻色のような鮮やかなコバルトブルーである。

飼育は容易で観賞価値も高いが、植物食性が強い雑食性のため水草をかじって丸裸になってしまう難点がある。



1993.5.24 城原川(神崎市神埼町(1993.11撮影))



幼魚 1993.5.24 城原川(神崎市神埼町)



1998.9.21 多布施川(佐賀市)
カネヒラとニッポンバラタナゴの雑種と思われる個体(尾ビレ基部の赤色斑に注目)

セボシタビラ

Acheilognathus tabira nakamurae

コイ科

絶滅危惧 I A 類

- 地方名 たばや、でんぼや、べんぼや、べにぼや
- 大きさ 8cm
- 生息域 中流域、小水路

タナゴという名前は、その側扁した体形から「タイの子」が訛ったものといわれている。これに対してセボシタビラのタビラとはタナゴの古名で、手のひらのような平たい魚という意味らしい。

タビラの仲間は東日本のアカヒレタビラ、西日本のシロヒレタビラ、北部九州のセボシタビラの3亜種に分けられている。本州産の2亜種は雄の尻ビレの縁がそれぞれ赤や白の婚姻色を呈することから、セボシタビラは未成魚の背ビレに見られる黒色斑（背星）からつけられた名である。

ほとんどのタナゴの仲間は稚魚期に、背ビレの前端に黒色斑が見られるが、セボシタビラの黒色斑は少し後退した位置（第4軟条～第6軟条）にあり、婚姻色を発現する直前まで見られる。

ヒゲはヤリタナゴとカネヒラの間で眼径の1/2程度。体形はヤリタナゴに似ており、婚姻色以外では背ビレの黒色点列がカネヒラのようにヒレの筋（軟条）にあること、尾部に短い青色の筋（縦条）がほんのりと見られることで区別できる。やや流れのある砂礫底を好み、産卵期は2月下旬から8月上旬までの長期におよぶ。

県内には7種のタナゴの仲間が存在するが、このセボシタビラについては、田手川で1個体を捕獲したに過ぎない。しかし、筑後川をはさんだ福岡県柳川市付近には多いという。また、長崎県壱岐にも記録がある。

なお、唐津市在住の荒巻裕氏によると、大分県玖珠盆地で発見されていたヤリタナゴと思われていた化石は、骨の形態よりタビラ類の化石と判断できるという。

県内での確認は田手川で1個体確認した以降は、2005年に鳥栖市内の沼川、安良川、轟木川からの報告があるが、いずれも最下流の堰の下の筑後川や宝満川との連絡のよいところである。



婚姻色 1993.12 大牟田市



婚姻色が現れはじめた雄 1993.12（同上）
背ビレの基部側に黒色の「ホシ」の痕跡が残っている

移入種

タイリクバラタナゴ

Rhodeus ocellatus ocellatus

コイ科

要注意外来生物

- 地方名 たばや、でんばや、べんばや、べにばや、せきたんつー
- 大きさ 8cm
- 生息域 小水路、ため池・クリーク

タイリクバラタナゴは和名が示すとおり、本来は中国大陸と台湾に生息する魚である。太平洋戦争中に食料確保のため、中国からソウギョ等が関東に大量に移入された折に“密入国”したらしい。後日、卵を産みつけられた二枚貝が琵琶湖に移入され、以降、毎年各地で行われるアユやフナの放流に混入してあつという間に全国にバラまかれてしまった。

また、その美しさから観賞魚として売買され、その一部が自然界に「捨て魚」されたことも急激な分布拡大の要因になっているようだ。

タイリクバラタナゴはヒゲもなく日本固有亜種のニッポンバラタナゴと非常によく似ている。最大の識別点は、腹ビレ前端に真珠光沢のある白線が見られることである。しかし、雌やニッポンバラタナゴと交雑したものでは見られなかったり、不明瞭であることが多い。そのほかの特徴は、大型でニッポンバラタナゴが成熟するサイズになっても背ビレに幼魚期にみられる黒色斑紋が残っているし、成長すると体長が6cmを超える。また、額の角度が小さいため、その分背中への盛り上がりがきつい。雄の腹部や尾柄の婚姻色がニッポンバラタナゴが朱色に近いレンガ色で腹ビレが黒ずむことが多いのに対し、タイリクバラタナゴの婚姻色は真紅のバラを思わせる紅赤色で、腹ビレは透明である等があげられる。

県内では、武雄市、鹿島市、有田町等の県西部に多いが、その他の地域にも雑種と思われる個体が点々と生息している。この中で、鹿島市北部の用水路には、明らかなタイリクバラタナゴの特徴を備えたものばかりが多数生息している。



婚姻色 1992.6 塩田川水系のクリーク(鹿島市) 坂本兼吾氏捕獲



イシガイに産卵しようとするつがい

1994.5.5 塩田川水系のクリーク(鹿島市)

ニッポンバラタナゴ

Rhodeus ocellatus kurumeus

コイ科

絶滅危惧 I A 類

- 地方名 たばや、でんばや、べんばや、べにばや、せきたんつー
- 大きさ 5cm
- 生息域 小水路、ため池・クリーク

小学 3 年生の頃、学校の帰りに佐賀城の西堀端の浅瀬でレンガ色の腹を見せながら、盛んに餌をついばんでいるバラタナゴを見つけて「熱帯魚がお堀におる」と思ったことを今でも鮮明に思い出す。

かつて、西日本のため池などに普通に見られたこの魚は、環境庁によって絶滅危惧種に指定されている。

本種の絶滅の危機は、他の動物とやや意味合いが異なり近縁のタイリクバラタナゴと交雑してしまうことで、日本固有亜種が消滅するという点にある。そもそも日本の淡水魚の多くは、中国大陸から陸続きとなった時代に渡ってきて、その後とり残され、別(亜)種として分化したものである。

長い地球の歴史の中では、種の分化と平行して、分化の途上にあったもの同士が再び同化するとは別に珍しいことではないかも知れないが、それが人間の不思議で行われるとなると話は別である。

現在、大阪産のものが東京の赤坂御用地にて保護されているが、本家の大阪では既に雑種化してしまっているという。

県内でも西部を中心に既にタイリクバラタナゴの侵入が確認されており、佐賀城跡のお堀でも雑種化が確認されている。佐賀市近郊は全国でも最後の天然の生息域と思われる。行政等による緊急な隔離保護の施策を期待したいものである。

繰り返すようだが、本種の最大の脅威は遺伝子の攪乱である。ニッポン型に見えてもタイリク型の遺伝子を潜在している可能性があり、卵を保持している可能性のある二枚貝も含めて、別の水域への放流は厳に慎んでいただきたい。



婚姻色 1992.5.5 多布施川水系のクリーク(佐賀市)

産卵管の伸びはじめた雌
1992.6 晴気川水系の水路(小城市小城町)1998.9.21 多布施川(佐賀市)
カネヒラとニッポンバラタナゴの雑種と思われる個体(尾ビレ基部の赤色斑に注目)

カゼトゲタナゴ 北九州個体群

Rhodeus smithii smithii

コイ科

絶滅危惧 I B 類

- 地方名 たばや、でんばや、べんばや、べにばや、せきたんつー
- 大きさ 5cm
- 生息域 小水路、クリーク

カゼトゲタナゴの雄は産卵期には愛くるしいアイラインと口紅で、雌を誘う。ヒゲもなく一見バラタナゴ類に似るが、肩部の金属光沢がなく、体側のブルーの線も色彩が異なる。つまり、バラタナゴ類は水色の線が背ビレの起点より後方から始まって、尾柄付近で細まって消え入るように終わる。雌は線自体が細く目立たないことがある。これに対してカゼトゲタナゴではコバルトブルーの線が背ビレの起点より前方で始まり、尾柄末端で太いまま断絶する。雌も雄と同様であるがむしろ紺色に近い。また、その延長の尾ビレの基部が雌雄とも黒ずむ。

カゼトゲタナゴは世界中で北部九州にのみ生息する極端に分布域の狭い魚である。河川やクリークも利用しないことはないが、むしろやや流れのある水の澄んだ小水路を好むので農業用水路は主要な生息地であった。

ところが近年、そのような環境は、圃場整備によって単調で巨大な水路に変わってしまった。また、宅地化によって三面コンクリート張りになったり、土砂の堆積で水深が異常に浅くなったりして、徐々に、かつ確実に悪化している。

現在、本種にとって一番安定した環境は、意外にも佐賀市街を網羅する多布施川の支流流かも知れない。

広島県東部から兵庫県西部には、スイゲンゼニタナゴが生息する。

スイゲンゼニタナゴは岡山県で 1963 年に発見され、1935 年に韓国の水原で捕獲されたものと同種であるとされスイゲンゼニタナゴと呼ばれるようになった。その後長い間カゼトゲタナゴの別亜種として扱われてきたが、近年、亜種ほどの違いもないとして「カゼトゲタナゴ山陽個体群」とされた。その場合、これまでのカゼトゲタナゴは「カゼトゲタナゴ北九州個体群」として区別する。

なお、スイゲンゼニタナゴ(カゼトゲタナゴ山陽個体群)の方は、環境省の第 4 次レッドリストにおいて、絶滅危惧 I A 類に指定されており、さらに捕獲や国内取引は種の保存法で禁止されている。



雄 1992.6 晴気川水系の水路(小城市小城町)



雌 1993.8 晴気川水系の水路(小城市小城町)

淡水魚と 二枚貝について

タナゴの仲間が二枚貝に産卵することは広く知られている。一方、二枚貝の幼生（グロキディウム幼生）は、一時期ヨシノボリ類を中心とした魚類の体表に寄生する時期がある。つまり、タナゴは二枚貝を「ゆりかご」として利用し、二枚貝は魚類を分布拡大のための移動手段として利用し、お互いに持ちつ持たれつ（共生）の関係を保っているのである。

二枚貝は呼吸のために、新鮮な水を入水管から取り入れ、えらを経由して出水管から排出する。この時、水の中から微小な有機物をろ過して食べている。その食性と高水温や酸欠にも弱いため、長期間の飼育はかなり難しい。飼育下のタナゴ類の繁殖のためには、カネヒラを除いては、むしろ人工授精の方が確実に安心である。

県内では、イシガイ科のトンガリササノハ、ドブガイ、マツカサガイ、イシガイのほかにシジミガイ科のマシジミ、ヤマトシジミ等が分布するが、シジミガイ科の貝は産卵の対象にはならない。なお県内では、淡水産の二枚貝を総称してカラスガイと呼ぶことが多いが、本物のカラスガイは分布しないようである。

またドブガイについては、従来タガイ、ヌマガイ等という名称が使われてきたが、それらは生育環境の違いによる変異に過ぎず、近年では同一種の「型」として区別されているに過ぎない。

タナゴ類の雌は産卵管をイシガイ科の二枚貝の出水管から挿入し貝の中に産卵する。雄は入水管に放精する。精子は水流によって運ばれ、貝の内部で受精する。

卵は種によって異なるが、洋梨型～だ円形でいずれも、クリーム色でもち米ほどの大きさである。温度にもよるが1日から数日でふ化する。

ふ化した仔魚は刺激に反応して泳ぐことができる。しかし、眼どころか頭すら完成していない状態であり、脱ぎ捨てられた卵膜がなければ、卵が泳い



ドブガイの出水管からの匂いを嗅ぐニッポンバラタナゴ。雌は腹部から伸びた産卵管を挿入して、卵を二枚貝の中に産みつける
1992. 5. 5 多布施川水系のフリーク(佐賀市)



イシガイの中で生活中のカネヒラの仔魚
1994. 12 嘉瀬川水系の水路(久保田町)

ドブガイ(みろくぎゃー)



イシガイ



マツカサガイ



トンガリササノハ



でいるようにしか見えない。早くふ化して反射的に泳ぐことで、二枚貝のえらのポケット状になった袋（鰓葉腔）にいち早く入り込み、外界へ放出されないための適応であろう。そのために、卵黄の部分には翼状の突起や表面に微小な鱗状の突起も備わっている。ふ化した仔魚は約1カ月あまり、秋に産卵するカネヒラの仔魚にいたっては約半年を、狭いポケットの中で過して十分に成長し、卵黄を吸収しつくした頃に貝から泳ぎ出す。

二枚貝に卵を産みつける淡水魚は、タナゴ類のほかにヒガイの仲間が知られている。こちらは、大胆にも産卵も受精も入水管から行われる。卵は2mmほどであるが、受精後に吸水して5mmほどに膨潤することで外界への放出を免れる。約10日でふ化して貝から泳ぎ出し、2日後には餌をとることができる。また、近くに二枚貝が生息しない場合には石の割れ目などに産卵することがある。

タナゴの仲間が二枚貝への依存度が高く、二枚貝なしでは生息できないのに対して、ヒガイの仲間の依存度はさほど高くはない。

ドブガイ イシガイ科

中、下流の流れの弱いところや水通しの良いクリークの砂泥底～泥底に見られる。殻は薄い、成長すると20cmほどになる。大型のものは、黒色で殻

頂部がすり切れて白くなっていることが多いが、小型のものは淡褐色で褐色や緑色の同心円状の模様があり美しい。かつて、タガイ、ヌマガイと呼ばれていたものは、現在ではドブガイのタガイ型、ヌマガイ型とされている。左右の殻の噛み合わせ部に“歯”（一般にちょうつがいと呼ばれる）がない。

イシガイ イシガイ科

やや流れのある中、下流の砂底に見られる。成長すると6cmになる。殻頂付近には皺のような突起が見られるものが多いが、大型の個体ではすり切れてしまっていることも多い。色はドブガイと同じような変化をするが、黒色のものの中には虹色の光沢をもつ場合もある。

マツカサガイ イシガイ科

やや流れのある中、下流の砂底に見られる。成長すると5cmほどになる。殻頂付近にはイシガイより広い範囲に明瞭な顆粒状の突起が見られ、時として全体におよんでいるものもある。稚貝は淡黄褐色で成長に伴って茶味を増し、黒色へと変化していく。

トンガリササノハ イシガイ科

やや流れの強い河川や水路に生息する。成長すると12cmほどになる。琵琶湖にのみ生息するササノハガイの河川型とされる。タナゴ類も利用しないことはないが、あまり好まないようである。



ニッポンバラタナゴの卵
(受精直後)



胚発生は盤割
(受精後約3時間)



ふ化直後の仔魚
(受精後約40時間)



ふ化後約20日目の仔魚
この後、卵黄を吸収しつくして、
二枚貝から泳ぎ出す

春の水辺にて

中島 睦子 (佐賀市)

シソ科のホトケノザという紅紫色の花が群がって咲く畦道、スイバの葉もだいぶん大きくなった小川のほとり、キンボウゲの黄色の花、カラスノエンドウも可愛い花を付けている。ああ春になったと実感する。

そんなのどかな一日、鍋島町の荻野地区のクリークで堀干し、佐賀ではゴミクイとか、ゴミアゲとも言うらしい、行事があった。

自治会の方々や子供クラブ、ボランティアグループ、消防団等の人々が知恵と体力を出し合って、数十年ぶりの堀の大掃除となった。水車も大切に保管されていたものを借りて踏めるようにしてある。ポンプや機械の力を借りクリークの水は段々減ってゆき小魚達が少しでも水の多い方へ移動する。鮎などは体を寝かせて泳いでいる。ウロコがキラキラ光る。メダカもいる。ナマズもいる。虹色に輝くバラタナゴもいる。ナマズやドジョウ等の川魚には思い出が沢山ある。私が子供の頃は、竹串に刺した川魚の素焼きをわらびとに刺して保存食であった。そのナマズの味噌煮がとても好きだった。今日、久しぶりにナマズの味噌汁を頂いた。少し思い出の味とは違ったけど懐しかった。

小さい頃、ザルですくったメダカや鮎をバケツや桶に入れて、餌はミミズやご飯つぶ、それに防火用水の中に沢山いたピンピン虫（ボウフラのこと、ピンピン虫と呼んだ方がより特徴をとらえているようだけど）を取って入れてやった。迷い込んで来たカイツブリもトライに水を張って入れてみた。でもすぐに逃げられた。子供ながら水鳥ということを知っていたらしい。生き物との付き合いは、田舎の子供達にとって当たり前のことで何でもかんでも飼っていた。

春、夏、秋と川遊びは飽きなかった。川は今より身近だった。入り易く上り易いようになっていて、草も土砂も石ころも程よくあった。今、堀や川がコンクリートで整備されている所が多く子供達はあまり遊ばなくなった。もっと自然を相手に遊んで欲しい。ゆったりとした時間を生き物達を見つめながら、遊びながら共有して欲しい。川底の砂を素足で踏んだ時の感触や草の

根元をザルですくって上げる時のワクワクするときめきを体験させてやりたい。その為には、安心して入れる川、生き物達の棲める川が必要である。

川が本来の川であるように願っている。

(なかしま・むつこ、県緑のアドバイザー)

堀

覚え書き

雨後の「アガイイオトリ」

堀の近くに暮らす人々にとって、雨後の楽しみの一つに「アガイイオトリ」があった。6月がコイ、フナの禁漁期間となる以前は、この梅雨の時期が「アガイイオトリ」の最盛期だった。

「アガイイオ」というのは「上がり魚」の意味で、かんがい用に堀を満水にした5月中旬ごろから、雨がたくさん降る日に、堀の魚が岸のメラクチ（水口）から、水田に向けて、よく上りこむ。

メラクチつまり水の落ち口は、たいてい夏に水車をかけて水田に水を踏み込む場所となっている。雨で水田にあふれる水が落ちている時、ここを玉網（タモ）ですくえば、コイ、フナ、ドジョウなどが捕れた。またメラクチの下にウナギウケを仕掛けてもよかった。水の落ち口は溶存酸素やえさが豊富で、しかも水田は産卵場所として堀の魚が入り込んでいった。

また堀端の夜は、「夜振（ヨボイ）」と称してたいまつやカーバイトランプ片手に「アガイイオトリ」に出かける楽しみもあった。玉網ですくうほか、狙いを定めてヤスで突く攻撃的なものも。闇夜にあっちこち々にたいまつが火が入り乱れる情景は、村の子供に哀愁と驚異の感情を与えたという。

移入種

ハクレン

Hypophthalmichthys molitrix

コイ科

- 地方名 れんぎょ
- 大きさ 100cm
- 生息域 下流域、クリーク、湖沼

中国原産の魚で、水中を漂う有機物とくに植物性プランクトンや藻類を捕食する。成長が極めて速いことからほかの中国四大家魚と同様に食用を目的として移入され、利根川水系に定着したものである。一時期霞ヶ浦での年間水揚げが 1500t に達したことがあるという。

現在では、埼玉県羽生市より下流の利根川で見ることができる。雨後の翌朝に 1m 近い大物が 3m ほどジャンプするダイナミックな姿を見ることができるという。

同じ属のコクレンに似るが、体色は銀白色で背側は緑褐色で、暗色の斑紋はない。産卵期には雌雄とも暗紫色の婚姻色が現れるが追い星は生じない。体形は側扁が強く、コクレン同様に腹中線が竜骨状の突起が見られるが、突起はコクレンより前方の、のど元からはじまる。腹側にたれ下がった眼もコクレンほど極端ではない。

植物プランクトン食に適應して、鰓耙は同じ食性のゲンゴロウブナよりもさらに多く 900 本以上で、互いに合着して不規則な隙間があいている。空気呼吸も行うことができるため酸欠にも耐性が高く、アオコなども食べるため富栄養湖の浄化に役立つ一方、餌をめぐっての競争に不利なゲンゴロウブナは底生生物を食べるように変化し、数を減らしているところもあるという。

県内では、1978 年に筑後川での記録がある。おそらく他の魚の放流に混じって入ってきたものであろうが正確なことは不明である。いずれにせよ、ソウギョと同様に長大な河川を流下しながらふ化するため、県内ではやはり定着していないものと思われる。



1998.4 飼育個体

移入種

コクレン

Aristichthys nobilis

コイ科

- 地方名 れんぎょ
- 大きさ 160cm
- 生息域 下流域、クリーク、湖沼

家で飼って、直接生活に役立てる動物を「家畜」という。ニワトリの場合には「家禽」という言葉がある。中国の農村では食用目的で淡水生の大型魚が飼育されており、これらは「家魚」と呼ばれる。

さして大きくもない池に、上層で植物プランクトンを食うハクレン、中層で動物プランクトンを食うコクレン、水底の貝を食うアオウオ、そして岸寄りで草を食うソウギョの四大家魚を、池の状況を考慮しながらコイ、フナ等とも組み合わせて混合養殖している。1000年以上前の唐の時代からの伝統ということである。

コクレンの幼魚の体色は金色であるが、成長するに従って和名が示すように黒味が強くなる。まだ、体側やヒレには不規則な暗色斑が現れる。産卵期の雄の頭部に追い星を生じるが、婚姻色は不明瞭である。体形は側扁が強く、腹ビレの付け根から肛門にかけての腹中線が、サッパやコノシロの腹部のように竜骨状に隆起する。

しかし、何よりの特徴は腹側に異様にずれた眼で、一度見たら忘れられない強烈な印象を与える。その神様の気まぐれとしか思えないような顔つきは生まれながらのものではなく、5cmほどの幼魚の眼は体の中央にあるらしい。

県内では、1982年に有明海の堤防から1km内に設置されたウケハゼ（漁法）で、110cm(11.5kg)の個体が捕獲されている。おそらくソウギョなどに混じて放流されたものであろう。しかし、ソウギョなどと同じ理由で、定着はしていないものと思われる。



有明海のウケハゼで捕獲されたコクレン
(1982.7.29付佐賀新聞掲載)

カワバタモロコ

Hemigrammocypris rasborella

コイ科

絶滅危惧 I B 類

- 地方名 めだか
- 大きさ 6cm
- 生息域 ため池、クリーク

この魚の名前を漢字で書くと「川端諸子」。まるで女性の名前になってしまう。「諸子」とは小魚の総称で、「川端」は新種記載時の標本提供者の名前に由来する。

体側に暗色の縦条があり、その上方に金色の筋が光る。腹側には大きく湾曲する黒色の点列が3列見られるが、産卵期には雌雄ともに不明瞭になり、雄は全身が金色に輝く。このため、関西では「きんぼて」「きんじゃこ」と呼ばれる。

県内では、特に本種を示すような地方名はないが、モツゴ等と異なり内臓を取らずに飴炊きにしても美味と言うことをご存じの方もあり、昔から水田地帯で利用されていたようである。

水槽内でも簡単に産卵する。気が付くと水草に淡水魚としてはやや小さめの丁度 1 mm ほどの透明な卵を産みつけている。しかし、ふ化までの時間が約 24 時間と短く、気がつかないうちにふ化してしまうことが多い。十分に大きな水槽ならば自然増殖も可能であるが、他の魚と同様に卵のうちにタッパーのような浅い容器に隔離した方が望ましい。

日本固有種で静岡以西の太平洋側、四国の一部と北部九州に分布する。流れの緩やかな植物が繁茂する用水路や川、浅い湖沼やため池に生息する。

生息環境が人間の生活環境と重複するため近年減少が著しく、地域によっては絶滅が危惧されている。

県内でも耕地整理をはじめ、宅地化による水路の陸化や荒廃等不安材料には事欠かない。特に目下急増中のブルーギルの生息する水域でカワバタモロコが見られないことも非常に心配なことである。



1994.5.5 塩田川水系のクリーク(鹿島市)



1992.6 六角川水系のクリーク(白石町六角)

国内移入種

ハス

*Opsariichthys
uncirostris uncirostris*

コイ科

- 地方名 ー
- 大きさ 30cm
- 生息域 中～下流域

ハスは、本来は琵琶湖淀川水系と三方湖に特産の魚であった。しかし、各地でアユの放流が盛んになるにつれアユに混じって放流され、現在では全国ほとんどの地域に見られるようになった。オイカワにやや似ており、20cmを超えるような「しらはや」が釣れたなどと言うときには、このハスであることが多い。

オイカワよりさらに体幅が薄く（側扁）、ほほが広い。手触りも表皮がザラツとしていて割に腹部はデロンとした感じで柔らかい。最大の特徴は口が「く」「へ」の字に曲がっていることである。

コイ科では珍しく魚食性があり、アユを食害するため、県外には懸賞金をかけている漁協もある。あの素早いアユを追尾して捕食するほどなので、遊泳力に優れ、目も大変いいようだ。

しかし、水槽ではメダカー匹食べたことがなく、やはりコイ科の魚らしくもっぱらコイ用の餌ばかりを食べるので、飼育は思ったほど難しくはない。ただ、慣れていないものは水槽からよく飛び出してしまうので、1週間はあらゆる隙間をふさいでおく必要がある。

県内には1978年にはすでに侵入しており、現在では県内ほぼ全域の中流域に見られるようになった。また、水通しさえよければクリークにも見られる。

本種は県内では外来種と同じであるが、本来の生息地では減少しているらしく環境省の第4次レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ種に指定されている。



婚姻色 1994.5 多布施川水系南堀(佐賀市)



未成魚 1993.8.29 六角川(武雄市)



ヌマムツとハスの雑種と思われる個体
婚姻色 1991.8.30
城原川(神崎市神埼町)

オイカワ

Opsariichthys platypus

コイ科

- 地方名 あかはや、さんじ、しらはや、はや、さくらばや、やまぶき、あからい、あかつぱ
- 大きさ 15cm
- 生息域 中～下流域

川の魚というものはなじみ深いようでいて意外に知られていないことが多い。

そもそも人がそれらを目にするのは釣り上げられたいわば陸に上がった魚か、そうでなければ水面下を逃げ惑う姿であるからであろう。また、魚の天敵は水鳥であることが多く、水面上の動く人影などには、非常に警戒心が強い。その上、背中側の黒っぽい体色が保護色となり、水面上からは見つけにくい。このような理由で身近な水路や河川に住んでいる魚でも意外に知られていないのであろう。

オイカワは「はや釣り」の対象として親しまれている、ごく普通に見られる魚である。県内で「しらはや」といえばオイカワを指すことが多い。一般に魚の雄は繁殖期になると婚姻色と呼ばれる派手な色彩を呈するものが多い。その中でも本種の雄は熱帯魚も顔負けの極彩色の衣装をまとう。「あからい」や「やまぶき」という地方名は、こうした婚姻色が出た雄を示す名称であるが、それが「しらはや」と同じ魚とは思っていない人もいる。

カワムツと混称されることもあるので、簡単に相違点を挙げておく。

オイカワは体幅が薄く、うろこがやや大きく水面上からはうろこが網目模様に見えることがある。また、カワムツは時に不明瞭なこともあるが体側に黒条が見られるが、オイカワには不規則な淡色の横帯が見られる。吻（鼻孔の前方）に朱点が見られるのもひとつの特徴である。また、カワムツの各ヒレは黄色であることが多い。

ふ化した稚魚はやがて流れにのって流下し、成長しながら本来の生息域まで遡上してくる。平瀬を好むため、平瀬が発達する河川の中・下流域に多いが、先に述べた成長に伴う河川内での移動のため、堰の連続するような河川では平瀬が発達していても、個体数が少ない場合がある。



婚姻色 1992.8.2 松浦川(伊万里市)



1994.8.1 六角川(武雄市)



オイカワとヤマムツの雑種と思われる個体
1994.6 多布施川(佐賀市)

カワムツ

Candidia temminckii

コイ科

- 地方名 あかはや、さんじ、しらはや、はや、やまそう、やまぶき、やまばえ
- 大きさ 15cm
- 生息域 上流域の下部～中流域

県内では、フナより体高の低い淡水魚をおしなべて「はや」、または「○○ばや」と総称することが多い。その中でも個体数が多い本種はオイカワとともに「はや」と呼ばれることの多い魚である。側面のシルエットは似ているが、体幅もオイカワより厚く、体側に沿った暗色条、雄の婚姻色等によって明確に区別できる。実際、ほとんどの地方名はオイカワと混称しているが、その実体はある川ではカワムツを「やまぶき」と呼びオイカワを「あかはや」と呼んでいるが、別の川では逆にカワムツを「あかはや」、オイカワを「やまぶき」と呼んでいるといった具合で、両種を同一種扱いしていることはほとんどない。

また、「はや」、「しらはや」はオイカワとカワムツの雌または婚姻色の現れていない雄を示し、その他は婚姻色の出た雄を示す地方名である。生活域からきた「やまばえ」だけはカワムツのみを指していることが多いようである。

つまり、オイカワが開けた平瀬と同じような大きさの個体が集まって遊泳する事が多いのに対し、カワムツは岸辺の植物が繁茂したやや流れの遅い淀みに大小入り乱れてじっとしていることが多い。カワムツが好むような環境は人の手の入っていない山辺に多いのである。

両者の生活様式の違いは近年の河川改修によって明暗を分けた。つまり、川幅を広げ淵を埋め、かつ岸辺の植物を刈り払うことで本種は生活の場を失い、かわってオイカワが増加した。両者の生息数の比はその河川の自然度を計る尺度としても有効なほどである。



婚姻色 1992.10.27 田手川(神崎市神埼町)

ヌマムツ

Candidia sieboldii

コイ科

- 地方名 あかはや、さんじ、しらはや、はや、やまそう、やまぶぎ、ほりばや
- 大きさ 15cm
- 生息域 中～下流域、クリーク・ため池

1994年の夏はまれにみる大渇水で、淡水魚にとっても受難の季節だった。大挙して河口に押し寄せるはずのヨシノボリ類の稚魚の姿はなく、水溜まりと化した中小河川には、産卵を断念したらしい婚姻色の消えた親魚と流れのあった頃にふ化した少数の稚魚が息も絶え絶えであった。

そうした中、比較的状況の良かった嘉瀬川水系で久しぶりに美しい婚姻色の現れたカワムツの雄が捕獲された。普段なら見向きもしないところだが、懐かしい美しさに見とれていると何か違う。背ビレだけでなく、黄色いのはずの胸ビレ、腹ビレともに朱色である。体色も含めて不透明なピンクっぽい朱色である。

佐賀県産のカワムツについての疑問が一気に解けた。つまり、何故クリークにもいるのか。体側の黒条が淡いものが多く、時としてそれが完全に消失していることがある。これら、学生時代に見た広島のカワムツと異なる特徴は、すべて止水域を好むヌマムツの特徴であり、平野の止水域の乏しい広島で見たものはすべてカワムツだったのである。また、県内には、クリークに見られる「はや」を意味する「ほりばや」という呼び方があり、ヌマムツの地方名と考えられる。

追い星の出方も異なるが、両者の形態的な相違点は側線鱗数の他に、尻ビレ軟条がヌマムツの方が1本少ない9本であることなどがある。

1988年にそれまでカワムツとして扱われていたものの中に色彩や形態の異なる2タイプがあることが発表され、しばらくの間、カワムツA型とカワムツB型と呼ばれた。その後、両者は別種であると認められ、前者はヌマムツ(*C. sieboldii*)、後者はカワムツ(*C. temminckii*)とされた。なお、ヌマムツの学名は江戸時代、長崎にあったオランダ商館のドイツ人医師シーボルトに由来し、彼が日本に滞在中に集めた様々な標本を元に日本植物誌や日本動物誌を編集したことに対する献名である。また、カワムツの学名は日本動物誌編集の際に脊椎動物の研究を任されたオランダのライデン博物館初代館長テミンクに由来している。



婚姻色 1994.8 多布施川水系(佐賀市)



1994.8 (同上)

未成魚 1993.8
晴気川水系の水路(小城市小城町)オイカワとヌマムツの雑種と思われる個体
1994.6 多布施川(佐賀市)ヌマムツとハスの雑種と思われる個体
婚姻色 1991.8.30 城原川(神崎市神埼町)

ヒナモロコ

Aphyocypris chinensis

コイ科

絶滅危惧 I A 類

- 地方名 めだか
- 大きさ 6cm
- 生息域 細流、用水路、ため池・クリーク

ヒナモロコは国内では北部九州にのみ生息するとされる絶滅危惧種である。カワバタモロコによく似るが、こちらの方が体高が高く体幅も薄く、全体的に平べったい。ヒナモロコはむしろ寸胴である。また、カワバタモロコの腹ビレと尻ビレの間の腹縁は竜骨状の突起になっており、腹部の後半の肋骨は浮き出ていることが多い。体側には 3 本の点列が大きく腹側へ湾曲している。これに対してヒナモロコは全体に地味で、体側の黒色点列は斜め後方に直走する。

カワバタモロコが周年、ため池に生息するのに対して、ヒナモロコは用水路や流れの緩やかな細流に生息し、冬はため池で越冬する。福岡市近郊では、このような水田地帯はとうの昔に宅地化され、水路は埋め立てを免れていても排水溝と化しており、天然水域では絶滅したと考えられていた。しかし、1994 年 11 月 29 日に福岡県田主丸町の用水路で 80 尾が捕獲され、保護増殖の努力がなされている。

県内では、過去には筑後川、巨勢川、多布施川、城原川、松浦川に記録があるが、それ以降の確認例はない。県内でもヒナモロコ好みの両側からヤナギや草の垂れ下がった様な細流は見られなくなってしまったが、何とか生き残っていて欲しいものである。

野中繁孝氏は佐賀自然史研究第 18 号(2013)で佐賀平野のヒナモロコの記録をまとめている。それによると久留米医学会雑誌の 1968 年 12 月の佐賀市の記録の「上多布施町(屠蓄場南)」は現在の多布施三丁目と六座町・伊勢町との境界にあたる水路であることのほか、新たな捕獲記録として 1966 年夏の千代田町下黒井の民家地先にもうけられた洗い場でのニッポンバラタナゴに混じっての捕獲、1971 年 4 月 12 日の神埼町横武の細流における捕獲、千代田町姉で 1971 年～1972 年にかけて行った調査の中での捕獲の 3 件の捕獲例を明らかにしている。とくに、千代田町姉の調査地点付近のクリークについては「幅が 2～15m、深さが 1.5～3m、透明度は 0.7～0.8m で岸辺にはマコモやヨシが密生し、夏季にはホテイアオイ、ハス等が繁茂していた」と当時の環境まで具体的に記述し、さらに 1970 年代初頭までは県東部の佐賀市、神埼町、千代田町、三根町の広い範囲に生息していたと推定している。県内における本種の状況は「過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報を得られていない」という野生絶滅とするための要件を満たしつつあり、実に貴重な記録である。

現時点で唯一の生息域である田主丸町では、水田へ遡上するための魚道を備えた細流と小さなため池を備えた小さな水域が「ヒナモロコ水路」として整備されている。



1993.4 飼育個体 中嶋秀利氏提供



1993.4 飼育個体 中嶋秀利氏提供

松浦川のヒナモロコについて(2019年追補)

ヒナモロコの県内の記録は少なく、前出の野中繁孝氏によるもの他は、第 2 回自然環境保全基礎調査報告書動物分布調査(1978)等しかない。

この報告書作成当時、本種は特に希少なものと思われていなかったのか、報告書中の取り扱いも「調査対象種」としてではなく、文献調査による県内の魚類相をまとめた表の中に名前が挙げられているのみである。

2018 年 11 月に、野中氏より松浦川の本種の記録を否定する次のような情報を得た。「以前、故木村清朗氏(本書中で「大切にしたい故郷の淡水魚」を執筆)との雑談の中で、ヒナモロコの確認地点が、博多湾流入河川と有明海湾奥流入河川には複数存在するのに、松浦川だけが離れている上にその周辺での確認例がないことを不思議に思っている旨の問いに対して、木村氏は即座に「あれは間違い」と答えられた。」とのことである。

このことは、木村氏もその後もどこにも記述はされていないようだが、以上のことから、松浦川にはヒナモロコはもともと分布しなかったと考えるべきであろう。

移入種

ソウギョ

Ctenopharyngodon idellus

コイ科

要注意外来生物

- 地方名 そうぎょ
- 大きさ 140cm
- 生息域 中～下流域、クリーク、湖沼

ソウギョは名前のおり岸辺の草やウキクサなどの植物を主食とする魚で、明治以降十数回にわたって食用としてアオウオ、ハクレン、コクレンとともに中国から移入が試みられ 1943 年と 1945 年に移入されたものが利根川水系に定着したという。

美味といわれる割には日本人の口に合わず、現在ではその食性を利用して除草の目的で各地で放流されている。除草の効果は大きく、1ha あたり 100 尾程度の放流で雑草はほぼなくなってしまおうという。大型の植物ならほとんど何でも食うが、好き嫌いが無いわけではないらしい。シロツメクサやイネ科の植物が好みの草で、ヨモギやイタドリなど味に癖のある草は好みではないらしい。

県内でもクリークの除草を目的に放流されている。しかし、産卵は本流の中流で行われ、卵は粘着性を持たず水底を転がりながらふ化するため、流程の短い河川ではふ化する前に海に出てしまうため定着はしていない。また、汽水域を含む河川または塩分濃度の低下したときに有明海を通して移動するためか、直接放流をしていないクリークにも現れることがある。国内でも、自然繁殖しているのは利根川水系のみとされている。

コイ科のソウギョは、口に歯を持たないかわりに、喉に骨の変化した咽頭歯と呼ばれる歯を持っている。そのため、葉をずいぶん奥までくわえ込んで、飲み込むようにして喉でかじる。その様子は見ている人間の方が、吐きそうになる。



1993.4 飼育個体 (福岡市)



1995.2.26 飼育個体 (諫早市 干拓の里むつごろう水族館)



体長102.0cm、体重12.3kgの成魚
 1994.11.21 六角川水系のクリーク(武雄市)
 岩永行弘氏捕獲(坂本兼吾氏撮影)

移入種

アオウオ

Mylopharyngodon piceus

コイ科

要注意外来生物

- 地方名 ー
- 大きさ 170cm
- 生息域 中～下流域

以前、「見て見てこんな大物」の頁に「昭和60年7月26日の佐賀新聞に掲載された全長1.48m、胴回り85cm、重さ55kgのソウギョ」として紹介したものである。佐賀新聞社の方から「大きなソウギョの写真があるんです」と写真を見せられたときには、不思議な形をしたソウギョだなくらいにしか思っていなかったのだが、出版後に読者からアオウオではないかとの指摘をいただいた。訂正してここに掲載しておく。

ソウギョより頭がとがっており、体色は青黒く各鱗は黒味が強い。中国四大家魚のひとつで、ソウギョやハクレン等とともに移入された。国内で自然繁殖しているのは、やはり利根川水系だけである。国内では、数が少なく「幻の黒鯉」とも言われる。1989年の埼玉県水産試験場の調査によると、流下中の四大家魚の卵、約5万粒を採取してふ化させたところ、得られた稚魚の割合はハクレン約80%、ソウギョ約20%、アオウオ約0.3%、コクレン約0.06%であったという。県内へはソウギョに混入してやってきたのだろう。

コクレンの頁にも書いたように、本種は貝類を好んで捕食する。コイの仲間だけに口には歯がなく、口を突出させて吸い込むようにして餌を捕食するが、喉にある咽頭骨で硬い貝殻をコリコリとかみ砕いて飲み込む。

成長が早く、アムール川水系のデータでは成熟サイズである60cmになるまでは1年で10cmずつ大きくなり、その後の成長は遅くなる。中国には最大2.2mという記録もあるらしい。また、夏は池や沼で生活するが、冬には川に移動するものが多いという。



筑後川で捕獲されたアオウオ 1985.7.26付佐賀新聞掲載

タカハヤ

Phoxinus oxycephalus jouyi

コイ科

- 地方名 あぶらばや、あぶらめ、あぶらぼう、くそばえ、どろばえ、はや
- 大きさ 10cm
- 生息域 上～中流域

ヤマメが住むような上流域から中流域まで生息する。県内でも、水温の低い山間部にごく普通に見られる。しかし、稚魚の遊泳力が劣るためか、夏季には意外なほど下流まで流下し、カワムツなどの稚魚と混群を作っていることがある。

これまでの調査では、松浦川本流と六角川からは、確認されていない。両河川とも規模の割には源流部の標高が低いため、夏の高温に耐えられず、生息しないのだろうと思っていたが、六角川の場合、本流にはいないが水田のわきの用水路や、谷筋の細流の方には生息しているらしい。

これらの両河川の上流部は河床が岩盤むき出しの状態、隠れ家になるような浮き石が少ない。どうも水温よりも河床型の方が重要な要素らしい。そういえば水槽内では確かに水温 25℃位までは平気である。

ヌルツとした手触りから「あぶらめ」「あぶらばや」と呼ばれるが、この呼称は、平野部ではヌメリのあるムギツクやカワヒガイを指すことがある。

また、体色や味が不味なことから「どろばえ」「くそばえ」等の地方名がある。なお、標準和名のタカハヤは東日本に多い本物のアブラハヤより尾柄高が高いことからつけられた名前である。

産卵期は 3～8 月と割合長いが他の多くの魚のような美しい婚姻色はない。ただ雌の上吻が、天狗の鼻を思わせるように突出するだけである。これは、産卵を砂礫の中に突入して行うための適応らしい。



1990.7.29 嘉瀬川(佐賀市大和町)

ウグイ

Tribolodon hakonensis

コイ科

- 地方名 いだ、ゆだ、うぐい
- 大きさ 30cm
- 生息域 上流～河口・汽水域

世界中でコイ科の魚は約 300 属に分けられると言われるが、このウグイ属の仲間だけが降海するものを含む。

低水温にも強く、ダムさえなければヤマメの住むような上流域にも見られる。また、青森県の恐山湖には pH3 という強アルカリ性にもかかわらず、ウグイだけは生息するという。

典型的な雑食性の魚で、水生昆虫や付着藻類から大型動物の死骸も食べる。河川の淵や物陰に定位して流下する餌を待つこともあるが、持ち前の遊泳力で積極的に餌を求めることもある。嘉瀬川の熊ノ川付近では、夕方に 30cm ほどのウグイが羽虫をジャンプして捕食する姿が見られる。

ウグイの産卵は春で「すり」と呼ばれる。雌雄ともに 3 筋の朱赤色の縦条と黒色帯の織りなす美しい婚姻色をあらわす。大雨の後の増水がおさまりかけると、砂利が堆積したばかりの瀬尻の斜面などに大挙して突入して行われる。産卵放精の瞬間にはどさくさに紛れて卵を食べてしまうものもいるのでこのような崩れやすい、つまり卵が埋もれやすい所が産卵場として選ばれるのだろう。松浦川では、産卵のため溯上してきた群を捕獲する漁業があり、大変美味とのことである。

うろこのはがれやすい魚で、普段は捕獲してもそれがもとで死亡することが多い魚だが、婚姻色が現れる頃には全身に微小な追い星を生じ、サンドペーパーで武装したようになり、うろこもはがれにくくなる。

夏のウグイは「ねこまたぎ」ともいわれる。つまり、あまりのまずさに猫も見向きもしないで、またいで素通りするという。しかし、冬から春の産卵期にかけてのものはかなりの美味で、塩焼き、南蛮漬けや味噌田楽などにする。



1994.10 多布施川(佐賀市) 古川国夫氏捕獲



雄の婚姻色 1995.4.25
松浦川(伊万里市)

雌の婚姻色(同左)



モツゴ

Pseudorasbora parva

コイ科

- 地方名 いしばや、くちぼそ、ぜんもんばや
- 大きさ 8cm
- 生息域 中～下流域、細流、ため池・クリーク

クリークなどが生活排水やコンクリート化されて環境が悪化すると多くの魚が減少する中で、逆に増加する魚がいる。その代表がフナとこのモツゴである。これらは決して「汚れた水」を好むわけではなく、競争相手や捕食者がいなくなり、結果として増えてしまうのである。

モツゴは県内ではイシバヤ、クチボソ、ゼンモンバヤなどと呼ばれ、もともと水田の周囲の小水路やクリークなどに多く、酸欠には耐性が高い魚である。

口は受け口で上を向き、体側に尾ビレから眼をつらぬいて吻端にいたる黒色縦条が見られる。しかし、大型の個体や繁殖期には消失して見られない。また、餌によるのかクリークによっては婚姻色の現れたカワバタモロコのように全身金色に染まっていることがある。産卵期の雄の婚姻色はうろこの周囲が漆黒になり、全身「網タイツ模様」で妙な迫力さえ感じる。

飼育は容易であり、コイの餌でもパチッ、カチッと音を立てながらつついて食べる。また、水槽の掃除のために入れておくことの多いサカマキガイやモノアラガイ等の小さな巻き貝も好んで食べる。

産卵期は春～夏で、雄がヨシや石、コンクリート護岸等を掃除した産卵床に1.5mmほどの透明な楕円形の粘着卵を点列状に産み付ける。水槽内でも比較的簡単に産卵する。この場合、水槽のガラス壁や、上面ろ過器の吸水口のゴミ避けの網などが産卵床として選ばれることが多い。特に、吸水口に産着された場合、これを取り外してタッパー等に浸けておくことで無事にふ化するが、再度の産卵に備えて吸水口に何らかの備えをしておく必要がある。



婚姻色 1994.5.5 塩田川水系のクリーク(鹿島市)



1994.7.17 六角川水系のクリーク(白石町六角)

カワヒガイ

*Sarcocheilichthys
variegatus variegatus*
コイ科

準絶滅危惧

- 地方名 あぶらぼや、あぶらめ
- 大きさ 13cm
- 生息域 中～下流域

生物の名前は普通、漢字ではなく片仮名で表記する。当て字や、同じ漢字でも本家の中国と日本では全く別な物を指すことがあり、無用な混乱を避けるためである。

ところで、「鯉」と書いてヒガイと読む。この漢字はかなり新しい和製漢字(国字)である。これは、明治天皇がこの魚を大変好まれたことから作られたという。

ヒガイは琵琶湖の漁師の間では3つの型に分けられていたが、長い間単一種として扱われていた。1982年になって、油色の婚姻色を呈するアブラヒガイ、体側の斑紋が不明瞭で20cmに達するビワヒガイとカワヒガイの3種に分けられた。

県内ではカワヒガイのみが生息するが、松浦川と多布施川に比較的多く、それ以外では嘉瀬川、中地江川、安良川、轟木川で少数捕獲しているに過ぎない。

口はゼゼラに似て意外なほど小さい。各ヒレは美しいオレンジ色を帯びており、背ヒレには特徴的な黒色斑が見られる。体側の黒色縦条の他に不規則な雲状斑があるが、幼魚期には雲状斑が未発達で、ムギツクに似る。

産卵期は5月から7月で、雄は頭部を中心に紫色の婚姻色を呈する。雌はヒレの橙色を増し、1cmほどの産卵管を伸ばす。産卵はタナゴ類と同様に淡水産二枚貝に行われる。タナゴが貝に悟られぬように感覚の鈍い出水管から挿入するのに対し本種は堂々と入水管から挿入して産卵する。2mmほどの卵は、膨潤して5mmほどに肥大し、容易には排出されない。ふ化した仔魚はすぐに貝から泳ぎ出す。



産卵管をもつ雌の成魚 1992.7.19 松浦川(武雄市)



婚姻色の現れた雄、うしろは産卵管をもつ雌の成魚
1992.7.19 (同上)

ムギツク

Pungtungia herzi

コイ科

- 地方名 くちぼそ、すじばや、すば、すばばや、すばびきばや、どじょうばや、あぶらめ、いしばや、あいのじょうとく
- 大きさ 15cm
- 生息域 中流域

私自身も、慣れない頃は体側に黒い線（縦条）のあるカワムツ、モツゴ等は全部同じ魚に見えたものだ。中でもこのムギツクだけは簡単に区別できた。吻端から眼を通り尾ビレにいたる体側の黒条ははるかに濃く、短いが一対のひげがあり、体幅が厚いために体の断面が円形に近く、尾ビレの付け根がくびれていないため、見るからに「ずんどう」だからである。

そんな様子から県内にはすじばや、どじょうばや、すばばや、すばびきばや等の地方名がある。また、おちょぼ口をさしてモツゴと同様にクチボソと呼ばれることもある。分布域はイトモロコと似て琵琶湖付近から熊本、宮崎までで、中流域の石や障害物があり水面が波立つほどではないかやや乱れているようなところには必ずと言っていいほど生息する。しかし、いかんせんくちぼそであり、「ハヤ釣り」に混じて釣れることはまれなようである。

産卵期の婚姻色はほとんど現れないが、幼魚期には各ヒレはオレンジ色を帯びていることが多く、明瞭な黒色縦条と相まってシックで美しい。しかし、成長に従って腹側に数本の暗色の筋が出現しだんだんぼやけてくる。

非常に憶病な魚で、驚くと必ず石や物陰に入り込んでしまう。しかし、肉食性ではあるが子煩悩なドンコやオヤニラミなどの巣を他の魚と集団で襲い、どさくさに紛れて彼等の卵を食べ、代わりに自分達の卵を残して卵の世話をしてもらう行動（託卵）をする大胆さも持つ魚である。



1993.8.28 巖木川(唐津市巖木町)



1994.8.1 中川(鹿島市)

国内移入種

タモロコ

Gnathopogon elongatus elongatus

コイ科

- 地方名 ー
- 大きさ 10cm
- 生息域 中～下流域、細流、ため池

モロコという名は県内ではなじみが薄いですが、近畿地方では琵琶湖の恵み、高級魚として有名な魚で、琵琶湖地方の「川もの屋」では小さなモロコの甘露煮が大きな顔をして並んでいる。

小魚の代名詞のような名前が示す様に区別の難しい魚であるが、幸い県内でよくみかける3種、つまりイトモロコ、カワバタモロコ、タモロコは、全く別な属に分類される魚である。つまり似ているのは名前だけと考えても差し支えない。むしろ体側に黒色の縦条をもつムギツクやモツゴ等の稚魚の方がよっぽど紛らわしいのではなからうか。

タモロコは眼径とほぼ同長のヒゲを持つこと、体側の太い黒色縦条の下に、カワバタモロコに似た感じの淡い黒色の点列が2～3列、直走することが特徴である。

県内では、早くから琵琶湖産アユの放流を行ってきた松浦川水系ではわりと多い。有明海側では福岡県南部や熊本には分布が知られていたが県内では見つかっていなかった。

その後、1997年7月に、多久市内の牛津川の羽佐間堰下で、1998年5月には牛津川鰯ノ瀬堰下で、やや雰囲気異なるタモロコを複数個体捕獲した。玄界灘に注ぐ松浦川のものとは体形と色彩があまりにも異なるため滋賀県立琵琶湖博物館の松田氏に標本を送って問い合わせたところ「ぱっと見はタモロコであるが、体形等の数値は琵琶湖固有種のホンモロコにもあてはまる」という回答であった。また、水産庁の養殖研究所の岡崎氏にミトコンドリアDNAを調べてもらったところ、こちらからは「松浦川水系のタモロコと異なり、琵琶湖産のタモロコと同じ遺伝子を持つ」という回答であった。琵琶湖産のタモロコはホンモロコと共存する水域ではタモロコらしい形態をしているが、ホンモロコのない水域ではホンモロコに似てくることが知られており、牛津川のタモロコもその一例のようだ。いずれにせよ牛津川に見られるこのタモロコたちが本当に琵琶湖からやってきたものだとする、かつてアユ漁の盛んな他の河川に琵琶湖産のアユを放流した際に、それに混じって運ばれた琵琶湖産のタモロコの子孫が、大雨等で塩分濃度が低下した有明海を通過して牛津川にやってきて住み着いたということなのだろう。なお、これほど珍しかった本種も2001年～2002年に行った鳥栖市史執筆のための調査では、鳥栖市の河川のほとんどから確認され、分布の急速な拡大がうかがわれた。



1992.85 半田川(唐津市)

ゼゼラ

Biwia zezera

コイ科

絶滅危惧Ⅱ類

- 地方名 ー
- 大きさ 7cm
- 生息域 中流域、細流、クリーク

カマツカヤツチフキに似るがヒゲを持たない。しかし、大きさも異なる上体形ははるかにスマートで、カマツカヤツチフキと間違えることはまず考えられない。体色を除けば、むしろカワヒガイを小さくしたような形である。体が小さい上に口はさらに小さく、釣り針には絶対にかからない。また、投網でも網目を抜けてしまうほどの大きさなので、この魚を直に見たことのある人は少ないのではないだろうか。

これまでの河川調査でも田手川、徳須恵川の中流の流れの遅い淀みで、それぞれ1尾ずつ捕獲したに過ぎないのだが、佐賀城のお堀には多く生息する。

婚姻色はモツゴと見間違うほど見事な紫色を帯びた漆黒の網タイツ状で腹ビレと尻ビレが水色がかかった白色を帯びる。産卵期には水面上から観察すると白色のヒレが目立つ雄が、ひらひらと底生魚とは思えないほど活発に泳ぎまわり、侵入者を追い払う様子が観察できる。卵は、粘着力が強く岸辺の植物の根に塊状で産着される。卵は淡黄色で、0.8 mmほどであるが、産卵後吸水して2.5 mmほどに膨らむ。雄は、卵塊に近づく他の魚を追い払っているのだろうが、肝心の卵塊は周囲に転がっていることが多い。口は小さいのだがその攻撃は執拗で、同じ水槽に入れておくと、結局1番優勢な1尾だけになってしまう。

日本固有種で、和名は琵琶湖の膳所地方に由来する。当地では佃煮などに利用するが頭が取れやすく商品価値がない。このことと、同じ膳所藩出身の幕末の大老、井伊直弼（桜田門外の変で首を取られた）と掛けた「いいさん」という地方名が当地にある。

なお、本種は2000年頃からは鳥栖市～小城市にかけての佐賀平野ではかなり普通にみられる魚になっている。



1992.11 徳須恵川(唐津市北波多)



婚姻色 1994.5.1 多布施川水系佐賀城跡南堀(佐賀市)

カマツカ

Pseudogobio esocinus esocinus

コイ科

- 地方名 かまつか、かもつか、ぎょうとく、じょうとく、すなせせり、すなもぐり、どうきょう、どうきゅう
- 大きさ 20cm
- 生息域 中～下流域

カマツカは砂のある川にはどこにでも生息する。憶病な魚で、驚くとすぐに砂の中にもぐってしまう。体色も砂地模様でなかなか見つけにくい。当人も「砂化けの術」にはよほど自信があるらしく、体が半分くらい露出しているでも平気でじっとしている。

馬面でヒゲがあり、唇には多数の乳頭状の小突起が密生し絨毯のようになっている。河川中流域の砂底の瀬でスマートな底生魚といえば、カマツカと考えるとまず間違いない。流水性の魚で、酸欠には弱い方であるが、沈降性の餌さえあれば飼育自体は難しくはない。ただし、観賞が目的ならば水槽の底には砂ではなく5mm程度の小石を敷いておくことを奨める。さもないと、人が近づくと姿を隠し、そのたびに植えたばかりの水草が浮き上がってしまうことになる。

カマツカの食事風景はおもしろい。口を突出させて砂を吸い込み、その中の有機物や小動物だけを飲み込み、えら穴から小さな滝のように砂を出す。忙しく口を動かしながら少しずつ前進していく様子はさながら、ブルドーザーのようでもあるし、掃除機のようでもある。実際、カマツカのいる水槽はいつまでたっても砂が汚れない。

産卵も砂地でおこなわれる。つまり、この魚にとって、砂は「ゆりかご」であり、「食卓」であり、かつ「家」でもあるのである。

生活のすべてのステージを全面的に砂に依存するカマツカの生活様式が、他の多くの魚が森林の荒廃や河川改修が生活の場の喪失に直結したのに対し、あまり影響を受けなかった要因であろう。



1993.8.1 六角川(武雄市)



物を突き出させてエサを砂もろとも吸い込む
1993.8.1 (同上)



驚くと砂に潜る 1993.8.1 (同上)
目と背びれに注目

ツチフキ

Abbottina rivularis

コイ科

絶滅危惧 I B 類

- 地方名 かまつか、かもつか、ぎょうとく、じょうとく、すなせせり、すなもぐり、どうきょう、どうきゅう
- 大きさ 10cm
- 生息域 中～下流域、用水路、クリーク

流れのある河川の砂礫～砂底にはカマツカが住んでいるが、流れのあまりない用水路や水通しの良いクリークなど浅く、泥気の多い所には短いひげを持つツチフキが住んでいる。

ツチフキは体色といい、体つきといいカマツカによく似ている。区別に自信がない場合は、裏側から口を見ると簡単に見分けることができる。カマツカの口には、絨毯を連想させる発達した乳頭状突起がびっしりと生えているがツチフキには見られない。また、吻部が短く、目の前方にくぼみがあり額が「おでこ」状に飛び出して見える。また、全体にずんぐりした感じがする。

成熟した雄は背ビレがアンバランスなほど大きく伸長する。また、尻ビレや腹ビレは山吹色に染まり意外と美しい。また、頭部および胸ビレ前縁に追い星を生じる。産卵は水深 50cm 以下の柔らかい泥底に雄が掘った直径 20～40cm ほどの浅い窪地状の産卵床に行われ、やはり雄によって保護される。卵は寒天質様物質を多く含み 2.5～3mm ほどで周囲の泥が付着しており、さながら「泥まんじゅう」といった感じである。

カマツカに最も近縁なコイ科の底生魚で泥には潜るが、カマツカのように砂に潜ることはない。水槽にスカベンジャー（お掃除屋さん）として入れておくとツチフキに限る。

どこにでもいそうな、とぼけた顔をした魚であるが、分布域は意外と狭く、琵琶湖以西～岡山までと福岡・佐賀に不連続的に自然分布するとされる。



1992.5.5 多布施川水系のクリーク(佐賀市)



胸ビレ前縁にも追い星が発達している

1994.5.1 多布施川水系佐賀城跡南堀(佐賀市)

国内移入種

ズナガニゴイ

Hemibarbus longirostris

コイ科

- 地方名 ー
- 大きさ 20cm
- 生息域 中流域

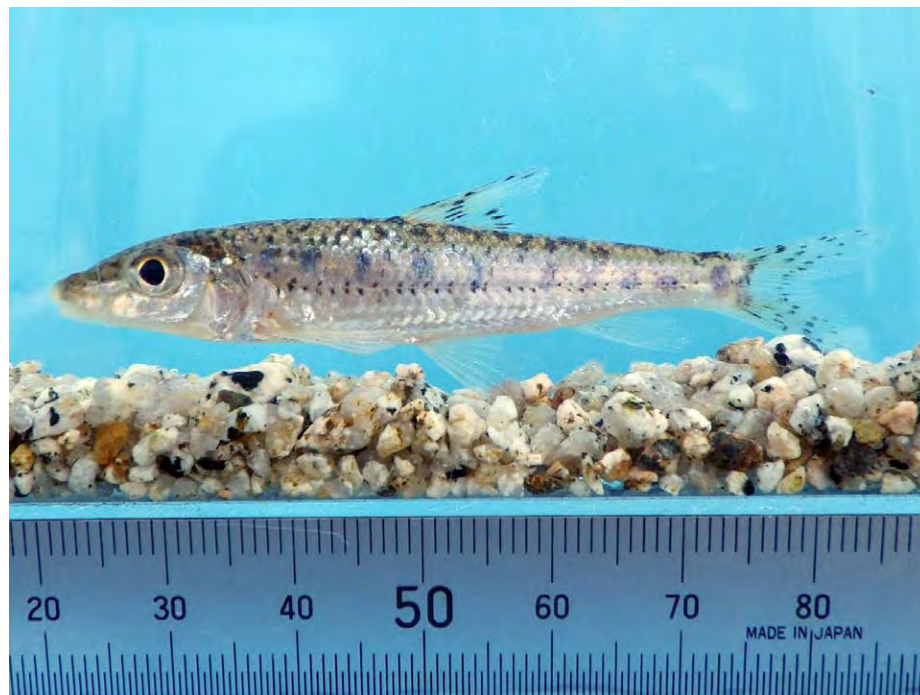
県内の淡水魚を紹介するために佐賀新聞に連載を始めたのが1993年、そしてそれらをまとめて図書『佐賀県の淡水魚』を世に出したのが1995年のことだった。その後、自然環境への関心の高まりから河川法が1997年に、農地法が2009年に改正され、河川では治水上必要のないコンクリート護岸をはがして自然護岸に戻したり、失われる一方だった淵を再生したり、水田に遡上して産卵する魚のために水田魚道が作られるような時代になってきた。

こうした時代の変化のためか、県や国の機関からの相談もずいぶん多くなった。こうした相談には魚類の生息状況調査を伴うことが多く、その調査結果には「ほう」とつぶやきたくなる魚の確認報告が含まれていることがある。

かつて、広島で川の時折見かけたズナガニゴイと久しぶりに再会したのも、そんな報告書の中であった。別名を「ウキガモ」ともいい、これは「浮く」「カマツカ」の意味である。どちらも驚くとカマツカのように砂に潜るところは同じであるが、底生魚であるカマツカが砂の上にドテッと着底しているのに対し、本種は遊泳魚のように水底近くの中層を数匹の群れで泳いでいる。また、水中ではカマツカと間違えることはないが、川岸にうち捨てられて干からびかけた本種は、カマツカと紛らわしい。どちらも口にはそこそこ立派なヒゲを持つが、カマツカの口は大きく突出させることができ、その唇には乳頭状の突起がタワシのように密生していることなどで区別するとよい。

逆に、ニゴイには似ていないと思う方もおられるかもしれないが、体色の薄くなった本種と体側に暗色斑紋が残る小型のニゴイとはやや紛らわしい。この場合、体側の小さな黒点のほかに背びれと尾びれなどにも小さな黒点があることで区別するとよい。

ズナガニゴイの国内の分布域は琵琶湖を含む近畿地方以西の本州であり、九州には分布しない魚である。玉島川へは放流用に取り寄せた魚に混入して運ばれてきたのであろうが、琵琶湖のコアユの持ち込みは今から40年ほど前までのことであり、玉島川で発見された本種がどのようにして持ち込まれたのか大変気になるところである。



2013.9.19 玉島川(唐津市浜玉町) 唐津土木事務所提供

ニゴイ

Hemibarbus barbus

コイ科

- 地方名 さくらばや、いだ
- 大きさ 50cm
- 生息域 上流域下部～河口・汽水域

和名は「似鯉」の意味だが、実物を見てコイと間違える人はいないほど実際は似ていない。敢えていえばヒゲがあることと、成魚のうろこの感じが似ているという程度である。それよりもむしろ大阪の地方名の「キツネゴイ」の方がよっぽど雰囲気はある。

県内ではウグイと区別をせず「さくらばや」「いだ」と呼ばれることが多い。

全長 20cm くらいまでの幼魚は体側に 10 個前後の点列があり、ズナガニゴイと間違われることがある。こちらは別名ウキガモともいい、「浮くカマツカ」の意味で、背ビレや尾ビレにも黒色斑があることで区別できる。ちなみにズナガニゴイは九州には分布しないことになっているが、他の放流魚に混じって、遠からず侵入してくるのかも知れない。

ニゴイの産卵はウグイと同じ頃に同じ様な場所で行われる。また、コイ科の魚にしては耐塩性がやや強く、富栄養化や汚濁にも強いいため、環境が悪化するとウグイに代わって増加するという。特にシルトの堆積が進むと、付着藻類が減少しそれを餌とする多くの魚が減少するのに対して、ニゴイだけは増加する。

県内では、以前はほとんど見かけることはなかったというが、上流部の山の荒廃や堰による流速の低下のためか、筑後川水系の下流域や嘉瀬川でも急激に増加しつつある。

小骨が多いが肉質はよく、てんぷらや唐揚げなどにする。あらいにすると思いのほか美味という。ただし、傷みは早いらしい。



若魚の体側には黒色斑が見られる
1994.8 嘉瀬川(佐賀市久保田町) 古川国夫氏捕獲



1991.10.27 嘉瀬川(佐賀市久保田町)

川と魚たちの未来

田中 信明 (佐賀市)

カヌーで川を下っていて気持ちのよい川というのは水がきれいである魚のたくさんいる川だ。そんな川はあまりダム建設や河川改修でいじられていない川なので風景も最高だ。下を見れば底まで見通せる澄み切った水の中を無数の魚が泳ぎ、川岸に目を移せば川面に大きく枝を伸ばした川辺の木々や葦の茂みに様々な野鳥の姿を見ることができる。自然の中に遊ぶ楽しみの源はそこにあふれる様々な生命なのだ。

そんな川には必ず流域の人々の暮らしが深く結び付いている。漁で生計を立てる川漁師、楽しみで川漁をする人、釣り人、川で泳ぐ子供たち。人影のない川にも、川岸に繋がれた舟や仕掛けられたつけ針にそんな流域の人々の川とのつながりをかいま見ることができる。そこに住む人々が川に愛着をもっている川ではゴミもあまり見ることがない。

しかし、もうそんな川はほとんど無い。淵も瀬もつぶされた平らな川底、人も他の生き物も川から遠ざけてしまうコンクリート護岸、川の流れを分断する無数の堰、そして清流を汚れた水に変えてしまうダムが川に棲む生き物たちの住処を奪い、生命の輝きを失ってしまった川に人々は愛情を失ってしまった。そして、親水、環境整備と称して川の自然を破壊して造られた場所は、それまで川に親しんでいた人々を川から遠ざけ、代わりに川にはなんの愛着もない人々を呼び集めてゴミの山を築いている。これが私たちのふるさと、佐賀の川だ。

嘉瀬川で川下りや釣りをされていて出会うお年寄りたちの話では嘉瀬川がこんな川になってしまったのはこの30年ほどの間だという。ほんの30~40年前までは今の2倍、3倍の豊かな水量を持ち、清く澄み切った水にはたくさんの魚が棲む豊かな川だったというのだ。それが今はかつては珍しくもなかった魚までが絶滅寸前に追い込まれ、釣りの対象として放流されている魚さえ増えることがないという有様になってしまった。昨年、大和町の子供たちと一緒に嘉瀬川を下ったときに、大きなニゴイが姿を見せて子供たちは歓声を上げていたが、ニゴイは汚れた川に多い魚である。「この川はこんなものじゃ

ない。もっと素晴らしい川だったんだよ。」私は子供たちにそう言ってやりたかった。

心配なのはその30年の間に育った世代、つまり私たち以下の世代はその素晴らしかった川の姿を知らないということだ。川の自然の素晴らしさを知らなければ死にかけた川も、「川とはこんなもの」と見過ごしてしまうだろう。そして川はただの水が流れるだけの場所になる。

佐賀の川がたくさん魚たちの棲む生きた川として生命を取り戻せるのか、あるいはそのまま悪い環境に適応できる魚しか棲めない川になってしまうのか、まだ川本来の姿を知っている人間がいる今がその分岐点に違いない。この本に書かれている魚たちは20年、30年後にその元気に泳ぐ姿を見ることができのだろうか。

(たなか・のぶあき、カヌーイスト、アウトドア用品店経営)

堀

覚え書き

「堀干し」の楽しみ

麦作のため水を落とした冬場の堀の楽しみは堀干しだった。魚たちは堀底を掘って作られているヌクメの中に集まってじっとして、さながら越冬状態。水抜きは、古くは水車を、後にはポンプを使った。いよいよ堀が干し上がりヌクメを開くと、コイ、フナ、ナマズ、ウナギ、ハヤなど食用魚からギバチ、ライギョまでがバチャバチャ。スッポンも加わり、魚市場のにぎやかさ。魚買いさんもやってきた。

その日の夕餉は、コイの味噌汁にフナの酢ぬたが賞味された。その夜遅くまでかかって焼いてつくられた小フナの串焼きは、麦藁の束に刺し、かまどの上などにつり下げられて保存食（ヒボカシ）とした。時々取り出しては、さっとあぶって醤油で食べる味は、酒の友として珍重された。

イトモロコ

Squalidus gracilis gracilis

コイ科

- 地方名 いしばや、そこばえ、ほんもろこ
- 大きさ 8cm
- 生息域 中～下流域

どこにでもいる何の特徴もない普通の魚というものは、いつでもとれるという安心感から写真も撮らない。おまけに、小型の魚はちよろちよろとカメラの前を行ったり来たりで、止まったかと思うと水草の陰になっている。シャッターを押す指に驚いて U ターンする事もある。また、銀色の魚はストロボの向きを考えないと光を反射してしまったり、魚体に風景が反射して写り込んだりで、フィルム 1 本使ってもまるで使いものにならないと言うことはざらである。

このイトモロコもそんな魚のひとつで、冬になって低温のため動きが緩慢になってようやく撮れたものである。

木曾川～熊本北部の西日本に広く分布するが、琵琶湖一带の近畿地方では珍しい魚で宝物扱いをされているそうである。しかし、県内では河川中流域に普通に見られる魚である。やや流れのある川の、流心をはずれた流れの緩やかな石の陰などに 10 尾程度の群で定位していることが多い。

イトモロコは体の割に眼が大きく愛らしい。口元にはやはり体の割には長い 1 対のヒゲがあり、その長さは眼径と同長以上である。モロコと呼ばれる魚は似たものが多いが、この長いヒゲと側線上のうろこは上下に著しく長いことが特徴である。



1993.8.28 巖木川(唐津市巖木町)

国内移入種

コウライモロコ

Squalidus chankaensis tsuchigae

コイ科

- 地方名 ー
- 大きさ 7cm
- 生息域 中～下流域

イトモロコと同じスゴモロコ属の魚で、小型のものは一見やせたイトモロコのようにも見えるが、イトモロコの体側の側線鱗は他の鱗より背腹方向に一段と幅が広がっているのに対して、本種の側線鱗は他の鱗と大差がないので容易に区別がつく。

コウライモロコは国内では本来、濃尾平野、和歌山県紀ノ川から広島県芦田川、四国の吉野川に分布する魚であり、九州のものは国内移入種である。おそらくアユなどの放流に混入して運ばれたものが定着したのであろう。2000年頃から鳥栖市の沼川、安良川、轟木川、秋光川と宝満川の合流点付近をはじめ、佐賀市の巨勢川など筑後川水系の河川で確認され始めた。

琵琶湖にはコウライモロコときわめてよく似た固有亜種であるスゴモロコが分布するとされている。近年、これら2種は形態的にも明確に区別ができないばかりか遺伝的にも区別できないという研究もあり、今後「同物異名」と認められればスゴモロコにまとめられることになると思うが、ここではコウライモロコという和名を使うことにしておく。



2013.10.29 柳川市内のクリーク(福岡県) 九州農政局提供

ドジョウ

Misgurnus anguillicaudatus

ドジョウ科

情報不足

- 地方名 どじょう、どじゅう、どんじゅう、きねかんどじょう、きねどじょう
- 大きさ 12cm
- 生息域 上流域の下部～下流域、細流、水田

河川よりも、小川や水田わきの用水路などに生息するなじみ深い魚である。地方名の「きねかん ——」や「きね ——」は特に大型のものを指す呼称である。

ドジョウの生活する環境は、干上がったり夏場には水温が40℃を超え酸欠になることもある厳しい環境である。そうした環境に生活するドジョウは”魚離れ”した能力を持っている。皮膚が乾燥しない程度の水分があれば泥の中に潜って雨が降るのを待つことができるし、酸素はえら呼吸だけでなく、皮膚呼吸や腸呼吸によって補うことができる。たらいに入れておくと、ちょろちょろと水面へ上がってきては空気を飲み込み、底へ降りながら肛門から気泡を出すのを見ることができる。関東には、その様子から「おどりこ」という地方名もある。

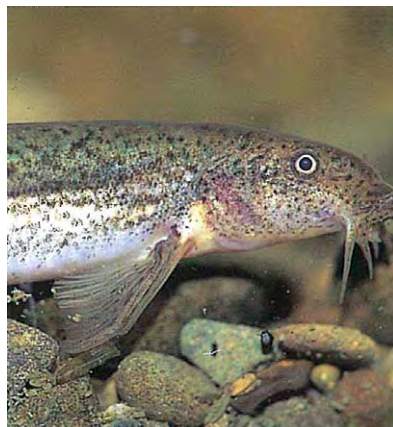
雌雄の区別は、胸ビレを見れば容易に見分けられる。つまり、雄の胸ビレは大きく先が尖っているが、雌はその2/3ほどしかなく先端は丸い。また、雄の胸ビレ基部には数mmほどの軟骨質の骨質盤が見られる。

ドジョウといえば、かつては農村部の子供の小遣い銭稼ぎのタネだった。私の父親の体験では竹で編んだテボを水路にしかけて翌朝捕獲し、行商人に買い取ってもらっていたらしい。

それほど、どこにでもいたドジョウも現在の子供達にとっては見たことのない魚の一つになってしまったようだ。水槽に飼育しているドジョウを見て「これウナギ？」と聞く子供たちは意外に多い。現在ではドジョウを探すならば平野部でなく、かえって圃場整備が行われていない山間の水田の方が確実である。



1992.8.9 田手川(吉野ヶ里町(旧東脊振村))



雄の胸ビレは大きく尖っている
1994.5.27 大串川水系のため池(佐賀市富士町)
古川雅通氏捕獲



雌の胸ビレは小さく丸みを帯びる
1994.5.27 (同左)
古川雅通氏捕獲

ヤマトシマドジョウ

Cobitis matsubarae

ドジョウ科

絶滅危惧Ⅱ類

- 地方名 しまどじょう、すなくいどじょう
- 大きさ 10cm
- 生息域 中流域

別名タイリクシマドジョウともいう。九州と山口県の一部に分布する。県内では流れのある河川で、底質が砂礫であれば、どこにでも生息する。

砂の中の小動物等を口から吸い込み、えら穴から砂粒を吹き出しながら前進して餌を取る。同じような食性を持つカマツカほどではないが、驚くと砂の中に潜る。

ヒゲは6本で、体側および背中の中黒褐色の点列は、別種と思えるほど変異が大きい。また、眼の下には、直立できる小さな硬い棘があるが、別に毒があるわけではない。雌雄の区別はドジョウと同様である。胸ビレの形や骨質盤の有無のほか、大きさではやはり雌が大型になる。

シマドジョウ類は、分類がやや難しい。県内に生息するシマドジョウ類はヤマトシマドジョウと考えてほぼ間違いないが、よく似た本州に分布するシマドジョウと区別するためには、雄の胸ビレの付け根の骨質盤の形を見る必要がある。ヤマトシマドジョウの骨質盤は単純な円形であるが、シマドジョウでは、くちばし状になっている。骨質盤を持たない幼魚や雌では区別は難しい。また、体側の模様が点列でなく、縦条になっていればスジシマドジョウなどの可能性がある。

さらに細かい話になるがヤマトシマドジョウの染色体数は94本であるが、有明海に流入する河川に生息するものは染色体が86本である。染色体数の異なる生物同士は子孫を作ることができないため、別種ということになる。そのうち佐賀平野側のもは「アリアケシマドジョウ」とでも呼ばれることになるのだろうか？



雄 1991.9.6 馬場川(神埼市神埼町)



1994.8.1 六角川(武雄市)



胸ビレ基部の骨質板は雄のみにみられる
1998.8.16 牛津川(多久市)

アリアケスジシマドジョウ

Cobitis kaibarai

ドジョウ科

絶滅危惧 I B 類

- 地方名 しまどじょう、すなくいどじょう（ヤマトシマドジョウと混称）
- 大きさ 雄 5.5cm 雌 7cm
- 生息域 中～下流域、小水路、クリーク

以前のドジョウに関する認識は実に単純であった。つまり、水田地帯の池や溝に住むドジョウに対して、流れのある川に住む点列のあるドジョウの仲間をシマドジョウという。山口県と九州にはシマドジョウに似たヤマトシマドジョウが分布している。さらに、ヤマトシマドジョウの亜種に、体側の模様が筋縞状になっているスジシマドジョウがあるといった感じである。

しかし、その後スジシマドジョウはヤマトシマドジョウの亜種ではないばかりか、10を超える多くのグループを含んでいたことが明らかになってきた。

まず、1987年に大型種、中型種、小型種の3つの種にわけられた。特に小型種は東海型、淀川型、山陽型、山陰型などの「型」として細かく分けられた。そして、2012年に福岡県の中島淳氏らの研究で、これまで「型」として区別されてきたものには、「型」以上の違いがあるとして、「新亜種」や「新種」に昇格した。これまで中型種(新称ナミスジシマドジョウ)とされていたもののうち、遠賀川水系のものは新亜種オンガスジシマドジョウ、博多湾流入河川のものは新亜種ハカタスジシマドジョウといった感じである。

この時、同時に有明海に流れ込む福岡、佐賀、熊本の河川に生息するこれまで小型種九州型と呼ばれてきたものが独立した種であるとされ、アリアケスジシマドジョウとされた。

本種は、かつてヤマトシマドジョウの2倍体種族として扱われてきたことが示すように、筋縞模様ではなく、点列模様であることも少なくない。むしろ、雌では点列模様が普通である。点列模様の個体はヤマトシマドジョウによく似るが、尾びれ基部の漆黒の斑紋が背側の1つしかないことで区別できる。

本種の存在を知らなかった20数年前、佐賀市鍋島町の圃場整備の行われていない水田地帯を通りかかったとき、代掻き(しろかき)中の水田横の幅30cmほどの素掘りの溝を遡上する小型のシマドジョウ類の群れをみかけたことがある。この時は、ヤマトシマドジョウの未成魚がなぜ群れているのか不審に思ったものだ。その数年後、そこにつながる新川水系の小水路からたくさんの本種を確認してからは、あれは産卵のために遡上中のアリアケスジシマドジョウの成熟個体群であったと合点がいった。スジシマドジョウ類の産卵期は5～7月で、代掻き直後の水田横の溝などに産卵する。ふ化した仔魚はしばらくの間は一時的水域で過ごすらしい。なお、県内ではこれまでに、六角川、嘉瀬川、筑後川の3水系で確認している。



筋しま模様の雄 1998.5.17 牛津川(多久市)



色が薄くなった雄 1998.5.17 牛津川(多久市) (上と同じ個体)

点列模様の雌
1996.8 嘉瀬川水系のクリーク(佐賀市嘉瀬町)
古川雅通氏捕獲点列模様の雄
1996.8 嘉瀬川水系のクリーク(佐賀市嘉瀬町)
古川雅通氏捕獲

アリアケギバチ

Tachysurus aurantiacus

ギギ科

絶滅危惧Ⅱ類

- 地方名 ぎぎゅう、ぎんぎゅう、ぎゅうぎゅう、ぎんぎよ、ぎんぎよばち、きんぎよばち、ぎぎよ、しゃち、へふいぎんぎよ
- 大きさ 20cm
- 生息域 上～下流域、湖沼

陸に上げると胸ビレと付け根の骨をすり合わせてギュッギュッと音を立てること、背ビレと胸ビレの棘の先端に弱い毒があり、不用意につかむとハチに刺されたような痛みを感じることから、県内には「ぎんぎよばち」をはじめ多くの地方名がある。

ギバチは奇妙な分布をすることでも知られていた魚であった。東海から中四国に近縁なハゲギギをはさんで、北陸以北の北日本と九州に分布域が隔離されているのである。近年になって、同一種と思われていた北日本のギバチと九州のギバチに染色体数や遺伝子に明瞭な相違があることが発見され、九州産のギバチはアリアケギバチとして、別種とされるようになった。

アリアケギバチは、国内で生息が最も危険な状態にある「絶滅危惧種」のひとつである。

昼間は、流れの緩やかな淵尻の石の下や物陰にひそみ、夜間や雨後の濁り水に行動し水生昆虫などを捕食する。水槽中では昼間でも冷凍赤虫やミミズなどを好んで捕食し、比較的飼育しやすい魚である。

県内では、巖木川、中川、浜川、多布施川から確認されている。夜行性の魚でもあり、昼間が中心の調査では、まず確認されないが、様々な地方名の存在が示すように、かつては広くクリークにも生息した魚であり、現在でも意外と多くの河川に生存している可能性もある。生息が確認された地域は、いずれも適当な流れがあり、浮き石や隙間のあいた石垣や水草など隠れ家が豊富な地点である。



1993.10.11 多布施川(佐賀市) 古川国夫氏捕獲

幼魚 1994.9 多布施川(佐賀市)
古川国夫氏捕獲

アリアケギバチの顔 1993.10.11 (同上)

ナマズ

Silurus asotus

ナマズ科

- 地方名 なまず、ひょうたんご、ひゅうたんご、ひょうたん、ひゅうたん
- 大きさ 60cm
- 生息域 中～下流域、クリーク、ため池

「オタマジャクシはカエルの子…」という童謡があるが、初めてナマズの子を見た時、なるほどと思った。胸ビレがなければ、ひげのはえた黒いオタマジャクシにしか見えなかったからである。

この頃は、6本のヒゲを持っているが、成長して数cmになる頃には1対が退化して、親と同様に4本のヒゲを持つようになる。

県内では、「なまず」は30cm以上の成魚を指し、20cm以下の未成魚は「ひゅうたん」「ひょうたんご」などと呼ばれる。

産卵は梅雨の大雨の翌朝に水の落ち口から水田に侵入して行われる。梅雨の早朝に、フナやコイに混じって、水田でバシャバシャと一段と激しく飛沫を上げているのはナマズである。雌に雄がリング状に巻き付いて腹部を圧迫し産卵を促す。近年減少したドジョウの産卵もほぼ同じである。

これらの魚が水田で産卵するのは、水温が高く成長が速いこと、捕食者である大型の魚がないこと、そして餌となるミジンコなどが豊富なことなどである。一步間違えば干物になる可能性もあるが、その危険性を差し引いても、利点の方が大きいのであろう。

ところが、多くの水田がジャンボタニシの侵入を防ぐため水面上に突き出した塩ビ管を通して排水するようになったため産卵場となりうる水田が減少し、「あがりうお」と呼ばれる水田で産卵する魚たちの姿もあまり見られなくなった。

近年、河川の改修については、水辺の環境を重視した「多自然型工法」を導入する方向に変わってきた。ぜひ、河川と接続する小水路や水田との連絡性も考慮して欲しいものである。



「なまず」のサイズになると体色は灰一色になる
1991.8.28 晴気川水系のクリーク(小城市牛津町)



幼魚 1993.7 六角川水系のクリーク(白石町六角)

アカザ

Liobagrus reini

アカザ科

絶滅危惧Ⅱ類

- 地方名 あかなまず、うまんくそぎんぎよ
- 大きさ 10cm
- 生息域 上～中流域

宮城～秋田以南に分布する日本固有種である。アカザの仲間は朝鮮半島、長江以南の中国、台湾に数種が知られるが、国内では一種でアカザ科を形成する。

体色は赤レンガ色で、頭部は縦扁し口の周囲には 8 本のヒゲを持つ。比較的類縁関係の近いギバチと同様に胸ビレと背ビレの棘に毒があり、不用意につかむとかなり痛い目にあう。

卵は黄色で、寒天質に包まれているため 4.6 mmほどと大きく、流れのかなり速い瀬の石の下に 100 個程度産着されて雌によって保護される。

水質が良好で浮き石の多い礫底で、石のまわりや隙間を落ち着きなくチョロチョロと泳ぎまわって水生昆虫などを捕食する。

学生時代に大変お世話になった先輩の調査に同行して、アマゴやイワナ（ゴギ）の生息する上流域で数回お目にかかったことがある。その当時でも平野部ではアカザは見られず、二人とも河川上流部の冷水域に生息する魚と信じていた。後に、中流域にも見られる魚であったのだが生息環境や水質の悪化によって、結果的にその様なところに生き残っているに過ぎないことを先生から教わり驚いた覚えがある。

県内では、1978 年に筑後川に確認例が、田手川に生息の可能性が示唆されているのみであったが、1993 年 4 月に厳木川で、湯浅卓雄氏（岡山市）によって久しぶりに確認された。

夜行性の魚で、もともと九州では数が少ない魚であることから、一般にはほとんど知られていないようである。なお、地方名の「うまんくそぎんぎよ」は田手川、「あかなまず」は城原川の中流域で収集したものであるが、必ずしも本種を指すとは断定できないものここに明記しておく。



1996.9 筑後川水系（福岡県）



1996.9 筑後川水系（福岡県）

国内移入種

ワカサギ

Hypomesus nipponensis

キュウリウオ科

- 地方名 わかさぎ
- 大きさ 11cm
- 生息域 湖沼

ワカサギはキュウリウオ科の魚で、アユやシヤマモのように背ビレの後に脂ビレがあり、魚体からは野菜のキュウリのような匂いがする。また腹ビレが背ビレよりも前に位置するのが特徴である。

北方性の魚で、本来日本海側では島根以北、太平洋側では利根川以北に自然分布する回遊魚である。冬季に氷結した湖で氷に穴をあけて釣るあの魚である。水質や水温への適応性が高く、降海できない場合には湖などに陸封される特徴があり、現在では全国のダム湖などに移植されている。

佐賀県にも以前北山湖に放流され、毎年春先には北山湖に流入する河川に川底が見えないほど大量に遡上する光景が見られたという。しかし、ブラックバスが放流された現在では壊滅状態である。

ところが、1993年10月下旬、知人から「多布施川でシヤマモのような魚がとれた」との電話をいただいた。冷蔵庫に保管してあったそれはワカサギであった。その後、佐賀城の南堀に立ち寄ったとき釣り人の魚籠の中にオイカワに混じっているのを見つけた。急遽さば虫を餌に釣り上げたのが、写真の個体である。また、それ以前にも巨勢川でも1970年代にキュウリの匂いのする魚が捕獲されており、これもワカサギと思われる。

もともと、九州には分布しない魚であり、今回確認されたものが北山湖または、筑後川上流のダム湖等から流下したものの末裔であることはほぼ確実なのだが、それらが夏の間に明海で生育するのか、それとも佐賀城のお堀で生育するのかは不明である。



1993.12.11 多布施川水系佐賀城跡南堀(佐賀市)



ワカサギ捕り
かつては北山湖に流入する河川には
大量のワカサギの群が見られた
(1978.4 佐賀新聞)

アユ

Plecoglossus altivelis altivelis

アユ科

- 地方名 あいご、あいのいお、あゆ
- 大きさ 30cm
- 生息域 中～下流域

清流の女王などと呼ばれる美しい魚体の魚である。河口近くでふ化したアユの仔魚はすぐに海に入り、春に7cmほどに成長して河川に遡上し、河川の中流で石に体あたりして表面に付着するケイ藻やラン藻を独特な口で「けずる」様にして食べる。そのため、アユのいる川の石には独特の形のみみ痕が見られる。また、上流側の工事などで石が泥を被ると付着藻類が死滅し、アユも大きな影響を受ける。秋には体色が黒ずみ「錆(さび)アユ」になって河口付近に移動し、産卵を終えると死亡する。

誕生から死亡するまで1年間の短い一生である。そのため古くは「年魚」の字が当てられている。また、独特な香りを持つことから「香魚」、うろこが小さいことから「細鱗魚」とも表記されることもある。

現在用いられている「鮎」という字は中国ではナマズを意味する。実は、「鮎」は国字なのである。日本書紀、肥前風土記などにあるように神功皇后が松浦地方に立ち寄られた際(おそらく玉島川で)女官の衣から引き抜いた糸に飯粒を付けて魚が釣れるか否かで、戦の勝ち負けを占ったところ、アユが釣れたという故事にちなんだものである。なお、この珍事から、珍しい地=めつらの国=松浦の地名ができたともいう。

現在では、当の「鮎」の字の発祥の地である玉島川では、上流部の開発により流下した土砂が淵や石を埋めアユが減少し、放流が行われている。当地の人は在来の玉島川のアユは放流ものより、はるかに美しいと自慢されている。



1994.7.3 嘉瀬川(佐賀市大和町)



婚姻色のあらわれた産卵期のアユ(錆アユ)
1991.10.27 嘉瀬川(佐賀市久保田町)



遡上期のアユ(シラスアユ)
1993.3.20 半田川(唐津市)
熊本常夫氏捕獲

野鳥と魚

平野 正徳（佐賀市）

佐賀県では今までに約300種の野鳥が知られているが、その半数近くが水鳥や水辺の鳥といわれている海・川・湖沼やその周辺を生活の場としている鳥達で、その中の多くは魚に依存して生きており、魚の減少は野鳥に大きな影響を与える。それはツル・サギ・ウ・カモメ・シギ・カワセミ・海鳥等の仲間で、大空を舞うワシ・タカの中にもフィッシュ・イーターとしてよく知られている種がある。これ等の鳥と魚の関係は野鳥が魚類の捕食者となる場合が一般的だが、時には逆の場合もあるし、又水鳥の体に付いた魚卵が遠隔地に運ばれて魚の増殖に役立つこともある。

魚の集まる所にはいつも水鳥の姿があるが、この習性は古来伝統的な漁法として利用されてきた。水鳥に追われて密集した集団になるキビナゴを網で捕る「鳥もちあじろ」という漁法が古くから瀬戸内海で行われているし、近年盛んになったプレジャーボートによるトローリングも水鳥の群「鳥やま」を発見することから始まる。

川ではウ（佐賀でウノトリ）を使ってアユを捕る鵜飼（うかい）があるが、佐賀地方では以前クレークでフナを捕る鵜飼が行われていた。筑後川上流の原鶴温泉はアユの名所としてもよく知られ、戦前から鵜飼が盛んである。秋も深まり川にアユの姿が見られなくなる頃、ここのウは佐賀市北川副町の鵜匠原口卯六さんに引き継がれ堀の鵜飼に使われるが、春暖かくなると再び原鶴に帰っていく。

舟を使用するアユ漁とは異なり、堀ではウに引き網を付けず自由な行動に任せられる。百匁のフナといえば釣人の間では大物であるが、これ位のフナは一呑みにしていた。又この鵜飼にはいつもお供がついていて、5メートル以上もある長竿の先に網を付け、手前に搔くようにして魚を捕る「まえかき」を持った人達が、ウに追われて岸辺の水草に身を潜めたフナをこの網で捕らせてもらうのである。

ウの籠を担ぐ鵜匠を先頭に、長竿を持った人達が続くこの集団は冬枯れした田園の風物詩として親しまれていたが、鵜匠の原口さんも既に故人となら

れ、今日ではそれを知る人も少なくなったようである。
（ひらの・まさのり、医師、日本野鳥の会佐賀支部長）

アリアケシラウオ

Salanx ariakensis

シラウオ科

絶滅危惧 I A 類

- 地方名 とんさんいお、しらうお
- 大きさ 15cm
- 生息域 河口・汽水域、有明海側のみ

国内最大のシラウオで、有明海湾奥部や諫早湾、熊本県北部の沿岸の塩分濃度が低い浅海に生息する。10月から11月にかけて産卵のために河川の感潮域の上限付近まで遡上する。産卵すると死亡してしまう年魚である。国外では、朝鮮半島と中国の黄海沿岸に分布する。

アリアケシラウオに限らずシラウオの仲間は魚食魚の良好な餌になっている。シラウオの仲間は透明な体で捕食者からの発見を遅らせることで、捕食を免れている。つまり体が大きくなるということは、捕食者に発見される危険性が高くなり、ひいては種の存続にかかわる問題になりかねない。

実際、大型のこの魚が分布している黄海は「黄河の水を流すのか、泥を流すのか」という言葉が示すように、遠く黄土高原から大量の泥を運ぶ黄河のため常に濁っている。また、国内唯一の分布地である有明海も常に泥で濁っている海である。この濁りの著しい環境こそ15cmにも成長するアリアケシラウオが生き残れた理由であろう。

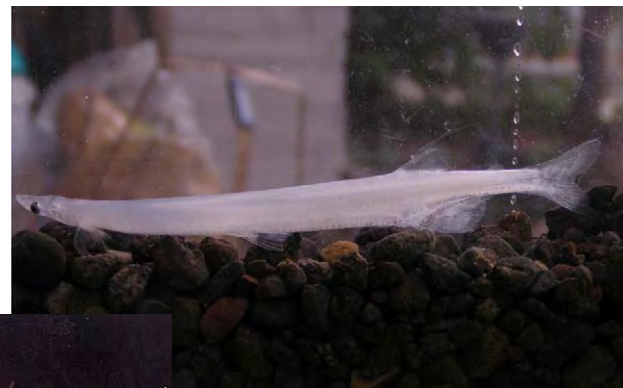
県内には、シラウオ、アリアケヒメシラウオ、アリアケシラウオの3種が生息しているが、このうちシラウオとアリアケヒメシラウオはほとんど区別されていないが、このアリアケシラウオだけは「殿様が食べる魚」の意味の「とんさんいお」として区別されている。

1970年以前は、手押し網で本種を専門に捕る漁業が成立していたが、近年では浅海や河口付近でほかの魚に混じって捕獲される程度にまで激減しており、環境庁によって絶滅危惧種の指定を受けるまでになっている。

2003年に本庄江の深町水門（佐賀市鍋島町八戸）の直下で捕獲された雌の個体の写真をみると、生時の透明感は失われているものの、腹部にはたくさんの卵が透けて見えており、本庄江での産卵の可能性を示唆する貴重な記録である。本種は、その大きさの他、上あごの方が下あごより長いこと、背びれと尻びれの起点の位置があまり変わらないことなどで区別できる。



雌 2003.11.1 本庄江(佐賀市) 古川雅通氏提供
腹部の卵が透けて見えている



雄 2003.11.1 (同上)



頭部は著しく縦扁する。
アリアケシラウオ
1994.7.8 筑後川(佐賀市諸富町)
鷺尾真佐人氏捕獲

アリアケヒメシラウオ

Neosalanx reganius

シラウオ科

絶滅危惧 I A 類

- 地方名 しらうお
- 大きさ 6cm
- 生息域 下流域～河口域、有明海側のみ

有明海は日本最大の干満の差を誇る泥深い海である。また、塩分濃度が低く、時に淡水化することすらある特殊な海である。そのため、有明海やそこに流入する河川には独特な生物が多い。

環境庁指定の絶滅危惧種であるアリアケヒメシラウオは、世界中で有明海に流入する緑川と筑後川にのみ生息するとされる魚である。この魚が特定の河川にのみ生息するのは、ほかのシラウオの仲間が主に沿岸で生活するのに対し、この魚が感潮域の上限に生息する純淡水魚だからである。

中国には本種に近縁な仲間が生息するが、このようにデリケートな分布をする魚を調べることによってこそ、日本列島が中国大陸と陸続きだった頃の環境を推測できるのであろう。

このように小さな魚はただでさえ見分けが難しいのだが、透明なシラウオの仲間をその場で生きのまま確認するのはさらに難しい。アリアケヒメシラウオは他のシラウオより小型で、胸ビレ条数が20本以上もあるうえにその基部が大きいので、胸ビレ付近を拡大すれば比較的容易に区別できる。

1991年には嘉瀬川でも初めて確認されている。有明海の塩分濃度が低下した時に、嘉瀬川に侵入したとも考えられるが、遺伝子の交流のない別な個体群である可能性もある。しかし、1992年の秋以降は河口堰の稼働により生息環境は干満の影響を受けない止水域になってしまっている。シラウオの例のように生存している可能性もないわけではないが、産卵が主に砂底で行われることを考えると、泥をかぶる止水では死滅している可能性の方が高い。

アリアケヒメシラウオは、その後も八田江や六角川等でも捕獲されている。



1999.1.18 筑後川



1991.11.10 嘉瀬川(佐賀市久保田町)



雄(写真上、1994.6.23筑後川)
 雌(写真下、1994.6.23筑後川)
 鷲尾真佐人氏捕獲

シラウオ

salangichthys microdon

シラウオ科

- 地方名 しらうお
- 大きさ 10cm
- 生息域 河口・汽水域

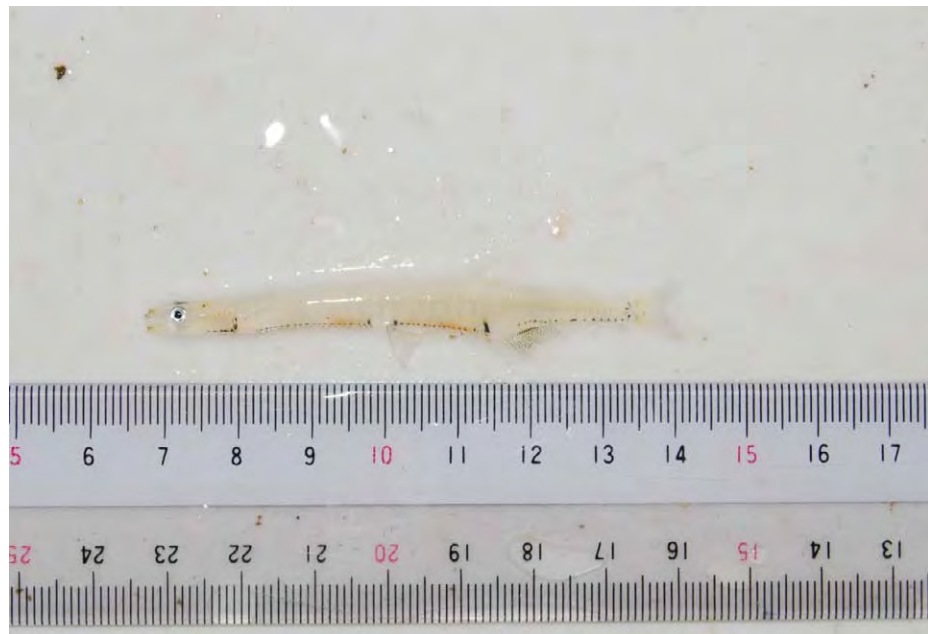
北海道から熊本までの主要河川の河口付近に広く分布する。体は側扁し、頭は縦扁しているため、横から見た姿はジェット戦闘機のような精悍な体形である。

江戸時代、隅田川河口の佃煮の発祥の地佃島一帯では本種が多く捕れたという。「おどり食い」に用いるシロウオより弱く、捕獲するとすぐに死んでしまう。死ぬと他の透明な魚と同じように体が白濁して不透明になる。この時、酸欠に最も弱い脳が先に白濁する。この白く浮き出た脳の形が徳川家の家紋「三つ葉葵」の形に見えることから将軍家への献上魚となったという。県内で生きたまま酢醤油などで食べる「おどり食い」に使われる方はハゼ科のシロウオの方である。こちらは、シーズンには酸素封入したものがスーパーの店頭にも並ぶこともある。

シラウオの方は、シロウオ漁に混じって捕獲されることもあるが、こちらはすぐに死亡してしまう。このため、卵とじや天ぷらのほか酢の物にされることが多い。

3月頃に産卵のため河川に遡上し、水草や砂礫底に卵を産みつける。ふ化した稚魚はすぐに海に入り、産卵期まで沿岸帯で生活する。汽水湖で生まれたものは、ふ化後も海に入らないものが多い。なお、霞ヶ浦や八郎潟では淡水化後も生息が確認されているという。

以前、松浦川本流でのシロウオ漁にて混獲されていたが、松浦大堰の完成により梁の設置が不可能になったため、近年は捕獲されていない。



2013.3.10 木須町地先の伊万里湾(伊万里市) 伊万里土木事務所提供

移入種

ニジマス

Oncorhynchus mykiss

サケ科

要注意外来生物

- 地方名 にじます、ます
- 大きさ 45cm
- 生息域 上～中流域、ダム湖

北米原産の魚で、日本へは 1877 年以來数度に渡って移入されている。サケ科の魚にしては、比較的高水温に耐えることができ、人に慣れやすい。筆者の印象ではエアコンの効いた室内ならば、水槽飼育も十分可能のようだ。

養殖が容易なため全国に広まり、各地で放流もされてきたが、定着した例は少ない。現在では、20～30cm ほどに養殖したものを河川に放ち、直ちに釣らせる「釣り堀型漁業」が主流である。

水生昆虫や落下昆虫のほか甲殻類やヒル、小魚など動物性のものはほとんど何でも食う。水槽内ではコイの餌も食べてくれる。しかし、この食性がたたってか、養殖個体はお互いの背ビレをかじってしまうため、背ビレがいじけてしまっているものが多い。味は、サケ科にしては美味な方ではない。また、降海するものは「スチールヘッド」といわれ、こちらは最大 120cm の記録がある。

話は変わるが、40 年ほど前まで巖木川や嘉瀬川の小支流に、ヤマメともニジマスとも違う魚がいたという。個人的には、イワナの可能性もあると思っている。イワナにはいくつかの亜種があり、中国地方に住むゴギが分布の西限とされている。

巖木川や嘉瀬川の幻の魚が、仮にイワナだったとすると生物地理学上の大発見になる。また、それがどのイワナに近いものなのか？興味は尽きないのだが、語ってくれた人の言うとおり、砂防ダムで流路が分断され、河床がコンクリートで被われてしまえば、生き残っている可能性はほとんどない。



婚姻色 1995.2.26 飼育個体(諫早市 干拓の里「むつごろう水族館」)

サケ

Oncorhynchus keta

サケ科

- 地方名 さけ、しゃけ
- 大きさ 65cm
- 生息域 中～下流域、玄界灘側

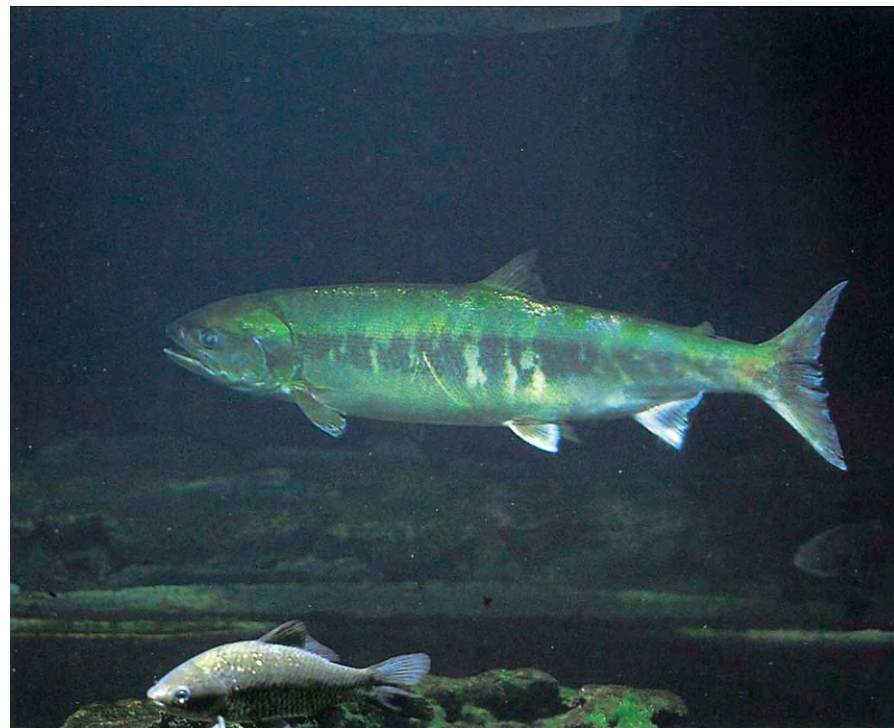
サケといえば新潟や北海道の川に遡上する魚で、九州には縁のない魚とっておられる方も多いことと思う。筆者自身も子供の頃に松浦川でサケの遡上が確認されたことを新聞で読んで驚いた覚えがある。

写真は 1993 年捕獲された雌のサケである。捕獲された方の話では、玉島川には昔から毎年 10 尾程度は遡上してくるとのことである。また、松浦川では産卵もしているという情報もある。それを裏付けるように、1994 年 4 月には松浦川の河口付近に合流する半田川で、降海寸前の 7cm ほどのサケの幼魚が捕獲されている。

なお、スーパー等でお馴染みのサケの切り身にもキングサーモン、紅ザケなどいろいろな名前が記されているが、それぞれキングサーモンはマスノスケ、紅ザケはベニザケ、ピンクサーモンはカラフトマス、銀ザケはギンザケ、そしてシロザケがサケのことである。

さて、サケは 3～5 年ほど海で生活した後、生まれた川の水の匂いをたどって遡上（母川回歸）し、生まれた場所に帰って産卵する事が知られている。河口付近までは地磁気によって自分の帰るべき方角を知るとされていたが、ベニザケの陸封型であるヒメマスについての研究の結果、地磁気ではなく視覚が重要であるとの結果が報告されている。つまり、海底の地形を覚えているのだそう。ものすごい超能力である。

しかし、母川回歸率は 80% 程度で、一般に考えられているほどは高くない。もっとも、こういった「落ちこぼれ」達が分布域の拡大の原動力となるわけであるが。



遡上してきた雌の成魚 1993.10.8 玉島川(唐津市浜玉町) 増田正光氏捕獲



降海前の幼魚 1994.3.29 半田川(唐津市) 熊本常夫氏捕獲

ヤマメ

Oncorhynchus masou masou

サケ科

準絶滅危惧

- 地方名 えのは、やまめ、ます
- 大きさ 30cm(降海型は 60cm)
- 生息域 上流域

ヤマメは夏でも 20℃を超えない溪流に住む、サケ科に属す美味な魚である。体側の小判型の模様はパーマークと呼ばれ、サケ科の幼魚に共通の模様である。他の多くの魚が、降海の前にパーマークが失われるのに対して、河川で一生を過ごすヤマメは成長しても幼魚期の体色を保ち続ける。

しかし、ヤマメは降海して産卵のために河川に遡上するというサケ科の習性を、失ってしまったわけではない。桜の咲く頃に河川に遡上してくる 60cm ほどのサクラマスと呼ばれる魚がヤマメの本来の姿なのである。つまり、正確にはヤマメは「サクラマスの河川残留型」と呼ばれるべきなのである。

同じ親から生まれた兄弟が、降海してマスになるか河川に残留するかは、河川で生活する最初の 1 年間の成長で決まる。成長が悪かったものが降海してマス化するといわれる。このため、夏の短い北日本に降海するものが多く、西日本には河川に残留するものが多い。降海するものはパーマークが失われ、銀白色になり、銀毛(ぎんげ)またはスモルトと呼ばれる。

春の低水温期には六角川河口や多布施川等でも捕獲例がある。これらの個体はパーマークが見られるので、降海の途中というわけではない。しかし、県内にもダム湖を海の代用として、実際に海から遡上するサクラマスが存在するようだ。

9 月頃の産卵期には、台風などで増水した流れに抗して、さらに源流部まで遡上する。この時、普段は越えられない堰堤なども水没した河原の草の間を通過して一気に遡上するという。

肥前風土記には、嘉瀬川(現在の淀姫神社付近)に年に 1 回「海の神」と呼ばれる大きな魚が、たくさん的小魚をつれて海から遡上してくるという記述がある。このことを、今は亡き木村晴朗氏に相談したところ、「それはマスのことでしょうか。分布域から考えると(ヤマメの降海型である)サクラマスではないでしょうか。」と即答された。つまり、産卵のために有明海を通過して嘉瀬川に遡上したサクラマスに、河川残留型であるヤマメの雄が放精しようとして群がったり、オイカワやカマツカなどが卵を食べに群がっている様子を述べたものではないかということである。ヤマメの亜種関係にあるアマゴの降海型であるサツキマスが、河川改修が本格化するまでは広島や山口の河川に遡上していた事実からも十分にあり得そうな話である。



1996.5.10 城原川(神埼市脊振町)



1991.7.29 嘉瀬川(佐賀市三瀬村)

国内移入種

アマゴ

Oncorhynchus masou ishikawae

サケ科

- 地方名 えのは、やまめ
- 大きさ 25cm(降海型は 50cm)
- 生息域 上流域

中国地方の山間を旅行すると「ひらめあります」と書いた看板を目にすることがある。かつては、日本海沿岸で捕れるサメを「わに」と呼んで食していた地域であり、運搬技術の進んだ現在では新鮮な海産魚も手に入るようになってはいるが、わざわざ宣伝するのもおかしな話である。実はこの地域で言う「ひらめ」とは、イワナの仲間であるゴギに対して体幅の薄いヤマメやアマゴを示す地方名なのである。

アマゴはヤマメと大変よく似た魚である。ヤマメそのものの魚体に「ほくろ」のような朱点が見られることで容易に区別できる。しかし、通常あまり区別をされないようで、「ヤマメの塩焼き」を注文すると塩焼きされたアマゴが出される程度のことは珍しいことではない。

アマゴは本来、関東以西の太平洋側および瀬戸内海に流入する河川（九州では大分）にのみ分布する日本固有亜種である。面白いことに、水温の関係で生息できない南九州を除くそれ以外の地域にはヤマメが生息する。当然、佐賀県はヤマメの分布域に当たる。

両種の間に見られる分布上の「住みわけ」は、日本列島の成立の過程を示唆する重要な証拠として注目されてきた。しかし、現在では本来の分布域を無視した放流により、ヤマメとアマゴの分布域は攪乱されつつある。また、そのような地域では「あいの子」が生じている。

なお、ヤマメに降海型のサクラマスがいるように、アマゴにもサツキマスという降海型が存在する。長良川河口大堰問題のシンボルになった魚である。賛否両論あると思うが、堰の稼動により、日本固有亜種のひとつが本来の生活を営める河川が、地球から消滅したことは間違いない。

このように海に下った本種がサツキマスとなって戻って来られる河川は全国的に珍しくなっており、降海型のサツキマスについては、環境省の第4次レッドリストにおいても準絶滅危惧に指定されている。



1994.8.13 天川(唐津市巖木町)



1994.8.13 (同上)

移入種

タウナギ

Monopterus albus

タウナギ科

- 地方名 ー
- 大きさ 80cm
- 生息域 水田、ため池・クリーク

「へじも飼ってるの？」初めて水槽の中のタウナギを見た人は、たいがいギョッとするようである。どう見てもオレンジ色のへじにしか見えない。

ヒレはほぼ完全に退化しており、背ビレ・尾ビレ・尻ビレが癒合してひだ状の隆起になっており、遊泳の役に立っているとは思えない。また、えらはあるが退化しており魚のくせに直接空気を吸えないと溺死する。また、お腹を上にして寝ていることもある。さらに、34cmほどまでは雌であるが46cm以上に成長すると雄に性転換するなど、とにかく妙な魚である。

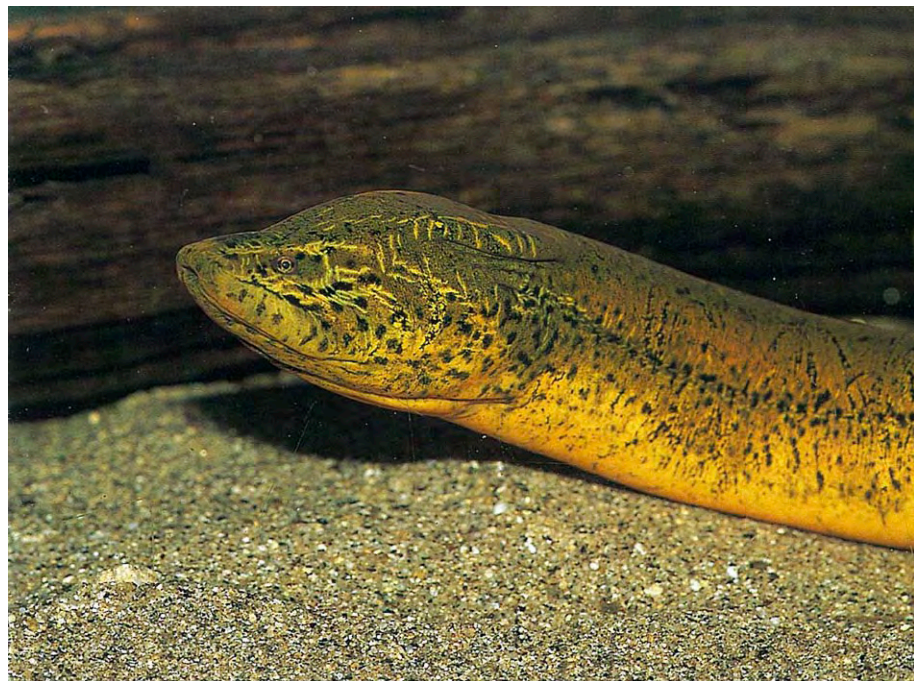
韓国から東南アジアまでに分布し、増血剤としてウナギより高値で取引されるという。

小型のものは水田にトンネルを掘って生活する。そのため棚田のある地方では、水田の水を漏らしてしまう困り者である。眼は、地下生活に適応してかメダカより小さくあまり見えてないようである。そのかわり匂いには敏感で、水槽内ではミミズを専食している。

空気呼吸の比重が大きく、干上がってしまうような沼でも穴の中に潜むことができるし、雨後には陸上を移動することもあるという。ときどき鎌首をもたげるようにして水面に口先をあげて空気を吸う。空気は、口腔内に蓄えられるが、この時頭部の直径が1cmほども膨らむ。

近年、タウナギは本州・九州・中国北部・台湾に分布する系統、中国南部に分布する系統、琉球列島に分布する系統の3つの系統が明らかにされた。これらの系統が「別種」レベルに分化したものなのか、「亜種」または「型」程度のレベルの違いなのかは、今後の判断を待たなければならない。いずれにせよ、沖縄島のタウナギ個体群は環境省第4次レッドリストにおいて絶滅危惧ⅠA類に指定されている。

これに対して、本州・九州のタウナギは中国北部・台湾に分布するものと同じ系統であることなどを根拠として移入されたものとみなされている。



1992.6 八田江川水系のクリーク(佐賀市) 内川正美氏捕獲



空気を吸って、膨らんだ頭部 1992.6 (同上)



1992.6 (同上)

ニホンイトヨ

Gasterosteus nipponicus

トゲウオ科

- 地方名 ー
- 大きさ 8cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域、玄界灘側

トゲウオ科の魚は、ジグザグダンスと呼ばれる求愛行動や鳥の巣に似た産卵巣をつくる魚として有名な魚である。ただし、小鳥顔負けの立派な産卵巣をつくるのは、10本前後の棘を持つトミヨ属の方で、イトヨ属の方は、中に「焼き芋」でも入っていそうな、ゴミ溜めのような産卵巣をこしらえる。

冷水性の回遊魚で、太平洋側では利根川以北、日本海側では山口県以北に分布するとされていた魚である。

背ビレの変化した独立棘を3本持ち、腹ビレも1対の棘になっている。しかし、通常はこの棘は体に密着して収納されており、サバのミニチュアのような印象を受ける。

県内では3月頃に玄界地方の河川に遡上してくる個体がシロウオ漁で混獲される。河川に遡上すると雌は腹部がはちきれんばかりに肥大する。雄は背側が青色、喉から腹にかけては鮮やかな朱色の美しい婚姻色を呈する。

雄は直径6cmほどの円錐型のくぼみの中心に、水草をくわえてきては差し込み、同じく砂を運んできては上からばらまき、この後肛門をすりつけながら腎臓からの粘着液を体を震わせながら塗り付けていく。こうした作業を繰り返してトンネル型の巣を完成させる。

雌は、産卵を行うだけで産卵後数日で死亡する。雄は卵がふ化するまで、侵入者を果敢に攻撃したり、卵に胸びれで新鮮な水を送ったり（ファンニング）、死卵を除いたり甲斐甲斐しく世話をし、稚魚の姿を見届けた後、ゼンマイが切れたように死亡する。3cmほどに成長した稚魚は6月頃に降海し、春まで海で生活する。

イトヨの仲間には、サケのように海と川を往復する降海型と、一生を淡水だけで生活するようになった陸封型の2つがある。これまでイトヨとされてきた魚には、日本海系イトヨと太平洋系イトヨの2つの系統があり、それらは別種であると考えられるようになってきた。なお、日本海系イトヨは降海型のみであるが、太平洋系イトヨには降海型と陸封型がある。陸封型は本州の湧水地帯に見られ、こちらは天然記念物等の指定を受けている。これらの陸封型は1カ所で生じたものが各地に分散したのではなく、各地で独自に陸封されていったと考えられており、これらの分類については、まだ整理されていない。

環境省の第4次レッドリストには「絶滅の恐れのある地域個体群」に「本州のイトヨ日本海型」という呼称で掲載されている。



1994.3.4 半田川(唐津市) 熊本常夫氏捕獲



＜攻撃＞ 縄張りへの侵入者は雌でも激しく攻撃する
1994.3.4 半田川(唐津市) 熊本常夫氏捕獲



＜巣材の搬入＞
水中の植物片をくわえて、
巣の中心に挿入する
1994.3.4 (同上)



＜砂の搬出＞
巣の中の砂をくわえて運び出す
1994.3.4 (同上)



＜ファンニング＞
胸ビレをつかって巣の中の卵に新鮮な水を送る
1994.3.4 (同上)



＜巣材の固定＞
肛門をすりつける様にして、腎臓からの分泌物を塗りつけていく
1994.3.4 半田川(唐津市) 熊本常夫氏捕獲



巣から泳ぎ出た仔魚 1993.5.

ボラ

Mugil cephalus cephalus

ボラ科

- 地方名 いな、ぼら、くろめご、くろめ、だんぎい、ちゅうぼら、ううぼら
- 大きさ 60cm
- 生息域 中～下流域、河口・汽水域

松浦川河口の松浦大堰の魚道にはおびただしい数の 40cm ほどの魚が集まってくる。黒いものもあれば白黒のものもいる。近くの子供に聞くとコイだという。しかし、どうもコイには見えないので捕獲したところ、ボラであった。白く見えたのはうろこに付いた寄生虫であった。

ボラは成長にともなってハク→オボコ→イナ→ボラ→トドと名前が変わる「出世魚」である。うぶな女の子を示す「オボコ娘」、江戸の魚河岸の粋な若者が、結った「鰯背銀杏」からは「イナセな」、行き着くところまで行ったの意味の「トドのつまり」など、ボラから出た言葉は多い。

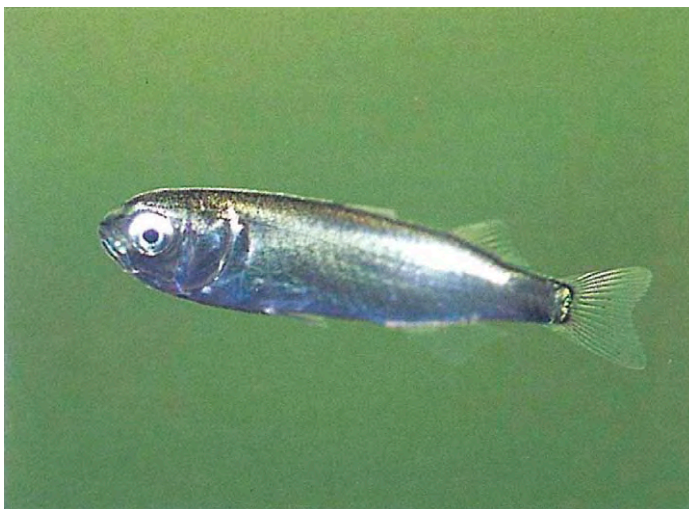
有明海側の地方名も成長に合わせて、「くろめご」→「くろめ」→「だんぎい」→「ぼら」→「ちゅうぼら」→「ううぼら」と、やはり「出世」する。

ボラの卵巣の塩蔵品は、中国の墨に似ているためカラスミと呼ばれ、庶民の口にはなかなか入らない高級珍味である。ボラは日本全国に分布するのに、長崎がカラスミで有名なのは、産卵のため東シナ海に回遊の途中、長崎沖に達したころの卵巣の成熟具合が丁度良いためである。当地には「トンビがタカを産む」と同意の「カラスミ親子」という言葉がある。

西アフリカを除く世界の暖海に広く分布するいわばコスモポリタンで、日本各地の沿岸にも普通に見られる。下流域で渦を巻くように群れているのはボラの子供であることが多い。成長するにしたがって、前後から脂腺（しけん）と呼ばれる透明な膜が眼を被うように発達してくる。また、胸ビレの基部がほんのりと青みを帯びるのもボラの特徴である。



1991.11.2 町田川(唐津市)



稚魚 1995.3.28 塩田川(嬉野市塩田町)

セスジボラ

Chelon affinis

ボラ科

- 地方名 しゅくち、しくち
- 大きさ 30cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

日本の沿岸には14種ほどのボラ科の魚が見られる。このうち、ボラ属のボラ、タイワンメナダ属のタイワンメナダとナンヨウボラ、フウライボラ属のフウライボラ、そしてメナダ属のメナダとコボラとセスジボラの7種は、少なくとも河川の汽水域にまでは侵入するとされる。

県内の河川で普通に見られるのはボラ、メナダ、セスジボラの3種である。ボラは玄界灘側と有明海側の両方に見られるが、メナダは有明海側に多く玄界灘側ではほとんど見かけない。逆に、セスジボラの方は玄界灘側には多いが有明海側では見かけない。どうも、好みの底質が異なるためのようである。

セスジボラは、目にはボラほどではないがボラ同様に透明な脂瞼が発達している。しかし、ボラのような胸ビレ基部の青色斑は見られない。また、目の上半分はメナダのように朱色を帯びている。色彩的には、あまり特徴のない魚であるが、セスジボラの和名が示すように、背中（頭部から背ビレを通る背中線）にくっきりと尾根線状のスジが走っているので、他のボラ科の魚との区別は容易である。

玄海地方では「しゅくち」「すくち」という地方名で呼ばれるが、多くの地方でこの地方名はメナダを指すことか多いので気をつける必要がある。

ボラとメナダの新鮮なものは、刺身などにしても美味であるがセスジボラはあまり食用にされることはないようである。



1994.8.11 松浦川(唐津市)



1994.8.3 松浦川(唐津市)

メナダ

Chelon haematocheilus

ボラ科

- 地方名 えびなご、えびな、えぶな、あかめ、わかやすみ、やすみ、ふるやすみ、なよし、なよせ、まいお、しゅくち、しくち
- 大きさ 100cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

魚に限らず、昆虫にしろ植物にしろ、素人には見分けが難しい仲間がある。それらを見分けられるようになるためには、まず実物をよく見ることである。

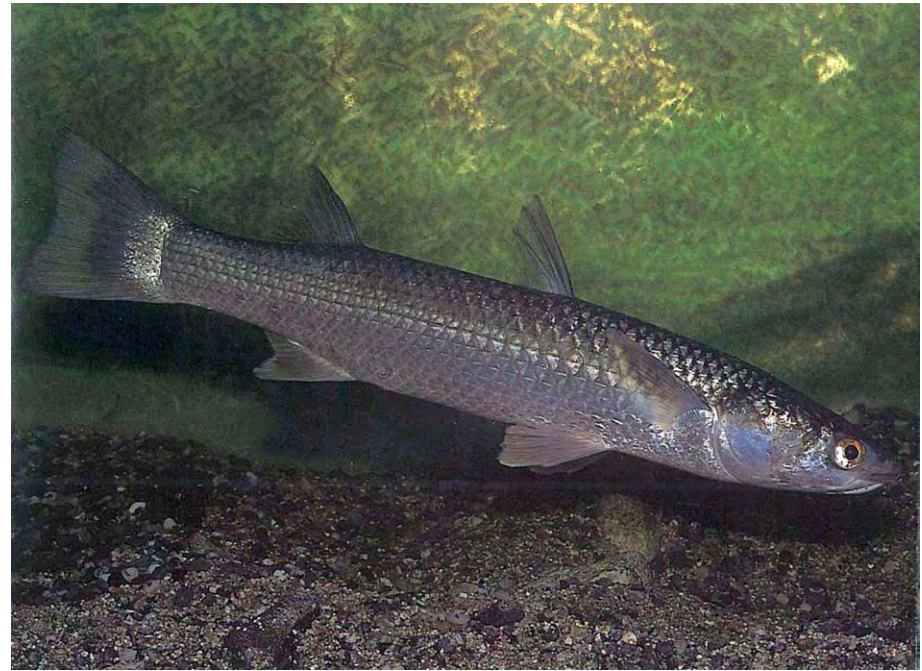
メナダとボラも意外と区別のできない人の多い魚である。しかし、両種を並べてみれば、その違いは一目瞭然のはずである。

まず、体形がメナダの方がはるかにスリムで、上から見ると頭部が偏平（縦偏）で、鰓蓋（えらぶた）のところが最も左右に張り出しており胴体より太くなっている。脂鱗は発達せず、地方名の「あかめ」、「しゅくち」が示すように目の上半分と口元が朱色を帯びる。また、メナダの胸ビレ基部には青色斑はない。

メナダもボラと同様に成長に伴ってコスリ→トウブシ→メナダと名前が変わる出世魚である。県内では「えびなご」→「えびな（えぶな）」→「あかめ」→「わかやすみ」→「やすみ」→「ふるやすみ」→「なよし」と変化する。

八田江や福所江など有明海に注ぐ小河川には「江」のつくものが多い。佐賀の平野部を流れる川を「江湖」と呼ぶことから来ており、「えぶな」（江鮒）とは、その様なところに多い魚であることを示す。また、「まいお」（真魚）の地方名は有明海沿岸で古くから漁業の対象として重要な魚であったことを意味するものと思われる。

九州以北の日本全国に分布するがボラより少なく、北に多いとされる。しかし、泥底を好むためか、城原川、田手川の downstream で捕獲したものはすべてメナダであった。



1991.9.6 田手川(神崎市千代田町)

移入種

カダヤシ

Gambusia affinis

カダヤシ科

- 地方名 たっぶみのー
- 大きさ 5cm
- 生息域 下流域、汽水域、クリーク・ため池

佐賀市蓮池町のとある堀で投網を打ったら見慣れない小魚が 2 種類かかった。後にエツとブルーギルの幼魚であることが分かったが、まだ何かいないかと思って浅瀬を見ると、メダカのような小魚が。しかし、メダカ特有の背中の金色の線がみられず、全体が妙に黒い。手網ですくってみるとカダヤシであった。

地方名の「たっぶみのー」は英名（英語での呼称）のタップミンノウからきたものである。また、「ぼうふら（蚊の幼虫）」を好んで捕食することからモスキートフィッシュという英名もある。ただし、いずれの英名もほかの魚にも用いられるので注意を要する。

県内へは昭和 40 年代にボウフラ退治のためグッピーとともに放流されており、その子孫が各所で定着している。

雄は雌よりも小さく、3cm ほどにしかならない。卵胎生で雌は卵ではなく仔魚を産む。つまり、ほかのほとんどの魚とは異なり、体内受精を行うのである。そのために、雄の尻ビレは細長い交尾器に分化している。小さな雄が雌の死角の下面後方から、交尾器を前方に突き立てて忍び寄る姿はなんとも情けない感じがする。

原産地は北米大陸の南東部で、日本には台湾経由で移植されている。移植の目的は文字通り「蚊絶やし」である。しかし、現実にはメダカの生息域や食性と完全に重複し、より大型になること、卵胎生のため卵が捕食されることがない等の理由で、全国で目下「メダカ絶やし」の真っ最中である。

佐賀平野でも、水通しの悪い南部のクリークは既にカダヤシがメダカに置き換わっており、メダカはやや水通しのある北部に追いやられてしまっている。佐賀市近郊では、多布施川の流量が少ない年にはカダヤシの分布域がより北側まで拡大しているのが観察できる。



雌 1994.8 本庄江水系のクリーク(佐賀市)



雄 1990.8.4 佐賀江川水系のクリーク(佐賀市)

移入種

グッピー

Poecilia reticulata

カダヤシ科

要注意外来生物

- 地方名 めっぴー
- 大きさ 5cm
- 生息域 下流域、汽水域、クリーク・ため池

グッピーといえば熱帯魚（観賞魚）の代表のような魚である。未成魚や雌はカダヤシに似るが、雄の婚姻色は大変派手で美しい。品種改良によって様々な美しい品種がつけられている。色彩も様々であるが、特に尾ビレの変異は同一種とは思えないほどの多くの変異がある。

野外で分布調査を行う場合、種の同定の困難な稚魚を持ち帰って成長後に調べることがある。1992年に武雄市のクリークで行った調査では、持ち帰った稚魚の中にダブルソードと呼ばれるタイプの尾ビレを持つ雄が紛れ込んでいた。

このグッピーの親がカダヤシと同様にボウフラ退治のため持ち込まれたものか、熱帯魚愛好家の水槽から逃げ出した（または捨てられた）のかは不明であるが、最近の流行はデルタテールと呼ばれるタイプが主流なので、かなり以前から自然繁殖している可能性が高い。佐賀市近郊のクリークでも見かけたという話も時折耳に入る。

カダヤシより競争力は弱く低温にも弱い。水質の悪化には強く、本州でも温排水の流れ込む水域には定着することが知られている。温暖な沖縄では、在来のメダカは北米原産のカダヤシに駆逐され、カダヤシもその後の水質の悪化によって、南米原産のグッピーに置き換わりつつある。

「蚊絶やし」のためのカダヤシがメダカを絶やし、生活排水がそのカダヤシを絶やし、住人のいなくなった水域にグッピーが増加しているわけである。

近年、佐賀市を中心に下水道の普及に歩調を合わせるように外来2種とは無関係に、蚊が減少したことは実に皮肉なことである。



婚姻色のあらわれた雄 1992.9.12 六角川水系のクリーク(武雄市)

ミナミメダカ (メダカ南日本集団)

Oryzias latipes

メダカ科

絶滅危惧Ⅱ類

○地方名 かわくじら、ざっこ、しょんしょんいお、たいわし、たかんちよ、たぼや、ちゃーわし、ちゃめご、べいべいたんご、めざか、めざっこ、めじゃか、めだかんちよ、めだこ、めちやばや、めんこ

○大きさ 4cm

○生息域 中～下流域、クリーク・ため池、細流

メダカは水田地帯の魚であり、その分布域も稲作の文化圏と一致する。メダカの属名「オリズミアス」はイネの属名「オリザ」に由来したものであるし、英名もライスフィッシュである。また和名の由来も、眼が高い位置にあるからとする説のほか、こめ(米)ざこ→めざこ→めざか→めだかと転じたとする説もある。

馴染みの深い魚で、全国で地方名のは数は3000とも5000ともいう。県内の古いわらべ歌には、「ベイペイタンゴ(メダカ)寄ってこい。サクズぬって食わすっけん。メジャカ(メダカ)とカッカ(ハゼ)とドンコと酒盛りしたとさ」というものもある。

雌雄の識別点は特徴的な尻ビレの形でできる。雄は平行四辺形、雌はやや先細りになっている。また、雄の背ビレは破れたように見える。2つのヒレが雌雄で異なるのは理由がある。産卵時に雄はこの2つのヒレで器用に雌を抱くのである。

産卵は早朝に行われ、一度の産卵で数十個ほど産む。メダカの雌は産出された卵をしばらく肛門付近に房状に付けたまま泳ぐ。卵は1mm強で2cmほどの粘着糸を持つ。この粘着糸で水草などに1個ずつ産着されてゆく。水温を30℃ほどに保てば周年産卵させることができる。

県内の状況からは不思議に思えるが、他県ではメダカが減少してなかなかお目にかからなくなったため、理科の観察のために業者から観賞用のヒメダカ(緋メダカ)を購入する学校が増えているという。

近年、兵庫県円山川水系以北の日本海沿岸に分布するメダカは別種であることがわかりキタノメダカと呼ぶようになり、それ以外の地域のメダカはミナミメダカと呼ぶようになった。しかし、このミナミメダカも地域によって違いがあり、「東日本型」、「東瀬戸内型」、「西瀬戸内型」、「山陰型」、「北部九州型」、「大隅型」、「有明型」、「薩摩型」、「琉球型」の9つの地域型に細分される。県内では有明海側に「有明型」に玄界灘側には「北部九州型」が分布している。同じように見える魚でも地域に異なるという現象は国内ではメダカで初めて明らかにされたが、この現象は峠や海を越えられないために水系を超えた分布拡大が基本的に難しいという純淡水魚の性質に起因しており、ほとんどの純淡水魚にも同じような現象が起こっているはずである。極端な場合、水系ごとに別種に分化しているということもあり得るのである。



1993.12.24 六角川水系のクリーク(白石町六角)



雌雄は背ビレと尻ビレの形で区別できる。
写真は雄 1993.12.24 (同上)



雌 1993.12.24 (同上)

クルマサヨリ

Hyporhamphus intermedius

サヨリ科

準絶滅危惧

- 地方名 さより
- 大きさ 20cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

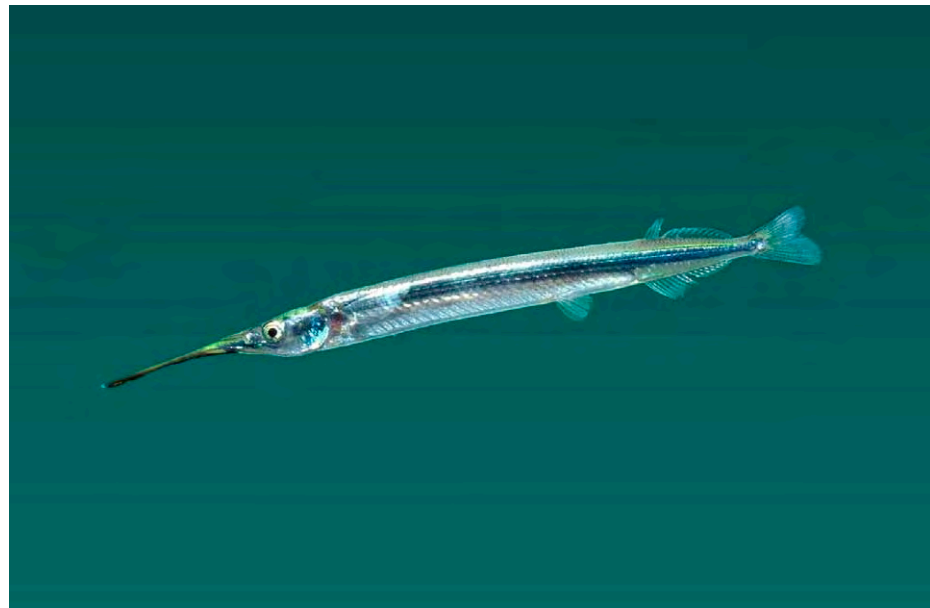
和名は、久留米市付近で捕れることからきたものであるが、有明沿岸の固有種というわけではない。本州、九州の下流域から河口に広く分布し、国外では朝鮮半島および中国にも分布する。

背中は淡黄緑色で腹側は銀白色で気品の感じられる魚である。下あごは著しく突出しており、サヨリに似るがサヨリ(40cm)より小さく、下あごの先端の下面が朱色ではなく黒色であるため区別は容易である。また、サヨリは汽水域までは侵入することがあるが、クルマサヨリのように純淡水域には入らない。逆にクルマサヨリは、塩分濃度の低い有明海でこそ海でも見られるが、ほかの地方では海で見るとはまれである。

柳川市出身の詩人、北原白秋は「サヨリはうすい、サヨリはほそい。ぎんのうを、サヨリ、おねえさまににてる。」と詠んでいる。こちらは、下あごに朱斑のあるサヨリのことのものであるが、「サヨリのうちはまみづか、しおか」とも詠んでいるところを見ると故郷のクルマサヨリのことのようである。

トビウオに近い仲間だけあって、驚くと水面から飛び出して数mほどジャンプする。5月から6月にかけて10尾ほどの群で産卵を行う。夜間には灯火に集まる性質があり、久留米市付近では「サヨリすくい」が風物詩であった。卵は同じダツ目のメダカとほぼ同じ1.3mmほどで、やはり絡みつための長い糸を持ち、水に浸った岸辺の植物や水草に産みつけられる。

近年、ほとんどの河川の河口に最も近い堰が鋼鉄製の転倒堰にかわってからは、海と河川下流部との移動が困難になり減少が著しい。



1984.7.2 筑後川(筑後大堰下) 独立行政法人水資源機構提供

オヤニラミ

Coreoperca kawamebari

スズキ科

絶滅危惧 I B 類

- 地方名 よつめ、よるめひるめ、みずくりせえべえ、みつくりせえべえ、せえべえ
- 大きさ 12cm
- 生息域 中流域

国内のスズキ科の魚の中で唯一の純淡水魚である。和名は、鰓蓋（えらぶた）にある暗青色の眼状斑紋と、本当の眼から放射状にのびる赤褐色模様が、もう 1 尾の頭部の様に見え、それが本来の「親」をにらんでいる様に見えるからだという。しかし、実際には地方名の「よつめ」の方が通りがよい。

体色と模様は精神状態によって瞬時に変化する。興奮時には 1cm ほどの暗褐色の横帯が数本出現し、すみかのヨシの根元に同化して見える。さらにストレスが続くと、真っ黒になり死亡することが多い。

岸辺の植生の豊かで水質のよい河川の緩流部に、縄張りを作って単独生活をする。典型的な動物食性で、水生昆虫や甲殻類、小魚などを捕食する。飼育は、餌さえ確保できれば容易であり、人にもよく慣れる。水槽の前で観察していると、オヤニラミも水槽の中からこちらを観察している。慣れてくると水面からジャンプして餌を捕ったり、指にも反応するようになる。しかし、2 尾のオヤニラミを同じ水槽に入れると大喧嘩の後、必ず一方が死亡する。また、異種の場合でも決して良い結果は生まない。個人での飼育は単独飼育が無難である。

産卵期には雄がコウホネやヨシ、ササ等の水中部分を口で清掃し、雌に 2cm 強の卵を 2 列に産卵させる。雄は稚魚がふ化して泳ぎ去るまで、外敵を追い払ったり、胸ビレで新鮮な水を送ったり、死卵を除去したりと、甲斐甲斐しく世話をする。親不孝の代名詞のような和名と実際は、まるで様子が違う。子育ての様子から「みずくり（水繰り）せえべえ」という地方名がある。

護岸工事などで岸辺の植物帯が除去されると、真っ先に姿を消す魚である。



1992.8.30 田手川(吉野ヶ里町吉田(旧東脊振村))



オヤニラミの顔 1994.8.28
厳木川(唐津市厳木町)



体色の変化は著しい 1994.8.28 (同左)

スズキ

Lateolabrax japonicus
(*L.japonicus* × *L.sp.*)

スズキ科

絶滅のおそれのある地域個体群

- 地方名 はくらご、はくら、あかめばくら、やすみばくら、はね、すすき、せいご、はねせい、すすき
- 大きさ 100cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

河口付近の汽水域には、周縁性淡水魚に分類される沿岸性の海産魚が餌を求めて侵入している。スズキも日本各地の沿岸に見られる周縁性淡水魚である。国外では中国、朝鮮半島、日本海沿岸など東アジアに分布する。ほかにオーストラリア東岸でも確認されているが、こちらは移植によるものとされる。

スズキは出世魚のひとつで、15cm までをバクラ、30cm までをセイゴ、60cm までをハネ、60cm 以上をスズキという。有明海側の地方名はハクラゴ-ハクラ-アカメバクラ-ヤスミバクラ-ハネ-スズキと多くの段階を経て「出世」する。

有明海は有数な漁場であったが、近年では「スズキ」のサイズにまで生き残って出世するものはかなり少なくなっている。産卵は、11月～1月頃に外洋に面した岩礁地帯で行われる。卵は1.2～1.5mmほどの球形で粘着性のない浮遊性卵である。幼魚は沿岸のアマモ場や河口付近に生息する。6月頃には5cmほどに成長し河川に侵入するようになり、8月に10cmほどになると中流域にまで侵入するものもいる。若魚の体側の背側や背ビレに見られる「ほくら」のような黒色斑は成長に伴って消失するが、東シナ海と有明海のものでは成魚まで残存するという。

有明海産のスズキは酵素やDNA分析の結果、タイリクスズキとの交雑個体群に由来する独特な集団であることが明らかになっている。このため、環境省の第3次レッドリストからは「有明海のスズキ」として、絶滅のおそれのある地域個体群に指定されている。



1992.7.26 松浦川(唐津市)

移入種

ブルーギル

- 地方名 ぶるーぎる、ぼろぎれ
- 大きさ 25cm
- 生息域 中～下流域、クリーク・ため池、湖沼

Lepomis macrochirus macrochirus

サンフィッシュ科

この魚は北米原産で、えらぶたに暗青色の斑紋があるため、ブルー（青い）ギル（えら）という。ため池などで「タイのような見慣れない魚が捕れた」と言う場合、このブルーギルであることが多い。

1960年に天皇陛下が皇太子時代に訪米された折、ミシシッピー川産の18尾がシカゴのシェド水族館から贈られたのが始まりで、その後、各地の止水域で爆発的に増加しつつある。

県内には、宮崎県の一ツ瀬ダムから1967年に神埼町の日ノ尺池に入れられたのが最初である。

この魚の分布拡大はオオクチバスの餌用にとの考えからの意識的な放流も大きな要因である。しかし最近では、逆にオオクチバスの幼魚の多くがブルーギルに食われることから食物連鎖ではブルーギルの方がオオクチバスよりも上位に位置すると考えられている。

生後1年に満たない幼魚は全体に透明感がありバステル系の金属粉をまぶしたようで美しいが成長すると全体に黒味を増し、体高も高くなる。また、餌のためか全体が明るい黄色で、体側の暗色横帯が不明瞭になっている場合もある。生殖期の雄は胸部に赤錆色の婚姻色が現れる。産卵はオオクチバスとほぼ同じで、雄が砂泥底に作ったすり鉢状の巣に行われる。ふ化した仔魚は、やはり雄によってしばらく保護される。

在来魚は環境の悪化の他、子供の頃はブルーギルに、成長するとオオクチバスに捕食されるというトリプルパンチによって絶滅の淵に立たされているものも多い。



1991.8.25 中地江川水系のクリーク(神崎市千代田町)



幼魚 1991.8.4
佐賀江川水系のクリーク(佐賀市)



婚姻色 1994.5.1
多布施川水系佐賀城跡南堀(佐賀市)

移入種

オオクチバス

Micropterus salmoides

サンフィッシュ科

- 地方名 ぶらっくばす、ばす
- 大きさ 50cm
- 生息域 中～下流域、クリーク・ため池、湖沼

北米原産の魚で、一般にはブラックバスの名の方がとおりがよい。1925年に箱根の実業家がアメリカ合衆国のオレゴン州から取り寄せて自宅の池に飼っていたものが、芦ノ湖に脱走して定着したといわれている。魚食性が非常に強いいため、芦ノ湖からの持ち出しが禁止されていたにもかかわらず、ルアーフィッシングの対象として各地のダム湖などにヤミ放流が行われ、現在では日本全国のほとんどの止水域に分布するようになっている。

非常に貧食で、カムルチーのように人にこそ食いつかないが、動いているものであれば魚やエビをはじめ何にでも食いつく。

脅えることを知らないようで、捕獲したばかりでも水槽に入れた途端に先住者を食い尽くすのに、ものの数分とかからない。

水槽の中の惨劇と同じ事が天然の水系でも起こっている。淡水資源の宝庫である琵琶湖ではオオクチバスが爆発的に増加し、いたる所で群泳する姿が見られ、これに反比例するよう到来魚が激減し、内水面漁業に大きな被害を与えているという。

県内でも、いつの間にかダム湖に姿が見られるようになり、流下した幼魚が河川やクリークにも分布を広げている。

味は白身で美味。老化防止に効果の高いタウリンを多量に含んでいる。芦ノ湖では高級魚として、琵琶湖では学校給食にも利用されている。健康と淡水生態系の保護のため、釣ったオオクチバスはキャッチアンドリリースなどせず、食べてしまいましょう。

アメリカでは塩分濃度のかなり高い汽水域にも姿が見られるといい、筆者らも有明海内において、上げ潮に乗って餌を追うスズキ(せいご)に混じって餌を追う本種を捕獲している。



1993.8.29 六角川(武雄市)



幼魚 1992.7.19 松浦川(武雄市山内町)

ヒイラギ

Nuchequula nuchalis

ヒイラギ科

- 地方名 しいかぶら、しいら、しぬふた、しびら、ちよん、ちよんごろ、とんば、ひいらぎ
- 大きさ 11cm
- 生息域 河口・汽水域

和名は、背ビレと尻ビレの棘が非常に固く、まるで樹木のヒイラギの葉のようであるところから付けられた名前である。また、地方によっては「ネコナカセ」とか「ネコゴロシ」などと呼ぶところもある。

河川で見られる魚の中では最も銀色の美しい魚で、まるでクロームメッキをほどこしたように輝く。

口は普通に見えるが、目の前方の膨らみの中に、スライドする漏斗型の吻が格納されており、採餌時には漏斗型の口を前方下向きに突出させて、水を吹きかけ餌を掘り出して捕食する。そのときの顔は、「ひょっとこ」を思わせる。

発光する魚といえばチョウチンアンコウのような深海魚のイメージがあるが、内湾性の強いヒイラギも発光する魚である。何のために光るのか、どうやって光るのかは、寡聞にして知らない。

外洋にはほとんど出ず、河川水の影響の強い内湾に群れて生活するが、潮の満ち引きによって汽水域の上限付近までボラ類に混じって河川にも侵入する。しかし、完全な真水では生活できないようで、純淡水域には入らない。

「餌取り」として釣り人に嫌われる魚で、硬い棘のためかあまり食用にもされないが、吸物や酢づけにしたりして骨を柔らかくすれば食べられる。



1992.7.26 松浦川(唐津市)



1994.8.11 松浦川(唐津市)

クロダイ

Acanthopagrus schlegeli

タイ科

- 地方名 くるだい、ちぬ、ちん、めいた
- 大きさ 60cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

クロダイは北海道南部以南の水深 50m ほどの岩の多い浅海に見られる魚であるが、幼魚は春から秋にかけて、よく河川に侵入する。塩分濃度の低い河口や汽水域に餌を求めて侵入するのだろうが、中流域まで侵入することも珍しくないらしい。このため、ボラやスズキと同様に、周縁性淡水魚として扱われている。

などと、頭ではわかっているにもかかわらず、投網に引っかかっているクロダイを初めて見たときは、さすがに狼狽してしまった。捕獲地点は確かに、河口付近の汽水域であったが、捕獲時は干潮で隣の瀬にはアユが泳ぎ、上流から流れ下る水のため、念のため舐めても塩気は微塵も感じなかった。

貪食な魚で、甲殻類や貝類、ゴカイのほか大型の藻類も食いちぎって食べる。水槽内では小魚を他の魚食魚のように丸飲みにするのではなく、食いちぎって食べるのが印象的であった。

それはそうと、釣魚として人気の高いクロダイは、「クロ (標準和名はメジナ)」と区別して、チヌと呼ばれることが多い。実際には、「チン」と発音される。なお、クロダイに非常によく似るが、腹ビレ、尻ビレ、尾ビレの下半分が黄色いものは近縁のキチヌであり、「しらちん」「きびれ」「わせ」「きちん」などと呼ばれる。

クロダイの小型のものは「めいた」と呼ばれる。クロダイは性転換を行う魚で、20cm 以下の小型ものはすべて雄として機能するが、25cm を超える頃には明確に雄と雌が分化する。

関東で小型のクロダイを「ちんちん」と呼ぶのは偶然にしては出来すぎかもしれない。



1994.8.7 糸岐川(太良町)

移入種

ナイルテラピア

Oreochromis niloticus

カワスズメ科

要注意外来生物

- 地方名 ー
- 大きさ 50cm
- 生息域 温排水の流れ込む河川、クリーク、用水路

テラピアの仲間は雌が卵や仔魚を口の中で保育するところからマウスブリーダーとも呼ばれ、観賞魚としても有名なグループで様々な種類が飼育されている。

ナイルテラピアは1962年にアラブ連邦から食用として移入され、各地で温泉水等を利用して養殖がなされている。タイにやや似ていることを良いことにイズミダイ（泉鯛）とか、学名のオレオクロミス・ニロチカの子カを掛けたチカダイの販売促進用の名前も考案されている。

県内では、諸富町の養鰻場で残餌の処理のため、入れられたものが近くのクリークにも自然繁殖しているようである。1991年に千代田町のクリークで捕獲した2cmほどのブルーギルの幼魚の中に、たった1尾だが混っていた。

しかし、夏季には分布を広げるが冬季の低水温に耐えられず、今のところ養殖場の排水口付近以外では生きられないようである。

植物プランクトンやウキクサなども食べる雑食性で、成長が速く水槽内でも1年後には20cmほどに成長した。

ところが、その年の秋にブルーギルと一緒に水槽で、何と産卵してしまったのである。ナイルテラピアは1尾しかいないので処女生殖（単為生殖）の可能性もあるがブルーギルとの雑種の可能性も否定できないため、1993年に単独で飼育したところ、今度は2回の産卵に成功し、2回とも稚魚を得ることができた。

個体数が少ないときの両性生殖は近親交配の危険も高く、なにより相手と巡り会う必要がある。しかし、単為生殖ならばそのどちらの問題も無関係になる。帰化昆虫ではこのような事例は確認されているが、もともと性的分化のあまり進んでいない魚類でも起こるものらしい。



1991.8.25 中地江川水系のクリーク(神崎市千代田町)



上の写真の個体から単為発生したと思われる幼魚 1993.11撮影

シマイサキ

Rhynchopelates oxyrhynchus

シマイサキ科

- 地方名 いのこいお、しまいっさき
- 大きさ 30cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

国内では、富山湾以南の日本海沿岸や青森県以南の太平洋沿岸の内湾などの汽水域や浅い岩礁の周りに生息する魚である。国外では朝鮮半島からインドネシアにかけて分布する。いかにも海水魚という姿であるが、内湾で生活する幼魚期には川にもよく侵入し、純淡水域でも姿を見ることができる。

体側には特徴的な数本の黒い縦縞がある。同じシマイサキ科のコトヒキと似ているが、コトヒキの縞模様は背びれを中心に湾曲しており縞模様は目を通らないのに対し、シマイサキの縞模様は直線的で、この内の1本は上唇から目を通して尾びれに達している。

産卵は5～8月に沖合で行われる。8 mm を超えるサイズの稚魚は砂浜の波打ち際にみられるが、1 cm を超えるサイズになると汽水域に侵入するようになる。15mm までの幼魚は全身が枯れ葉のような黒褐色である。

美味しい魚であるが、流通するほどは獲れないようである。釣り上げられると浮き袋を収縮させて、グウグウと音を出す。

和名は、「縞模様のあるイサキ」の意味であるが、「イサキ」は「イサキ科」に属している魚であり、「シマイサキ科」の「シマイサキ」とはかなり系統の異なる魚である。



1995.10.7 玉島川(唐津市浜玉町)

ヤマノカミ

Trachidermus fasciatus

カジカ科

絶滅危惧 I B 類

- 地方名 やまなかみ、かわなかみ、かわなかみどんこ、かわかみどんこ、かんかんじょう、かわおこず、おこず、たちや
- 大きさ 16cm
- 生息域 中～下流域、有明海側のみ

カジカ科の大陸系遺存種で、国内には有明海湾奥部とその流入河川にのみ生息する。前鰓蓋骨(さいがいこつ)に4つの棘があり、鰓膜(さいまく)が明瞭な橙色であるなどの特徴があり、他と間違えることはない。

和名の由来となった「山の神」は容貌が醜く、古くから女性が山に入るとやきもちを焼くとされた女神である。きこりは、この女神の怒りを鎮めるために、さらに醜悪なオコゼの類を捧げる習慣が全国各地にある。ヤマノカミの名は、オコゼに似ていることからきたものか、実際に「山の神」に捧げたことからきたものかは定かでない。

中国では四鰓鱚とも呼ばれる。これは、成熟した個体では前鰓蓋骨の後方も鰓膜と同じ橙色になるため、鰓蓋が2対あるように見えるためであろう。また、長江流域の松江鱚もスズキではなく、ヤマノカミのことである。

昼間は、石の下や木杭等の物陰に身を寄せ、夜に活動し甲殻類や小魚を捕食する。11月頃に有明海に産卵のために降海する。このころには、雌は卵巣が発達して石鱗でも飲み込んだかのような体形になっている。雄は、頭が雌よりもひとまわり大きくなり区別は容易になる。

河口や干潟域に到達すると、雌はタイラギの貝殻内に2cmほどの粘着卵を産み1年の寿命を終える。雄は、卵を保護した後やはり死亡する。産卵に参加しなかったものは、もう1年生きる。

5月頃に2～3cmほどになった稚魚は河川に遡上する。河川が各種の近代的な堰によって分断された現在では、ほとんどの河川で河口に最も近い堰で遡上が阻害され、本来の生息地に到達できていない。



雌の成魚 1993.10.14 天佑寺川(佐賀市) 森嘉彦氏捕獲



雄の頭部 1994.12 多布施川(佐賀市) 古川国夫氏捕獲



雌の頭部 1994.7.10 浜川(鹿島市)



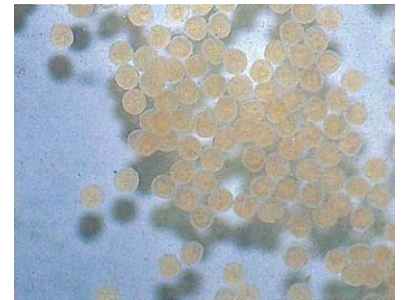
遡上期の幼魚 1993.5.3 本庄江(佐賀市)



雄の成魚は行動も慎重で、第1背ビレの第3棘が短くなる様だ
1994.12 多布施川(佐賀市) 古川国夫氏捕獲



冬期には雌の腹部は卵で膨らむ
1993.10.14 天祐寺川(佐賀市)
森嘉彦氏捕獲



ヤマノカミの卵 1994.2.15

カマキリ(アユカケ)

Cottus kazika

カジカ科

絶滅危惧Ⅱ類

- 地方名 しゃち、やまほーりゃ
- 大きさ 25cm
- 生息域 中～下流域

金沢のゴリ料理に使う魚といえば、そのうまさゆえに思い出される方もあることと思う。その隣の福井県には、霰が降るような寒い夜に白いお腹を上にして海に下るといふ言い伝えから「あられがこ」という地方名もある。

神奈川ー秋田以南、九州の中流域の礫底に生息する。太平洋側より日本海側の方が多いという。秋から冬にかけて、夜間に降海し早春に産卵する。ふ化した稚魚は、約1カ月海で生活し河川に遡上する。

「石化け」の達人で、身を寄せる障害物のないところでは、胸ビレを体に密着させ、尾を曲げて這いつくばるようにしてじっとしている。鰓蓋(えらぶた)の後縁に4本の棘があり、特に一番上の棘は長い。

アユカケという和名は石の表面の付着藻類をはみに来たアユをこの棘に引っかけて捕食するという言い伝えからきたものである。カマキリも同じ意味の和名である。

ヤマノカミと同様に遡上力が大変弱く、階段式魚道はもちろんごく低いコンクリート製の固定堰も越えられないため、近年全国的に減少している。九頭竜川では福井県の天然記念物に指定されている。

カマキリは県内では1978年の第2回自然環境保全調査報告書(淡水魚類)に筑後川、中川と浜川の3河川に「生息を確認したもの及び文献に確実な記載があるもの」として記録されている。そしてその本文には「昭和39年12月、浜川下流でカニウケに入った7尾を現認したのが唯一の確認資料のようである。この時、カニウケの所有者は、これをウルゴと呼んでおり、聞き取りでも中川能見地区でコオサズと呼んで・・・(中略)・・・この魚がカマキリと思われるが確認はない。」と結んである。ところが、筆者が木村清郎先生から生前に伺った話では「後年、標本を確認に赴いたところ、カマキリの標本は見当たらず、かわりに7尾のカジカが入った標本ビンがあった」そうである。実際、同報告書ではカジカは筑後川と糸岐川の2河川に記録があり、カマキリの記録がある中川と浜川にはカジカの記録がない。筆者らの調査では、中川と浜川には現在でもカジカが分布している。これらを総合すると両河川のカマキリの記録はカジカを誤認したものであり、カマキリの確実な記録は県内には存在しないのである。なお、筑後川・矢部川魚類目録(1951年発行の九州大学農学部学芸雑誌に集録)にはカマキリの名が掲載されていることをつけ加えておく。



1990.12.12 山口県田万川 九州環境管理協会提供

カジカ

Cottus pollux

カジカ科

準絶滅危惧

- 地方名 うるご、こおさず
- 大きさ 15cm
- 生息域 上～下流域

カジカといえば、清流で鈴の音のような美しい声で鳴くカジカガエルを連想される方も多いことと思う。実は、魚にもカジカという魚がいるのである。カエルの方はシカのように美しい鳴き声から、魚の方はシカの肉を思わせるような味からきたものらしい。金沢のゴリ料理には本来アユカケを用いるが、最近は資源量の減少で同じ科のカジカが代用とされているようである。

これまで県内のカジカの記録は少なく、そのほとんどは多良岳山系の河川のものであったが、2011年に藤井俊介氏らが嘉瀬川水系における生息状況を丁寧にまとめている。それによると、嘉瀬川の過去の確認地点や北部九州の他河川の分布状況と比べても、嘉瀬川本流や支流のかなり源流に近いところまで分布が狭められており、その生存は予断を許さない状況であることを指摘している。

中川では、本城地区に大きな生息域があったが、上流に中木庭ダムが計画(2007年竣工)されたため、ダムの上流側への移動が試みられている。ダムが建設されると放水のたびに砂や石が流されるため、やがて岩盤がむき出しになってしまう。カジカは浮き石の下の隙間に潜むため、石がないと生活できないし、石が砂に埋没しても住めなくなってしまう。ダムの上流に移動されたものも含めて、本河川においてもその生存は予断を許さない状況である。



1996.9 筑後川水系 (福岡県)



1995.10.8 中川(鹿島市)

ウツセミカジカ

Cottus reinii

カジカ科

絶滅危惧 I B 類

- 地方名 ウルゴ、コオサズ
- 大きさ 17 cm
- 生息域 中～下流域

カジカは以前から3つの型に分けられることが知られていた。つまり、上流から中流域上部に生息して大型の卵を産んで海に下ることなく一生を河川で過ごす大卵型（河川陸封型）と、中流域から下流域上部に生息して小さな卵を産み、ふ化した稚魚が1ヵ月ほど海で生活する時期のある小卵型（両側回遊型）と、琵琶湖に生息するさらに小さな卵を産む湖沼型である。さらに、両側回遊型の中に小卵型とは異なる中卵型の存在を認め、4つの型に分けるとする考え方もある。

これらの型には、別種のレベルに分化しているものが含まれていることは多くの学者が認めているが、それが2種なのか3種なのか、それとも4種なのか学者によって見解が異なる。ここでは、河川陸封型(大卵型)をカジカであるとし、それ以外(両側回遊型、湖沼型)をまとめてウツセミカジカとする考え方に従うことにした。なお、カジカこれらのカジカ類は胸びれ条数が区別のポイントで、カジカ(大卵型)は12～14本、ウツセミカジカは13～17本である。ちなみにウツセミカジカを小卵型と中卵型に分ける場合には前者が15～17本で、後者は13～16本である。写真の浜川で捕獲した個体の胸びれ条数は15本で、最も河口に近い固定堰の下で遡上期のヤマノカミに混じていたものである。

ウツセミカジカはカジカに比べても分布が狭い上、堰によって本来の生息域まで遡上できないためカジカよりさらに危機的な状況にある。



1995.5.4 浜川(鹿島市)



上と同一個体 1995.5.4 浜川(同上) 1996.5撮影

イダテンギンポ

Omobranchus punctatus

イソギンポ科

- 地方名 ー
- 大きさ 9cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

関東以西に分布し、潮間帯や潮だまりなどにも見られる。石や岩の隙間から顔を出して眼をキョロキョロさせて周囲をうかがい、胸ビレと腹ビレで歩くようにして、チョロチョロとはいまわらような泳ぎ方は子ネズミのようで、ひょうきんで愛らしい。

体色は地味な灰褐～灰赤色で、液体が流れたあのような数本の暗色の縦条がぼんやりと見える。この暗色縦条は雄は明瞭であるが、雌ではやや不明瞭である。腹ビレは黄色く、胸ビレより前方の喉のあたりにある。

体は側扁しており体幅は薄い。口は小さく「おちょぼ口」であるが、一番奥の歯は犬歯(牙状の歯)になっている。特に下顎の犬歯は巨大である。

ギンポと名のつく魚は、イソギンポ科のほかにもニシキギンポ科、アサヒギンポ科、ボウズギンポ科などがあるが、このうちイダテンギンポと体形の似ているのは、やはり同じナベカ属の魚である。

イダテンギンポを黄土色にして前半を白色とこげ茶色の横帯で染め分けて後半はごま塩をまぶしたようなナベカ、頭部にニワトリのとさかのような皮弁を持つトサカギンポ、眼の後方に1個のほくろのような黒色斑が見られるクモギンポなどが、岩の多い河口付近の汽水域でも見られることがある。このうち、過去にナベカは糸岐川で確認例がある。



1994.8.7 糸岐川(太良町)

ドンコ

Odontobutis obscura

ドンコ科

- 地方名 いしがきどんこ、どんぼ、どんぼつ、むぎつくだんこ、ぼぼこやし
- 大きさ 25cm
- 生息域 上流～下流域、細流、クレーク・ため池、湖沼

学生時代に先輩の調査に伴って、鳥根県の宍道湖に注ぐ河川の調査に同行したことがある。小さな温泉街を流れる誰からも顧みられないような小川だったが、それが幸いしてか近代的な治水工事とは無縁な状態であった。スキューバダイビングでもするような格好で、さして深くもない川の中をはうようにして潜水すると、握り拳大の石がゴロゴロしている川底に「私は石です」といわんばかりに動かないドンコが、ほぼ 30cm 間隔で並んでいたのには驚いた。肉食性のドンコがこれだけの高密度で生息できるのは、その数十倍の餌となるエビや小魚が宍道湖から補給されてくるためであろう。

海に起源を持つハゼ科の魚は、ほとんどのものが一生のうち何らかの形で海との関わりを持つが、カワヨシノボリとドンコの 2 種は、一生を淡水のみで生活するハゼ科としては数少ない純淡水魚である。海と比べて厳しい淡水環境に適応するため、大型の卵（長径 5 mm、短径 2 mm）を産み、稚魚は最初から親と変わらない姿をしている。

成長に伴って全体に丸みを増していくが、大きくなっても下唇の突出した「うけぐち」のままである。

ドンコは新潟・愛知以西に広く分布し、県内でも普通に見られる。飼育は容易で、慣らせば沈降性のコイ用の餌でも飼育できる。体色も周囲に合わせて白色から黒色まで変えることができる。また、隠れ家として大きな石を入れておけば梅雨頃に産卵床を作った雄が大きな音でゲーゲーと鳴くのを聞くことができる。ただし、金魚等と一緒に水槽に入れないこと。毎日金魚が減っていくのを観察する羽目になる。肉は柔らかい白身で美味、賞味に値する。



1994.5.1 多布施川水系佐賀城跡南堀(佐賀市)



1994.8.1 六角川(武雄市)

佐賀低平地における「水文化」の特性と再生

於保 泰正 (佐賀市)

小学校3年頃までの思い出は、八田江や堀で泳ぎフナ取りに熱中したことである。鱗を光らせながら枝吉樋門を遡上するフナを網でサッとすくい上げバケツ一杯になる位取っていた。石垣ドンボをつった感動も忘れることができない。先輩達10人位の集団で遊んでいたが、技術の足りない低学年ではできないことも多く、上級生になったらと思ううちにクリークでの遊泳が農薬のために禁止された。

十分に遊べなかった思いをして今日まできたが、悔しい思いは生態調査を通して、ドンコやカマツカ(砂もぐり)を取り35年ぶりに味わうことで満たされた。夏になると堀や川で遊んだ風景を思い出し、ふるさとの原風景としてよみがえってくる。

かつて堀の水は飲水や風呂の水として生活に利用され、魚介類を養い、田に揚水して暮らしを支えてきた。川神祭は安全と生命の水に感謝する祭りとして各集落で行われ、ふるさとの豊かな「水文化」が形成されていた。1カ月程かかって行われていたゴミクイ(泥土上げ)は田の肥料として利用され「しまい祝」は社会的絆を強める役割をはたしていた。

水・物質循環が完結した農村部は、戦後の工業化の中で大きく変容していった。ゴミクイは化学肥料に、馬からトラクターに、草とりは除草剤にとってかわられた。1965、6年の「新佐賀段階」と言われる反収日本一は農薬の多量投入によっているが、その反面、1962年の除草剤PCPによる魚毒事件は、堀や有明海のみならず琵琶湖など全国規模で被害が発生し、健康や生態系に深刻な影響を与えてきた。また生活排水のたれ流しにより堀は下水道と化していった。堀は浅くなり、泳ぐことも、フナを食べることもできなくなり、「水文化」は衰退してきた。

このような「水文化」の再生には様々の切り口が考えられるが、水質の改善とゴミクイ(浚渫)が必要不可欠である。水質の改善には、各家庭で生活雑排水を浄化して流すことと、環境保全型農業への転換が早急に検討される必要がある。淡水魚の写真をみると魚たちもそのことを望んでいるように思

われる。

(おぼ・やすまさ、建設コンサルタント経営)

堀

覚え書き

慣例による管理

堀の管理は、古くからの慣例で、堀の近くの水田の持ち主に委ねられていた。東西に走る堀では、その北側に位置する田の主がそれに接する南部の堀を管理した。南北に走る堀では、その東側の田の主がその管理に当たった。管理区域を示すものは「冬堰」と呼ばれ、減水した冬の堀の水面から30センチ内外の高さの堰が設けられていた。冬堰は個人または共同で堀を干して魚を捕るために作られたものが多く、冬といえども排水が続けられるよう冬堰の中央だけは水面以下に掘り下げられていて、次の堀への移動に差し支えないようにしてあった。

「堀覚え書き」(37、61、101、191ページ)以上4編は内田萬二・元佐賀女子短大教授の「堀」(「新郷土」連載)を参考にまとめました。

内田萬二(うちだ・まんじ)氏

略歴 明治42年1月18日生まれ。86歳。東京高師研究科卒。戦後は佐高教官などを経て杵島商校長で定年。佐賀女子短大教授を務めた。佐賀平野の堀(クリーク)に関する研究を続け、そこに生きる動植物から人々の生活、文化まで考察した多くの論文がある。主なものに「堀」(「新郷土」昭和28年から29年まで21回連載)、「佐賀平野の堀の生物相の変遷」、「ヌクメ」、「佐賀平野の堀と漁具と漁法」(佐賀女子短大研究紀要)など。

カワアナゴ

Eleotris oxycephala

カワアナゴ科

- 地方名 どんこ
- 大きさ 25cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

普段あまり泳がず、川底に腹ばいになっている魚を一般に底生魚という。この仲間には、カマツカなどのコイ科、ヤマノカミやアユカケなどのカジカ科、そしてハゼ科などが含まれる。県内では、コイ科を除く底生魚を「どんこ」と総称することが多い。

大まかな科の相違点を述べると、コイ科の底生魚は背ビレが1枚で他は背ビレが2枚である。その中で、うろこがなく鰓蓋（えらぶた）の縁が棘状になっていればカジカ科。うろこがあればハゼ科。さらに、左右の腹ビレが癒合して吸盤状になっていればハゼ亜科、左右の腹ビレが独立していればカワアナゴ亜科である。

カワアナゴは、茨城県以西の流れの緩やかな淀みに生息する。夜行性で、昼間は石の下や倒木の陰に潜み夜間に小魚やエビ、カニ等の甲殻類を捕食する。この生活形態のためか、またはもともと個体数が多くないためか県内での捕獲例は少なく、特に地方名もないようである。六角川の旧河道（古川）で捕獲された写真のカワアナゴも「初めて見るドンコのような魚が捕れた」とわざわざ届けていただいたものである。筆者自身も、このほかには多布施川水系の水路で捕獲されたものを確認したに過ぎない。

頭から背面は平坦で断面は四角に近い、平常の体色は背面が淡黄褐色、腹側は暗褐色のツートンカラーに染め分けられているが、ドンコに近い仲間でもあり、黒一色から灰白色まで大きく変化する。物陰に潜む性質が非常に強い。頭部の下面にも白色の斑点があり、尾ビレと胸ビレの基部にそれぞれ2個の黒色斑が見られる。また、雌の肛門の直後にある生殖突起は房状になっている。



1994.7.3 古川(江北町) 東島禮氏捕獲



1994.7.3 (同上)



腹側 1994.7.3 (同上)

ミミズハゼ

Luciogobius guttatus

ハゼ科

- 地方名 ー
- 大きさ 8cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

名前が示すようにハゼ科の魚であるが、シロウオを除く他のハゼと異なり、背ビレを1つしか持たない。癒合した腹ビレが吸盤状になっているハゼ亜科としての特徴以外の体形や動きは、むしろドジョウに似ている。

全国の河川の下流から河口までの石のある所に潜み、小動物を捕食する。産卵期は2月から5月ごろまでで、他の多くのハゼと同様に石の下面に2.5mmほどのだ円形の卵を一層に産着する。卵はふ化するまで、やはり雄によって保護される。その頃の雄は頭部の筋肉が左右に張り出すので、雌との区別が容易になる。

水槽内では、生きたミジンコで飼育したが、「へ」の字に結んだ口で1mmほどのミジンコを一粒ずつパクリパクリとやる様子はなかなかユーモラスである。

より塩分濃度の高い汽水域や潮間帯の転石部には、腹ビレが痕跡化したナガミミズハゼ、胸ビレの最上鰭条が遊離し10cmなるオオミミズハゼ、眼の下にヒゲ状突起を持つヒゲミミズハゼなども見られる。

また、海の影響のある井戸や洞窟からは、赤みが強く眼が小さく退化したイドミミズハゼやドウクツミミズハゼが住む。この2種については全国でも確認例も少なく生態については不明なことが多い。

海辺にお住まいで井戸をお持ちの方は、一度井戸の中を覗かれてみてはいかがでしょうか。



1994.3.29 半田川(唐津市) 熊本常夫氏捕獲



1994.3.29 半田川(唐津市) (同上)

ヒモハゼ

Eutaenichthys gilli

ハゼ科

準絶滅危惧種

- 地方名 ー
- 大きさ 5cm
- 生息域 河口・汽水域

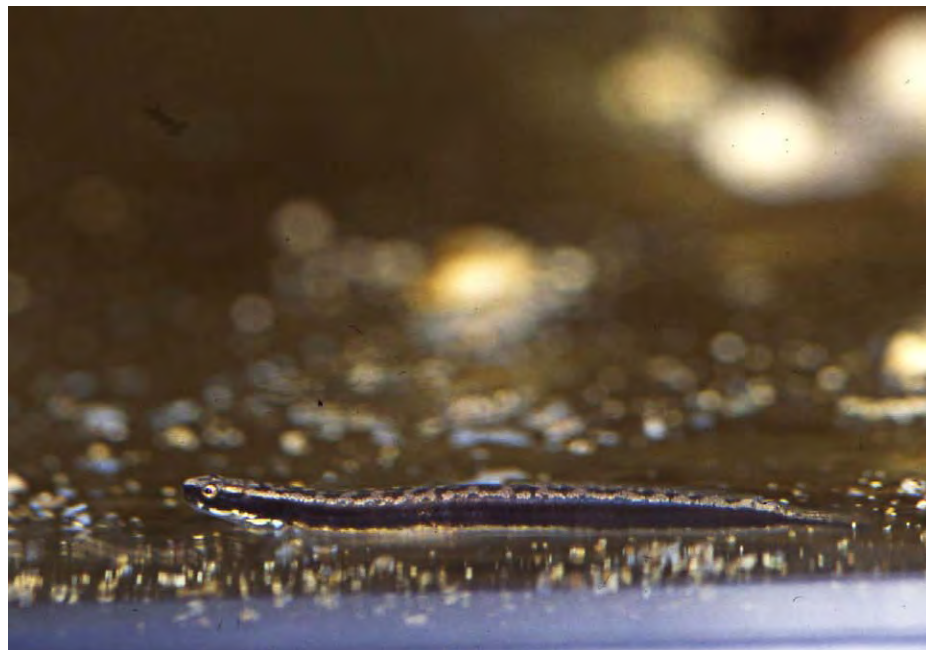
本種と初めて出会ったのは高知県の四万十川の河口近くの目の細かい砂干潟であった。河川調査でカゲロウやカワゲラの幼虫などの幼虫の捕獲にでも使いそうな網戸を改造してつくったような採集用具で、岸辺の砂を振って出てきた太さ3mmほどの白黒のひものような生き物がまさにそれであった。

一応、ハゼの仲間だけあって2枚の背ビレと左右の腹ビレが癒合した吸盤状のヒレを持つ。しかし、第1背びれは非常に小さく目立たない。小さくてわかりにくい、上唇より鼻先の方が前方に丸く張り出しているため、顔立ちにはボウズハゼを思わせる。

国内では青森以南の全国の河口や内湾の砂泥底に広く分布する。なお、琉球列島の個体群は、これまで九州以北のものと同種とされたが、体側の濃色の縦帯が途切れること、第1背びれと第2背びれの間が狭いことや遺伝子の違いなどから、近年では別種と考えられるようになった。

本種は、本州から九州にかけて広く分布するにもかかわらず、その存在があまり知られていないのは、川というよりはほとんど海に近いところにすむこと、およびその小ささと驚くと砂の中に潜ってしまうことなどから、その存在に気付かれないことが原因のようだ。

本種は、テッポウエビ等の甲殻類の生息孔内に隠れているとされるが、近くにあれば利用することもあるといった程度で、テッポウエビとカクレウオのような共生関係はないようだ。



1998.2 四万十川(高知県)



1998.2 四万十川(高知県)

シロウオ

Leucopsarion petersii

ハゼ科

絶滅危惧Ⅱ類

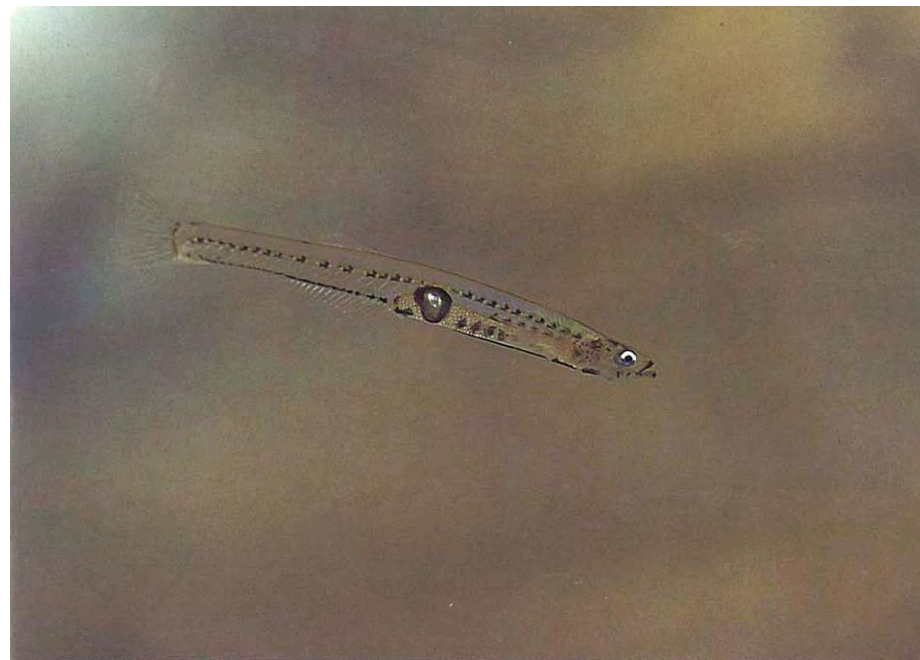
- 地方名 しろうお、しろいお、しらうお、いさざ
- 大きさ 6cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

シラウオ科のシラウオとハゼ科のシロウオ。紛らわしいことこの上ないが、シラウオの方はよく見れば背ビレの後ろに「申し訳」程度の脂ビレがあり、アユやサケに近縁であることが分かる。シロウオの方は胸ビレの直下に左右が癒合した腹ビレが、やはり「おまけ」程度についておりハゼ科と分かる。唐津の料亭などで「おどり食い」されるのはハゼ科のシロウオである。有明海側にも分布しているのだが、玄界灘側ほど熱心には捕獲されていないようである。

シロウオは海で生育し、産卵のために河川に遡上する回遊魚である。2月から4月にかけて遡上するが、河川に入ると消化管は退化して餌を食べない。水深 10cm ~ 20cm の流れの緩やかな砂底に到着すると砂を一粒ずつ口にくわえてトンネルを掘り、水底からさらに 5 ~ 30cm ほど下の石の下面や側面に産卵する。雌は産卵後、雄は卵のふ化後死亡する年魚である。

体はやや鉛色を帯びた透明で、裏側の眼球や背骨も透けて見えるが、死亡すると白濁して不透明になる。雌の腹部の大部分は卵である。この中に 300 ~ 700 粒もの卵が入っているのだから驚きである。体の中央にある目立つ球状の構造は浮力を調節するための浮き袋である。点々と見える小黑斑はメラニン色素を含む色素胞で、唇はこれが集まっており、雌雄とも黒い口紅をしているように見える。

産卵のため、遡上してきたものを水槽に入れてしばらくすると、ピンピンと泳いでいるのは雌ばかりになってしまう。この時雄は、砂の中に潜ったり、石の下の砂粒を 1 粒ずつ口にくわえてせっせと穴を掘り産卵床をこしらえている。



雌の成魚 中央の球状の構造は浮き袋 1995.3.20 半田川(唐津市) 熊本常夫氏捕獲



産卵巣を掘る雄 1994.3.4 半田川(唐津市) 熊本常夫氏捕獲

ワラスボ

Odontamblyopus lacepedii

ハゼ科

絶滅危惧Ⅱ類

- 地方名 じんぎち、すぼ、どうきん、どきゅう、わらすぼ
- 大きさ 35cm
- 生息域 河口・汽水域、有明海側のみ

有明海沿岸の民家の庭先には、ときどき妙な「縄のれん」が見られる。ワラスボを干す風景である。内臓を抜いたワラスボの鰓穴（えらあな）から口にひもを通してぶら下げたおくと、2～3日でかちかちの素干しができあがる。見た目は悪いが、はさみで3cmほどに切って油で炒めて醤油をかけると立派な肴の出来上がりである。保存はきかないが、干し始めて1日ほどの生乾きの頃が最も美味という。

ワラスボは河口付近の軟泥底を好み、国外では朝鮮半島、中国、インドに分布するが、ムツゴロウ同様に国内では有明海にのみ生息する。

見るからに長い体形はウナギを思わせるが、癒合した腹ビレが示すようにハゼ科の魚である。胸ビレの背中側の2/3は鱗膜（きまぐ）がなく、糸状になっており「うちわ」の骨のようである。眼は発達せず結果として成魚では皮下に埋没して機能していない。口は大きく歯は口からむき出しになっている。正面から見た顔は、映画のエイリアンを連想させる。

潮の引いた干潟で、「スボ搔き」と呼ばれる道具で泥を切るようにして引っかけて捕る漁法が有名なため泥の中に生息する魚と思われがちであるが、潮が満ちてくると水中を泳ぎ回る。立派な歯を持ってはいるが噛む力が弱く、ゴカイなどの餌をくわえて逃がさない程度の機能しか持たないようである。ほかに、アゲマキなどの軟体動物も食べているようである。

ワラスボより小型で、赤みの強い「あかすぼ」「ちうなぎ」と呼ばれるものは、チワラスボでこちらは静岡以西の河口域や内湾に広く分布している。



1993.11 筑後川



1993.11 (同上)

ムツゴロウ

Boleophthalmus pectinirostris

ハゼ科

絶滅危惧 I B 類

- 地方名 ほんむつ、むつ、むつごろ、むっごろ、むっとう
- 大きさ 18cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域、有明海側のみ

日本では有明海と八代海の一部にのみ分布する魚で、佐賀の代表のような魚であるが、近年減少が著しく、佐賀平野に住む人でも実物を見たことのない人も少なくなく、トビハゼどころかヨシノボリ類をムツゴロウと思う人すらいる。

減少の原因は生活排水や農薬、ノリ漁業の影響など諸説あったが乱獲が主原因だったらしく、六角川河口一帯が禁漁区に指定されて以降、特に 1990 年からは回復の兆しが見える。

体の割には大型の歯を持っているが、動物食ではない。潮が引いた干潟表面のケイ藻などの植物プランクトンをかき集めて食べている。この時、盛んに頭を左右に振るため遠くからでも確認できる。潮が満ちてくると自分の巣穴に潜って潮が引くのを待つ。

成魚は緑がかった灰色～褐色の体色に点々と瑠璃色の小斑点が散在する。また、2つの背ビレと尾ビレには、小斑点が密にあり美しい。幼魚は、褐色の地にトビハゼを思わせるような不規則な黒色斑がある。

潮間帯に生息するが、100%海水～淡水まで幅広い耐性を持つ。1994 年は記録的な小雨の年で、河川からの流下量が極端に少なく、例年は見られないところにも浮泥の堆積が見られた。六角川の河口から 30 kmほど遡った大日堰（武雄市橘町）は感潮域の上限付近に位置する。普段は大潮の満潮時以外は潮の影響を受けない砂底であるが、この年は大水を経験しなかったため浮泥が堆積し、8 月の中旬にムツゴロウの 3cm ほどの稚魚の大群が見られた。このムツゴロウ達は年末には 10cm を超えるほどに成長していた。彼等にとっては塩分の濃度よりも泥の条件の方が重要なようである。



求愛のジャンプ 1995.6.10 六角川(白石町福富下分)



約 5 cm ほどの未成魚 1991.11.10 嘉瀬川(佐賀市久保田町)



約 3 cm ほどの未成魚 1994.8.1 六角川(武雄市)



<闘争する成魚>

縄張りをもつ大型の個体は同種の未成魚や、シオマネキなどの侵入者を威嚇、排除するが未成魚と同サイズのトビハゼの侵入は気にしない

1994.6.5 六角川(白石町福富下分)



<ムツゴロウの摂食痕>

1994.12.29 六角川(武雄市)



<ムツゴロウの作った道>

摂食中のムツゴロウは数分毎に必ず水の中に飛び込む。水溜りは縄張りを持たない未成魚のオアシスとなる 1994.12.29 (同左)

タビラクチ

Apocryptodon punctatus

ハゼ科

絶滅危惧Ⅱ類

- 地方名 どんこ、げんごろうはぜ、めくらはぜ、ねこむつ
- 大きさ 7cm
- 生息域 河口・汽水域

ムツゴロウに比較的近縁なハゼで、やせたムツゴロウの子供のような体型である。本種の特徴は、眼の後縁を大きく越えて水平に開いた口である。また、特徴的な体側の模様は、長期間ホルマリンに漬けても消えることはない。河口付近の軟泥底干潟などでケイ藻などを食べるため、そのような干潟が発達する閉鎖性の高い海域に見られる。

台湾や朝鮮半島西岸にも分布するといわれるが、それらは別種であるとし、タビラクチは日本固有の魚であるとする学者もある。国内での分布は、太平洋側では三重県から宮崎県にかけて、日本海側では京都府舞鶴湾、山口県油谷湾、九州北岸、瀬戸内海、有明海などが知られている。

ムツゴロウのように泥干潟に穴を掘って生息しているため、ワラスボを引っかけて捕る漁法「すぼかき」でも捕獲されることがある。産卵期は5～7月頃である。泥の中に水平に掘られた横穴の天井に生み付けるところもムツゴロウと同様である。自分で穴を掘ることもできるが、テッポウエビ類の生息孔内に見られることも多く、何らかの共生関係にあるのではないかと考えられている。

本種が生息する泥は生き物が多く、泥の中にも酸素が供給されるため茶色味を帯びている。つまり、表面の泥を削り取ると黒い還元的な泥が現れる不健康な泥底には、本種の姿は見られない。



1999.2.10 八田江川(佐賀市川副町)

トビハゼ

Periophthalmus modestus

ハゼ科

準絶滅危惧

- 地方名 かっちゃんむつ、かっちゃん、かなむつ、とびはぜ
- 大きさ 10cm
- 生息域 河口・汽水域

有明海沿岸以外では、東京湾以西の河口干潟の発達した河川に点々と分布し、日本海側には分布しない。ムツゴロウに似た魚で、ムツゴロウの子供ぐらいに思っている人もいる。

魚のくせに水を嫌うかのように潮が満ちてくると、堤防や石や竹竿などによじ登って潮が引くのをじっと待つ。表皮が乾燥すると時々水に飛び込むがすぐによじ登ってくる。潮が引いて干潟が現れると、干潟の上をちょこまかと活発に動きまわって小動物を捕食する。

ムツゴロウとは形も色彩も異なるが、確実な区別法は敵を威嚇するときを立てる第1背ビレの条数を見ることである。ムツゴロウは5本しかないので簡単に数えられるが、トビハゼは14本で野外では正確に数えるのが難しい。慣れてくると逆光で、シルエットしか見えなくてもその行動パターンで区別できるようになる。満潮時に水面上の竹竿などに張り付いているのは間違いなくトビハゼの方である。また、トビハゼは干潟を歩くとき胸ビレと尻ビレ付近3点で体を支えて、腹部を干潟につけない。大きなムツゴロウの縄張りを素通りできるのがトビハゼで、ムツゴロウの幼魚の場合、縄張りの主に激しく追い払われる。また、干潟表面のケイ藻などを食べるムツゴロウは、ケイ藻を削り取るため腹ばいになって頭をくねくねと左右に振って食事をする。

トビハゼは純淡水では生活できないので淡水魚とはいえないが、100%の海水でも生活できない。汽水魚という言葉があれば一番ぴったりのような気がする。しかし、彼等が一番好むのは水ではなく、空気のような気がする。



1995.2.26 飼育個体(諫早市 干拓の里むつごろう水族館)



水中のトビハゼ

ムツゴロウと異なり、水の中を泳ぐことは多くないが危険を感じると魚の本性を発揮する

1995.2.26 (同上)

マハゼ

Acanthogobius flavimanus

ハゼ科

- 地方名 はぜ
- 大きさ 25cm
- 生息域 中～下流域、河口・汽水域

日本全土と中国、朝鮮半島の河川の汽水域や内湾に広く生息する最も普通に見られる大型のハゼである。夏期には純淡水域にも多く生息する。大衆的な釣りである「ハゼ釣り」の対象となる魚である。

ゴカイ類などの小動物や小魚、藻類などを捕食する。この際、視覚が重要な役割を果たすようで、餌を発見すると腹ビレでバランスをとりながら、胸ビレでのこのこと歩くようにして接近し、一定の距離まで近づくと体勢を整えて一気に飛びかかる。このため、干満の差が非常に大きい有明海側の河川では、干潟の泥が巻き上げられ視覚がきかなくなる大潮時よりも、小潮の時の方がよく釣れるという。

成長したゴクラクハゼやハゼクチに似るが、尾ビレの上部2/3に明瞭な点列が見られ、下側1/3は斑紋がないこと、尾部の下部には青白く光る真珠光沢が見られることなどで区別できる。

産卵は、1月中旬から3月下旬で汽水域の泥底に掘られた2つの出入口を持つY字型の直径5cmほどのトンネル壁面に行われる。1年後に11.5cmほどに成長したものは産卵し死亡してしまうが、8cmほどにしか成長していないものは産卵せず、さらにもう1年生きて産卵後やはり死亡する。

水質の悪化にも耐性が強く、生息域である河口や内湾が汚染によって生き残りはしたが、できものできたような奇形のものや油臭いものが増えて人気を落としたが、秋から冬にかけてのてんぷらは美味である。

近年、船のプラスチックに混じって密出国したと思われるものがアメリカ西海岸に定着しているという。



1992.7.26 松浦川(唐津市)



幼魚の第1背ビレには黒斑が見られる 1993.6 嘉瀬川(佐賀市久保田町)

ハゼクチ

Acanthogobius hasta

ハゼ科

絶滅危惧Ⅱ類

- 地方名 はしくい、ながれはしくい、はぜ、はぜくち
- 大きさ 40cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域、有明海側のみ

以前、知人から「有明海側のハゼと玄海側のハゼは形が違うのはなぜか」と聞かれた事がある。答は簡単、別種だからである。

ハゼクチは、日本では有明海湾奥部にのみ分布する魚なので、玄海地方の河川ではマハゼしか釣れないのである。また、冬季に有明海側の魚屋の店頭に並ぶハゼは、マハゼではなくすべてハゼクチの方である。

マハゼとの違いは、まず大きさ。全国に分布するマハゼが20cmほどにしかならないのに対して、ハゼクチは45cmを超えるものもある。マハゼの尾ビレの上側2/3には点列が見られるが、ハゼクチの尾ビレには点列はない。また、ハゼクチの尾ビレ基部の中央よりやや背中側に寄ったところには、輪郭のぼやけた淡い黒色斑が一つ見られる。マハゼより尾部が長く、それとともなって第2背ビレと尻ビレの軟条がマハゼの13本と11～12本より、それぞれ5本以上多い。

春から秋にかけて河川や時にクリークでも生活し、晩秋に有明海に入って3月頃に産卵。その後、痛々しいほどやせ細って「流れはしくい」となって1年で一生を終える年魚である。つまり、成長のよいものは1年で45cm以上に成長することになる。広大な干潟を持つ有明海の生産力の膨大さを思い知らされる。

1994年の夏に糸岐川のJR鉄橋下で干潮時に行った調査では、同じ地点からマハゼとハゼクチの未成魚が捕獲された。大きさはあまり変わらないが、マハゼが流れのある砂礫底に多かったのに対して、ハゼクチは流れのない泥底の方に「すみわけ」る傾向が見られた。



1993.11 筑後川

アシシロハゼ

Acanthogobius lactipes

ハゼ科

- 地方名 はぜ、どんこ
- 大きさ 9cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

玄海地方の早春の風物詩であるシロウオ漁には場所によっては、様々な汽水域の魚が混獲される。ハゼの間ではヌマチチブと、このアシシロハゼが多い。5cm 程度のアシシロハゼには、これといった特徴がなく、尾ビレの下1/3に黒色の点列が見られないことから、同属のマハゼの幼魚ぐらいに思われていることが多いようだ。

水温が上昇し、7cm ほどに成長すると、体側に10本ほどの淡色の横帯が明瞭になり、他のハゼとの区別が容易にできるようになる。この頃には雄の第1背ビレは糸状にのびだしており、縄張りのつもりなのか盛んに背ビレを立てて威嚇の姿勢を示す。しかし、もともとおとなしいハゼであり、他のハゼのような躍動感も力強さもない。あまり大きくもない口を唸り声でも立てるかの様に精いっぱい開けているのが何ともいじらしい。

マハゼ同様に、日本各地の内湾や汽水域に生息し、底生の小動物や藻類を食べている。産卵期は5月から7月で、他の多くのハゼと同様に沈み石の下面に産着され、やはり雄によって保護される。なお、マハゼの産卵期は1月下旬から3月中旬であり、こちらの稚魚はシロウオ漁の頃には、まだこのサイズまでは成長していない。アシシロハゼと同サイズのマハゼの幼魚は頭が大きい「頭でっかち」で、第1背ビレの後端に明瞭な黒色斑が見られる。



1994.3.29 半田川(唐津市) 熊本常夫氏捕獲



未成魚 1993.3.20 半田川(唐津市) 熊本常夫氏捕獲

アベハゼ

Mugilogobius abei

ハゼ科

- 地方名 ー
- 大きさ 5cm
- 生息域 河口・汽水域

泥底の河口域の穴の中や石や貝殻の隙間などに見られる、体の前半分は横縞模様、後半分は縦帯模様という特徴的な模様のハゼである。丸いうちわ型の尾ビレにも特徴的な放射状の黒い筋が入る。ころころとした可愛い小型のハゼで、観賞用に飼育されることもある。

タンパク質などの窒素原子を含む有機物が体内で分解されると猛毒のアンモニアが生じる。ほ乳類であるヒトは生じたアンモニアを尿素に作り替えてから排出する。尿素は毒性が弱いため、少量の尿の中に濃縮して捨てることができるからである。つまり、節水型の排出システムを備えているのである。それに対して、魚などのほとんどの水生動物は生じたアンモニアを低濃度のまま排出する。それは、水の中で生活する動物は節水の必要ないからである。ところが、アベハゼは例外的にアンモニアを尿素に変える能力を持っている。水中のアンモニア濃度が高くなると、尿素回路(オルニチン回路)が活発に働き、アンモニアが尿素に作り替えられる。

このためアベハゼは水質の悪化に強く、生活廃水などによって他の魚類が生息できないほど汚濁した環境でも生きていくことができる。本種を探すのであれば、干潮時に河口付近の多少腐敗臭がするような干潟の潮だまりの中のゴミの下などを探す方がはやい。

塩分濃度の変化への耐性は強く、淡水でも容易に飼うことができる。



1996.10.27 町田川(唐津市)

シロチチブ

Tridentiger nudicervicus

ハゼ科

準絶滅危惧

- 地方名 ー
- 大きさ 7cm
- 生息域 河口・汽水域

シロチチブはその姿が示すようにヌマチチブやシモフリシマハゼなどと同じチチブ属の魚である。チチブ属の魚は、県内では上流側から海にかけてヌマチチブーシモフリシマハゼーショウキハゼーシロチチブの順にゆるく住み分けている。真水にも住めないが、完全な海にも住まない汽水性の魚である。シモフリシマハゼのように縞模様があるが、体側の縞模様は点列で色も薄い上、漫画にでも出てきそうな「ひげの泥棒さん」を思わせる頭部の模様など、一度見たら間違えることはないだろう。

国外では朝鮮半島の西岸と南岸、台湾などに分布する。かつては国内では有明海のみに分布する特産種とされていたが、近年になって瀬戸内海でも点々と確認されている。いずれにせよ、このような本種の分布は、過去に日本列島と中国大陸が陸続きであった頃の水系のつながりを示しているようで興味深い。有明海特産の多くの魚は、泥底または砂泥底に依存した生活をするが、本種は、砂泥底にも見られるが砂底や砂礫底を好む変り者である。そのため、そのような環境の少ない湾奥部には少ないが、砂礫底の環境があれば河川の河口部を含めた有明海全体に広く分布する。このため、有明海の湾口部では河川の河口でも見られるが、泥底が発達する県内では、河川ではなく有明海の中の干潟でしか見たことがない。

カキ殻の多い砂泥の干潟でカキ殻の裏面に産卵する。近年そのような干潟が減少しているため、準絶滅危惧種に指定されている。



1999.1.31 有明海網洗州 濱野大作氏捕獲



1999.1.31 有明海網洗州(同上)

ショウキハゼ

Tridentiger barbatus

ハゼ科

準絶滅危惧

- 地方名 とらはぜ
- 大きさ 12cm
- 生息域 河口・汽水域

国内では有明海や伊勢湾、瀬戸内海、東京湾などの汽水域に分布する。ずんぐりした体型が示すようにチチブ属のハゼである。有明海には多いが、他地域では珍しいのか、観賞魚として高価で売られているようである。しかし、生命力の強い魚で、船のバラスト水に混入して運ばれたのか、アメリカのカリフォルニア州にも外来生物として定着しているという。

産卵期は7月を中心とした5月から9月で、卵は清掃されたカキ殻に生み付けられ、ふ化するまで雄によって保護される。3年程度生きると考えられている。

シロチチブと同じ場所にも見られるが、本種は河口付近にも見られる。シロチチブの幼魚が河川の影響の少ない干潟域を好むのに対し、本種の幼魚はムツゴロウやワラスボの幼魚のように河川の中に集まる。

本種の最大の特徴は口からほほにかけてワサワサと伸びたヒゲで、和名はそのヒゲが中国の受験の神様、魔除けの神様「鍾馗」を思わせることに由来する。

<参考>

鍾馗は唐の時代の終南山生まれの青年で、科挙(中国の官吏採用試験)でトップの成績でありながら、ヒゲ面の悪人相のため不合格となり絶望の果てに自殺した。しかし、玄宗皇帝に手厚く葬られ、その恩に報いるため天下国家の災いを除く神となったという。



1996.8 有明海網洗州 濱野大作氏捕獲

シモフリシマハゼ

Tridentiger bifasciatus

ハゼ科

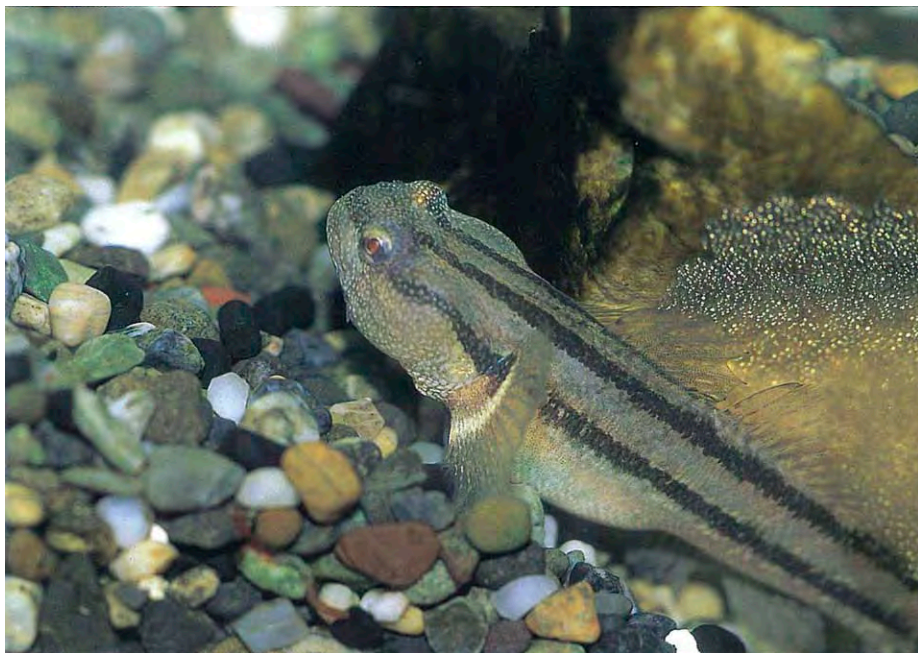
- 地方名 しまはぜ、すじはぜ
- 大きさ 7cm
- 生息域 中～下流域、河口・汽水域、ため池・クリーク

感潮域は、泥の堆積が見られ、いつも濁っていると思われるが小潮の干潮時は河川からの流入水のため意外と透明度が高く、水中眼鏡をつけての潜水調査も河川によっては可能である。そこで目立つのが体長数 cm ほどのヌマチチブなどのハゼ科の未成魚で、所によっては川底一面を被うほど生息することがある。その中でひときわ目立つのが縦縞模様で染め分けられた、このシモフリシマハゼである。ハゼ科のこの魚は好奇心が旺盛で、目の前をピンピンと寄らず離れずの距離で愛敬を振りまいてくれる。「妖精のよう」といえば、ちょっとオーバーかもしれないが可愛い魚である。

シマハゼの名前の由来である眼を通過する体側の縦縞は、大型になると、全体が薄茶色になり不明瞭になる事があるが、その場合でも体側にはうっすらと痕跡がうかがえる。

シマハゼは、近年シモフリシマハゼとアカオビシマハゼの 2 つに分けられるようになった。シモフリシマハゼは頬に見られる小さな白色点が頭部の下面にも見られるのが特徴である。これに対して、アカオビシマハゼは尻ビレに 2 本の赤色の線が見られ、胸ビレの最も背中側の鰭条は、ほかの鰭条のように膜でつながっておらず遊離条となっており、フジツボの見られるような、さらに塩分濃度の高い場所に生息する。

シモフリシマハゼは、ヌマチチブとともに混群をなしていることが多いが、ヌマチチブの方がやや上流側まで生息するようである。しかし、これは淡水への適応力の差よりも流速の影響の方が大きいようである。シモフリシマハゼもヌマチチブ同様に水道水で飼育できるし、何よりヌマチチブの生息しないクリークなどにも見ることができる。



卵を守る雄 1995.4 筑後川 濱野大作氏捕獲



未成魚

1991.10.27 嘉瀬川(佐賀市久保田町)



1995.3.14 塩田川(鹿島市) 藤井秀男氏提供

ヌマチチブ

Tridentiger brevispinis

ハゼ科

- 地方名 あなはぜ、どんこ
- 大きさ 10cm
- 生息域 中～下流域、河口・汽水域

物事を強引に押し通すことを示す言葉に「ゴリ押し」という言葉がある。しかし、この言葉が漁法の一つであることはあまり知られていない。ゴリとはカジカやハゼなどの底生魚を総称する呼称であり、川底に敷いたむしろにこのゴリを川底の石もろとも追い込んで捕らえるのである。ゴリ漁の獲物は、多くの場合ヌマチチブである。

国内の淡水域にはヌマチチブの他にチチブとナガノゴリが生息する。これらの3種は同一種と考えられていたが、最近になって天皇陛下らの研究によって区別されるようになったものである。

このうち本土に分布するヌマチチブとチチブはよく似るが、ヌマチチブの胸ビレ基部の淡色部には橙色の線が見られる。また、第1背ビレにも2～3本の暗赤色線が見られ、雄の第1背ビレは糸状に伸長する。これに対し、チチブは胸ビレ基部の淡色部には橙色の線は見られず、4cmに成長する頃には雌雄とも第1背ビレは糸状に伸長する。

県内の全河川の河口から汽水域にかけて見られる3cmほどの黒っぽいぐんぐりしたハゼの群のほとんどは、ヌマチチブであることが多い。

この時期のヌマチチブは体を横断するように淡色の横帯が7～8本見られるが、成長すると見られなくなり黒地に白色の斑点が見られるようになる。このほか環境や精神状態によって白色～黒色まで大きく色彩を変化させる。



1991.10 嘉瀬川(佐賀市)



未成魚 1994.3.29 半田川(唐津市) 熊本常夫氏捕獲

チチブ

Tridentiger obscurus

ハゼ科

- 地方名 あなはぜ、どんこ
- 大きさ 9cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

どこにでもいる特に面白くもないものは扱いが雑になってしまうのである。私にとってヌマチチブはそのような魚の一つであり、撮影した写真の数も非常に少ない。写真はかつてヌマチチブとして紹介したものであるが、これはチチブの誤りであったので、この場で訂正しておく。

汽水域の上限から感潮域上限付近で最も多いのがチチブの仲間である。ヌマチチブの頁に書いているように南西諸島を除くと国内にはチチブとヌマチチブの2種が生息している。両者は元々単一種とされていただけあって大変似ている。ヌマチチブには胸びれ基部と第1背ビレの根元にオレンジ色の線がみられるが、チチブにはそれがなく第1背ビレの軟条は未成魚期から糸状に伸びること、ほほの白い点がチチブの方が多いためなどで区別できる・・・はずであった。

写真の個体はヌマチチブに混じって有浦川で捕獲したものである。捕獲段階で胸びれ基部の淡色部にオレンジの線が見られなかったためチチブの可能性があると思い、後で確認するために生かして持ち帰ったものである。その日は遅くなったので、当時の勤務校の生物教室の水槽に移して帰宅した。しかし、翌週になって水槽をのぞくと、既に繁殖を迎えて真っ黒くなっており、色彩の特徴がほぼ消えている。ヌマチチブの胸びれ基部のオレンジの線も繁殖期には消失するため、それが無いからといってチチブと判断する根拠にならない。そうこうするうち、捕獲時にオレンジの線が本当になかったのか自信がなくなり、チチブであると断定する勇気が持てなかったのである。

数年後、有浦川や佐志川でチチブを多数確認し、やはりあれはチチブだったのだと確信したのだが後の祭りである。両河川にはチチブとヌマチチブが混生しているが、チチブの方がやや下流に住み分ける傾向があるようだ。なお、今のところ、県内の有明海側の河川ではチチブは確認していない。



1992.8.14 有浦川(玄海町)

ゴクラクハゼ

Rhinogobius giurinus

ハゼ科

- 地方名 ー
- 大きさ 10cm
- 生息域 中～下流域、汽水域

ゴクラクハゼはやや地味な体色ながら「極楽」と言うからには、何か由緒正しい由来があるからに違いないと思うのだが、和名の由来には行き着かなかった。大型の個体の頬に見事な唐草模様状の斑紋が見られるためであろうか。

ゴクラクハゼは、分類の難しいヨシノボリ属に分類されるが、かつては、単一種とされた時期もある他のヨシノボリ類とは、大きさが異なること、眼から口先に伸びる赤い線が見られないこと、背面のうろこが胸ビレの付け根よりも遙かに前方の眼の直後までであることなどで、簡単に区別できる。また、頬のミミズ状の斑紋と体側に見られる小さな青い斑点等も一目で分かる特徴である。どちらも成長に伴ってより派手に、目立つようになる。

本来、茨城ー福井以南の中・下流域に分布するが、南九州から運ばれる仔アユに混入して北日本にも分布を拡大しているという。この中にはダム湖を海の代わりにして、「陸封」されるものもある。北山ダム内でも人知れず暮らしていたのだろうか、2012年に竣工した嘉瀬川ダムで2013年に生息が確認されたのには驚いた。

県内のほとんどの河川の下流の、丸い小石が半ば砂に埋まったような平瀬や淵に生息する。特に有浦川では数も多く、下流側からマハゼーゴクラクハゼーシマヨシノボリと「すみわけ」が見られる。



1992.8.14 有浦川(玄海町)



未成魚 1995.3.20 半田川(唐津市) 熊本常夫氏捕獲

カワヨシノボリ

Rhinogobius flumineus

ハゼ科

○地方名 いしびっちゃ、いしもち、いしもちゃ、いせもっ
ちよ、いっしんちよく、ぐりーん、ぐりーんしよ、
さなぶり、さなぼり、すいつぎどんこ、びっちゃ
ん、やまんかんじよ

○大きさ 6cm

○生息域 上～中流域

カワヨシノボリはハゼ科では数少ない純淡水魚で、富士川以西に分布する日本固有種である。県内では、本種の好む中流域の石の多い平瀬が少ないためか、過去に塩田川での記録があるほかは今のところ厳木川でしか確認していない。

現在では、ヨシノボリ類はカワヨシノボリも含めると 10 種に分類されるが、以前は胸ビレ条数が 18 本未満のものをカワヨシノボリ、18 本以上のものは一括してヨシノボリとされていた。

そもそも、本種だけが早くから独立した種として認められてきたのは、明らかに生活形態が異なっているからである。つまり、他のヨシノボリ類が 2.5 mm ほどの卵を多産（数千～数万個）し、ふ化した仔魚は流下して海で生活するのに対し、カワヨシノボリは 6 mm ほどの大型卵を少産（100 個程度）し、十分に大きな仔魚はふ化と同時に流れの中で生活し海へは入らない。つまり、他のヨシノボリ類が「下手な鉄砲も数撃てば当たる」式の繁殖戦略を持つのに対して、カワヨシノボリは、最も危険な仔魚期を父親の保護を受ける卵の中で過ごすことで、少なく産んで確実に育てる戦略を選んだわけである。

ヨシノボリ類の区別は慣れるまでは非常に難しい。しかし、筆者自身がそうであったように、捕獲したものがすべてトウヨシノボリばかりであり、それに気づかずに更にそれを細分類しようとしていることも少なくはない。県内では、厳木ダム直下のコンクリート製の固定堰の下では県内で見られるヨシノボリ類のほとんどが混生しており、水中眼鏡等で観察すれば、それぞれの違いが分かるのではないだろうか。



婚姻色 1994.8.13 厳木川(唐津市厳木町)

シマヨシノボリ

Rhinogobius nagoyae

ハゼ科

○地方名 いしびっちゃん、いしもち、いしもちゃ、いせもちよ、いっしんちよく、ぐりーん、ぐりーんしよ、さなぶり、さなぼり、すいつぎどんこ、びっちゃん、やまんかんじよ

○大きさ 7cm

○生息域 中～下流域

少しばかり前の図鑑には、ヨシノボリ属の魚は、ゴクラクハゼ、ヨシノボリ、カワヨシノボリの3種が記されていることが多いが、近年それまで多少模様が違うだけで、単一種とされていたヨシノボリは2013年段階で15種に分けられることになった。しかし、このように細かく分類してもまだ、皆が納得するような分類になっていない。シマヨシノボリは、従来のヨシノボリの横斑型に相当する。

シマヨシノボリは、頬に赤色～褐色のミミズ状の縞模様が見られることが最も簡単な区別法である。そのほかの特徴は、胸ビレ基部に2～3個の細い頬の縞と同色の三日月型の斑紋があり、背ビレ、尻ビレ、尾ビレに数条の点列が見られることなどである。これらの特徴は成熟した雄で顕著である。雌はやや小ぶりで、普段は区別が付きにくいだが、産卵期には他のヨシノボリ類とは異なり婚姻色を呈する。インクをこぼしたように鮮明なブルーに染まった腹部を雄に見せつけつけるようにして積極的に求愛するという。

北海道を除く全国の流れのあまり速くない平瀬に生息する。県内でもほぼ全域に分布するが、玄界灘に面する河川と有明海側では南部の流程が短く下流域の発達しない河川には多い。

なお、本種はヨシノボリ類の中でも最も神経質で捕獲が難しいとされるようだが、県内では特にそのような印象はない。



雄の婚姻色 1992.8.14 有浦川(玄海町)



雌の婚姻色 シマヨシノボリは雌も婚姻色を発現する
1994.8.13 巖木川(唐津市巖木町)

オオヨシノボリ

Rhinogobius fluviatilis

ハゼ科

○地方名 いしびっちゃ、いしもち、いしもちゃ、いせもっちゃ、いっしんちよく、ぐりーん、ぐりーんしよ、さなぶり、さなぼり、すいつぎどんこ、びっちゃん、やまんかんじよ

○大きさ 10cm

○生息域 上～中流域

オオヨシノボリは、かつてヨシノボリの黒色大型と呼ばれていたものである。しかし、いつも黒いわけではなく、普段は他のヨシノボリ類と似た体色をしている。ただ、この時もオオヨシノボリは、胸ビレ基部に菱形の、尾ビレの基部に棒状の明瞭な漆黒の斑紋が見られる。トウヨシノボリにも胸ビレ基部に似た暗色斑を持つものがあるが、こちらは黒ではなく、こげ茶色である。見慣れてくると、最近まで同一種にみなされていたことすら不思議なほど、色彩や明暗のコントラスト等は異なっている。

オオヨシノボリは、北海道を除く日本全国に分布するが、規模の大きな河川の早瀬を好む。

ヨシノボリ類の産卵期は5月～7月で、雄が口で砂を運び出した川底の沈み石の下を掘りその天井にあたる石の下面に産みつけられる。雄は、ふ化まで卵を保護する。ふ化した仔魚は直ちに流下して海に入り、親と同じ様な体つきになって再び川へ遡上する。夏場に河口堰の魚道の下手に遡上のチャンスがうかがっているハゼの子の群のほとんどは、ヨシノボリ類の稚魚である。

この時、持ち前の強力な「吸盤」で、したり落ちる水があれば、ほとんど垂直の壁でも空中を文字どおり「よじ登る」ことができる。



1994.8.13 巖木川(唐津市巖木町)



1994.8.13 (同上)

クロヨシノボリ

Rhinogobius brunneus

ハゼ科

○地方名 いしびつちや、いしもち、いしもちや、いせもつちよ、いっしんちよく、ぐりーん、ぐりーんしよ、さなぶり、さなぼり、すいつぎどんこ、びつちやん、やまんかんじよ

○大きさ 6cm

○生息域 上～中流域

かつて、ヨシノボリ黒色型と呼ばれていたもので、和名の由来は全体に黒みが強いことに由来するとされる。しかし、私自身としては特に黒いという印象は持っていない。むしろ婚姻色が現れた雄は濃色部が赤褐色になり全体としては赤っぽい印象が強い。胸ビレ基部や尾ビレにも特徴はあるのだが、慣れないうちは未成魚や雌の胴体の模様に注目した方がよい。つまり、他のヨシノボリ類にも見られる不明瞭な雲状斑紋はあったりなかったりするが、体側中央にシロチチブに似た粗いステッチのような黒い点列があり、それが尾びれ基部でYの字になって終わっていることである。繁殖期の雄ではこの模様はやや不明瞭になるが、完全に消えることはない。この点に注目すれば、他のヨシノボリ類と間違えることはまずない。

北海道、東北を除く全国に分布するのだが、意外と見つからないのは川というにはあまりにも小さな極小河川に生息するためである。

繁殖の様子はシマヨシノボリに似る。つまり、シマヨシノボリでは雌の腹部が見事な青色になりそれを見せつけるようにして雄を誘うが、本種では雌の腹部は山吹色になり、やはり雌の方が雄を誘う。



1998.6.6 橋本川(唐津市)

トウヨシノボリ

Rhinogobius kurodai

ハゼ科

○地方名 いしびっちゃ、いしもち、いしもちゃ、いせもちよ、いっしんちよく、ぐりーん、ぐりーんしよ、さなぶり、さなぼり、すいつぎどんこ、びっちゃん、やまんかんじよ

○大きさ 7cm

○生息域 上～中流域、ため池

トウヨシノボリは雄の尾柄の基部に橙色の婚姻色が現れることからきた和名である。かつてヨシノボリ橙色型とされたものの他、宍道湖型、房総型、偽橙色型、湖沼型等を併せたもので、将来的には更にいくつかの種または型に分割されるものと考えられてきた。

トウヨシノボリの胸ビレ基部には、オオヨシノボリを思わせるような暗色斑が見られることが多いが、輪郭がぼやけており、色彩も漆黑ではなく暗褐色である。体色も雌雄や時期によっても変化が大きい。雄は、産卵期が近づくと体側の斑紋が消失してうろこの中心が瑠璃色、前後が橙色になり全体として青みの強い単一色になる。さらに、産卵盛期になると全体が黒っぽく変化する。また、雌では、シマヨシノボリのように尾ビレや背ビレに点列が見られるほか、頬にはカワヨシノボリを思わせるような赤褐色の微小な斑点がそばかすのように見られることも多い。

また、産卵期にも和名の由来となった雄の尾ビレ基部も橙色にならないものもある。県内に分布が確認されたヨシノボリ類以外に日本本土に分布されるとするルリヨシノボリやクロヨシノボリまで含めた中で、どれにも該当しないものがトウヨシノボリであると考えた方が、都合がよいかもしれない。

トウヨシノボリは環境への適応力が強く、産卵は他のヨシノボリ類と異なり泥の塊で代用することができるため、湖やため池を海の代用として陸封されることも珍しくない。このため、アユ等の放流に混じって各地に分布を広げており、分類を一層ややこしくしている。

分類が混乱してきたヨシノボリ類の中でもとりわけ混乱しているのが、トウヨシノボリである。最新の図鑑では、これまでトウヨシノボリとされていたものを分割して、いくつかの型が独立した種として扱うことが提案されている一方、西九州など一部地域のは今後さらなる研究が必要ということで掲載すらされていない。普通に見られる魚を「名前のないハゼの一種」とするわけにはいかないので、本書ではこれまで通りトウヨシノボリとしておく。実は、本書でオオヨシノボリとしているものについては「過去にヨシノボリ黒色大型と呼ばれた時代の黒色大型Bではないか」という方もおられる。もし、その通りであれば、黒色大型Bはその後トウヨシノボリに含められてしまっているので、これも含めて今後の課題ということなのだろう。



1992.7.26 松浦川(唐津市)



雄の婚姻色 1992.10.27 嘉瀬川(佐賀市大和町)

ヨシノボリ類の 見分け方

ヨシノボリ類は最近までカワヨシノボリとヨシノボリの2種のみと考えられていただけに区別が難しいため、それぞれの特徴を簡単に示しておく。なお、他にクロヨシノボリや、ルリヨシノボリも生息している可能性もある。



ヨシノボリの中間の吸盤(左右の腹ビレの癒合したもの)は特に強力で水槽壁にも平気ではりつくことができる
1992. 7. 26 松浦川(唐津市)



シマヨシノボリ
頬にミミズ状の模様がある。尾ビレの点列だけで区別しない方が無難。
1992. 8. 14 有浦川(玄海町)



オオヨシノボリ 胸ビレ基部の斑紋が輪郭の明瞭な漆黒の菱形である
1994. 8. 13 巖木川(巖木町)



トウヨシノボリ
頬に斑点があることも多く、胸ビレ基部にぼやけた暗色斑があることもあり、尾ビレ基部がいつも橙色であるわけではない。
1992. 7 嘉瀬川(大和町)



カワヨシノボリ
頬に斑点がある。胸ビレの条数を数えるのが無難
1994. 8. 13 巖木川(巖木町)

ウロハゼ

Glossogobius olivaceus

ハゼ科

- 地方名 どんこ
- 大きさ 20cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

和名は「ウロ」つまり石の隙間にすむハゼの意味で、成長すると普段から物陰に隠れて餌を待つ習性がある。岡山を中心とする瀬戸内地方ではこの習性を利用して素焼きの壺や木箱を沈めて本種を漁獲する「ハゼ壺漁業」が行われている。味はかなりうまいとのこと。

分布域はゴクラクハゼに似て太平洋側は茨城以南であるが、日本海側は能登半島を越え新潟南部以南となっている。礫底よりは砂泥底を好み、ときに下流の純淡水域にも侵入する。

ウロハゼは涙が流れたあのような、眼から上唇を通り抜け突出した下唇に達する特徴的な黒色の帯状の斑紋が見られる。また、頬の下部にはご飯粒でもくっつけたあのような黒色斑紋が2～3個見られる。これらの斑紋は、河川への遡上を始めた頃にはすでに明瞭に見られる。また、眼から背ビレにかけての頭部上面に見られる「ほくろ」のような黒色小点が分類の決め手になる。

これらの特徴によって下流から河口付近に見られる、あまり特徴のない地味なハゼ科の幼魚の中でも比較的容易に区別できる。



1991.11.10 嘉瀬川(佐賀市久保田町)



未成魚 1991.11.10 (同上)

スミウキゴリ

Gymnogobius petschiliensis

ハゼ科

- 地方名 ー
- 大きさ 9cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

ウキゴリの仲間はハゼ科としては大きな浮き袋を持ち、中層に浮かんでいることが多い。ウキゴリの呼称も「浮くゴリ」からきたものである。頭部は縦扁しており、横から見た顔と上から見た顔はかなり印象が異なっている。

スミウキゴリ（墨ウキゴリ）は、かつてはウキゴリの汽水型と呼ばれていたもので、同様に中流型と呼ばれていたものはシマウキゴリ（縞ウキゴリ）として別種とされるようになった。現在でもウキゴリと呼ばれるものは、かつて淡水型と呼ばれていたものである。このうち、実際に浮いていることの多いのはウキゴリで、成長したスミウキゴリとシマウキゴリは浮き袋もやや小さく、石の下や物陰に潜んでいることの方が多い。

これら3種は、成魚の形態や婚姻色も異なっているが、仔魚の頃からすでに色素胞等に違いが見られることが報告されている。幼魚期も尾ビレとその基部の模様もかなり異なっている。スミウキゴリは、第1背ビレの後縁に黒色の小斑がないことで他の2種と区別できる。

県内での生息は少ないようで、個性的な顔つきにもかかわらず地方名も聞かない。

産卵は春で、10～30cm程度の平らな石の下面に産着される。ふ化した仔魚は、海に流下し、5月頃3cmほどに成長した稚魚が遡上してくる。



第1背ビレの後端に黒斑がないことが特徴 1994.3.29 半田川(唐津市) 熊本常夫氏捕獲



スミウキゴリの顔 1994.3.29 半田川(同上)

ウキゴリ

Gymnogobius urotaenia

ハゼ科

- 地方名 ー
- 大きさ 13cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

スミウキゴリの頁でも書いているとおり、和名は「浮く」「鮎(ハゼなどの底生魚)」という一見矛盾した由来を持つ。比較的大きな浮き袋を持ち、胸ビレで深度を調整しつつ、主に第2背ビレと尾ビレでバランスをとりながらホバリングしている。

スミウキゴリはかつてのウキゴリ汽水型、ウキゴリはウキゴリ淡水型と呼ばれていたものである。ある程度大きな河川では河口付近にスミウキゴリ(ウキゴリ汽水型)が、中流域にウキゴリ(ウキゴリ淡水型)が生息している。しかし、その分布域は明確に分かれているわけではなく、ある程度重複している。また、意外なことに汽水域である霞ヶ浦にはスミウキゴリ(ウキゴリ汽水型)ではなく、ウキゴリ(ウキゴリ淡水型)がほとんどを占める。実はウキゴリ(ウキゴリ淡水型)は特に淡水環境が好きなのではなく、流れのない止水環境が好きなのである。つまり、ふ化後、海に流下した稚魚が3~4cmに成長した後、止水環境を求めて遡上した結果として河川内の淵にたどり着いてその中で生活しているのである。河川規模の小さい半田川の中流域のあるトロの中では、ある年はスミウキゴリばかりが、別の年にはウキゴリのみが見られるといった具合であった。



1997.10.23 玉島川(唐津市浜玉町)

ビリンゴ

Gymnogobius breunigii

ハゼ科

- 地方名 ー
- 大きさ 6cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

和名は、メダカの地方名として使われていたもので、本種がメダカをひとまわり大きくした程度にしかならないことからきたものであろう。北海道から九州まで分布し、河口付近の泥底を好む。

ビリンゴは、ウキゴリ属であり、写真のように中層に浮いていることが多い。マハゼ属の魚に似た特徴のない体色であるが、ウキゴリ属のビリンゴは、舌の先端が切り欠き状にへこんでいる。このような舌の形状の特徴はウロハゼ属も同様である。

ビリンゴは、同じく全国に分布するジュズカケハゼや近年宍道湖で発見されたシンジコハゼに酷似する。これらの中でビリンゴは、アシシロハゼに似た横帯が見られないことで区別できるが、生息環境によっては横縞の不明瞭なジュズカケハゼも見られるため、これらの区別には、眼上の感覚管とその開口部の数で確認するのが無難である。

これらのハゼはすべて雌が雄よりひとまわり大きく、産卵期には雄ではなく雌が婚姻色を呈する。尾ビレと胸ビレを除くすべてのヒレが黒ずみ、体も黒みを帯び淡色の横帯が現れ、雄に求愛する。産卵は雄が掘った縦穴の壁面に産みつけられる。雄は、他の多くのハゼのように別の雌に卵を産ませたりせず、1尾の雌の産んだ卵をふ化まで保護する。産卵床には、放棄されたアナジャコやゴカイの巣も利用されるという。



1995.10.7 玉島川(唐津市浜玉町)

移入種

カムルチー

Channa argus

タイワンドジョウ科

要注意外来生物

- 地方名 らいぎよ、たいわんどじょう
- 大きさ 100cm
- 生息域 中～下流域、汽水域、クレーク・ため池、湖沼

1923 年頃に移入された魚で、カムルチーという和名は原産地の朝鮮半島での呼称をそのまま取り入れたものである。しかし、一般には中国名の「雷魚」の方が、はるかにとおりがよい。ただし、この呼称はカムルチーのほかに台湾から移入されたタイワンドジョウも含んでいることが多いので注意を要する。

タイワンドジョウはカムルチーによく似るが、体側の斑紋が小さく、背ビレの上部に 2 本の暗褐色の線があることなどで区別できる。しかし、両種の確実な区別法は尻ビレ条数を数える必要がある。31 本以上であればカムルチー、29 本以下ならばタイワンドジョウである。

タイワンドジョウは近畿地方以外では、ほとんど見られないようである。県内で確認した雷魚類もカムルチーのみで、タイワンドジョウはまだ確認していない。

空気を直接呼吸することができるため水質の悪化による酸欠には強い耐性を持つ。小魚のほか、カエルやアメリカザリガニなど何でも食べる。成長が速く、疲労回復や補血に効果が高いため、食用目的に移入された。味も大変美味で刺身もいけるといふ。

しかし、身には顎口虫が寄生していることがあり、これを人が食べると顎口虫が皮下を這いまわり、脳に達することもある。刺身を薄く切って光に透かしてみてもピンクの斑点がなければ安全と言われるが、生食は厳に慎むべきであろう。

魚食性が強く害魚のレッテルを貼られたこの魚も、近年圃場整備によりクレークが植生の乏しい大型の水路に置き換えられて以降激減し、淡水生態系の頂点の座は北米原産の魚食魚達に取って代わられつつある。



1994.3.11 六角川水系のクレーク(白石町六角)



稚魚 1992.7
六角川水系のクレーク(白石町六角)



1994.3.11 (同上)

クサフグ

Takifugu niphobles

フグ科

- 地方名 がんば、くさふぐ、すなふぐ、ちーちーぶく、はまぶく
- 大きさ 15cm
- 生息域 下流域、河口・汽水域

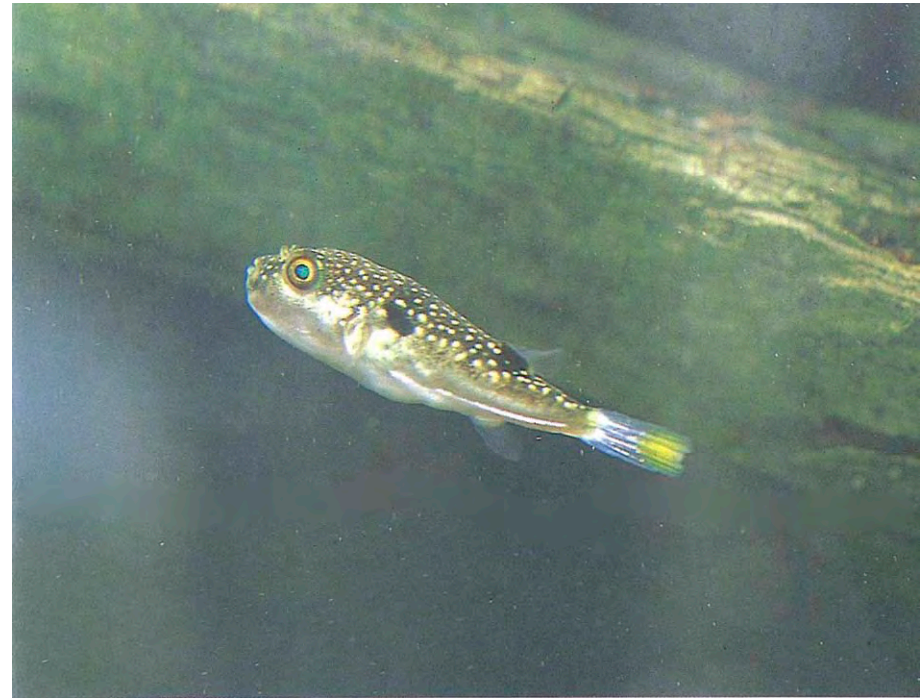
北海道を除く全国の沿岸に広く分布する魚で、釣人の間では餌取り名人として有名な「嫌われ者」のひとつである。毒性（テトロドトキシン）が強く食用として利用もされないため、時たま針に掛かると、驚いて水や空気を吸ってピンポン玉のように膨らんだところを足で踏みつぶされて、「ポン」と音を立てて昇天するものも少なくない。

本来は海産魚であるが、夏季に河川に普通に侵入する。背面は暗緑色で、小さな淡黄色の斑点が多数ある。背ビレや胸ビレ後方の大きな黒色斑の周りに白い縁どりが無いことが特徴である。

普段は、背ビレと腹ビレをパタパタとせわしく動かして泳ぎ、黄色い尾ビレは舵程度にしか使わない。驚くとよく砂に潜るため「すなふぐ」等とも呼ばれる。

産卵は、春から夏にかけての大潮のころ、満潮に合わせて、浜辺の波打ち際に大挙して行われる。この様子は、テレビなどでも時折紹介されるが、阿鼻叫喚というか怒濤というか、浜辺に殺到した雌雄がビチビチと跳ね回る大混乱の中で行われる。

結果として、卵は次の大潮まで浜辺に取り残されるが、卵食性のある本種が自分たちの子孫を食い尽くさないための本能行動だと思うと、感慨深いものがある。他に、シマフグやトラフグも河川やクレークに侵入することがあるらしい。



1992.7.26 松浦川(唐津市)

その他の水辺動物(エビ)

ミナミヌマエビ

流れの緩やかな水草の多いところに多い3cmほどの小さなエビ。色は青、赤、黄、茶、緑褐色のほか無色半透明、など様々な変異に富む。背中線に数mmの淡黄色の縦帯が入ってツートンカラーになっていることも多い。ヌマエビやヌカエビに似るが額角上縁の棘(ギザギザ)は先端付近にはない。また、ふ化した幼生がプランクトン生活を行わないことなどで区別される。



ミナミヌマエビ

スジエビ

最も普通に見られる5.5cmほどに成長するエビで、水草帯やコンクリート壁面などに群れていることが多い。和名は体に黒色の横縞があることから。色は透明感が強く、歩脚の関節が黄色い。汽水域にも見られる。



スジエビ

テナガエビ

体長は9cmほどにもなる。和名のもとになった第2胸脚は非常に長く、はさみ脚になっており、成長した雄では15cmにもなる。体色は赤、黄、褐色および黒色であるが、小型のものでは無色のうえ、はさみ脚もあまり長くなくスジエビに似る。低地の止水域や汽水域に生息し、物陰に潜むことが多い。



テナガエビ

アメリカザリガニ

1930年にアメリカのニューオーリンズからウシガエルの餌用として移入された。日本在来のザリガニは、北日本の冷水域にのみに分布するので、県内のザリガニはすべてアメリカザリガニである。第2胸脚は大きく、はさみ脚になっている。小型のものは暗褐色、暗緑色のため別種と思っている人も多い。色素を全く持たない白化個体(アルビノ)は観賞用として扱われている。また、青色の色素だけが残っている青色個体も自然界でも時折見られる。



アメリカザリガニ

「水を創る(つくる)」

井上 一夫 (武雄市)

去年は、少雨に酷暑そして新年早々には、神戸を中心に大きな地震が来た。今年に入っても雨は少なく、昨年以上の渇水になるのではと心配されている。

低平地の広がる、佐賀の山は浅い。武雄を流れる一級河川六角川の源流、神六山の標高は447メートルであり、その浅い山に河川の環境維持水としての水の供出は望めない。むしろ途中の利水ダムの水の確保さえ、危うくなってきているのが現状であろう。

近年、家庭における水の使用量は、益々多くなってきている。この水の排水の技術が、生活の快適環境をつくるための重要なポイントになると思う。勿論、生活の快適環境は、人のみでは無く生態系全体からの評価でなければならない。

かつての暮らしの中では、家庭からの排水の処理技術は、素掘りの溜枿やその回りのミミズや土壤微生物の働きで足りてきた。その部分を拡大し、今の技術を付加したものが、個別処理の家庭用合併浄化槽といえると思う。

水を大量に消費する今の暮らしの中で、人と自然とのいい関係を保とうとすれば、その中間に水処理施設を介在させることが不可欠である。

各家庭で個別処理し、河川に環境維持水として戻す。上流のダムで取り上げた水を、一度家庭で使い元の水質に浄化して同じ量をその場で川に戻す。水を棄てるのではなく、水を創(つく)る・創造するイメージである。

私は5年前に、乳酸菌飲料の容器を濾材にした家庭用合併浄化槽を設置し、その機能を検証してきたが、年間(日間)をとおしてBOD(生物化学的酸素要求量)1ppmを維持している。環境に対する水質は、BODだけではなく、窒素やリンや界面活性剤など幾つかの要素が考えられるが、それらについては家庭内での制御や、河川の土壌や植・生物の浄化能力など、総合的・重層的な水浄化のネットワークを、構築していくことで解決できると思う。

阪神大震災は、都市におけるライフラインの脆弱さを露呈した。パイプラインを引き回し、下流で大量処理する水処理方法がどうか、各家庭で処理し、近くの川に戻してやる個別処理方法がどうか、低平地で軟弱地盤そして山が

浅い(河川途中の水が少ない)、そのような佐賀の自然環境の中で、佐賀に見合った技術を見出し、それを積極的に進める時期にきていると思う。

そしてそのことが多様な生物が棲める水の復権、結果として人も住みやすい水環境の再生につながると思う。

そのような自然と共生したナチュラルライフラインの構築が、阪神大震災から私たちへのメッセージと思っている。

(いのうえ・かずお、武雄まちなみ研究会)

釣り日記「あの川 この堀」

「…寒の釣りは大場所のヌクメない所はまん中で釣れ、竿は3～3.5間がよく、ヌクメある所はヌクメ付近にポイントを選び、ゲンチ藻の多い所は藻切れを探り、またはツキの心持ちにて釣ること。鵜入れ後は10日以上釣れず、曳網は1週間位で釣れるようで鵜入りの証拠には必ず前カキのあとが点々とあること。…」(昭和32年2月17日)

「あの川 この堀」という釣り日記の一節だ。著者は西田惣七氏。佐賀市で醤油醸造業を営む傍ら、市内とその近郊の川、堀を釣り歩いた。昭和34年2月、56歳で急逝。手帳にしたためられたものを次男・豊藏氏がまとめ、一周忌に出版した。県内の人が著わした釣りの本としては唯一のものといわれる。

昭和30年から亡くなった月までの4年余。松の内からいそいそと寒ブナ釣り、水ぬるむ春はハヤ、ヤマメに興じ、夏は清流にアユを求め、秋はハゼの数釣り、ヘラブナとの駆け引き…と四季折々、寸暇を惜しんで出かけた。天候や場所、えさ、釣果などとともに上記のような「心得」も記されている。

「とにかく研究熱心でした。風呂上がりに翌日の仕掛け作り。空き瓶に水を張ってウキのバランスを確かめたり、座敷から庭に竿を延ばして調子を見たりしていた」(豊藏氏)。

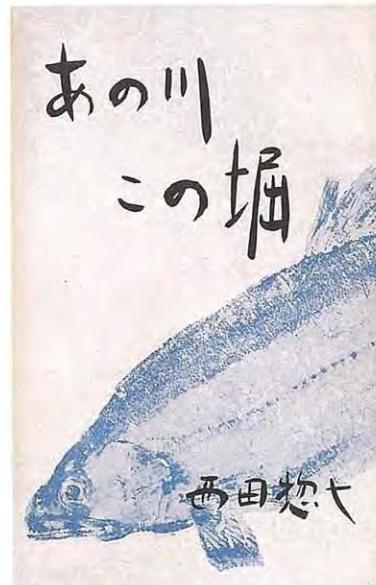
関東地方では古くから親しまれていたものの、九州では珍しいアユのドブ釣り(毛針釣り)やタナゴ釣りにも挑戦。特に佐賀でクソバヤ、ニガブナと呼び、ハヤ(オイカワ、カワムツ)やフナより下位に、あるいは雑魚扱いにされるタナゴ類も「冬場に小川の堰下のたまりに集まっているのを、細くて短い専用の竹竿で狙っていた。繊細なアタリと数釣りが面白かったのでしょう。」(豊藏氏)という。

自家用車が普及していない当時、交通手段はもっぱら自転車かバス。遠出ともなると道具一式を抱えて「午前3時24分発鳥栖行き、5時35分日田行き、7時3分日田着、7時30分杖立行きバスにて大山川上野瀬部下車…(アユ釣り)…帰り6時20分のバス、日田駅発7時13分、鳥栖発8時38分佐賀着9時半」(31年8月16日)。夜汽車に揺られる釣行。今思えば大変だが、楽しかったに違いない。

釣ってきた魚は妻のナヲさん(平成4年没)が料理。ハヤや子ブナはヒボカシ(焼き干し)、近くの神社の秋祭りには、フナの昆布巻きがくち料理として家族に振る舞われた。川魚は保存食として大切にされていた。

今では荒廃してしまった堀や、改修工事で様相が一変してしまった河川もしばしば登場する。佐賀の自然や人々の生活の変遷を知る上でも興味深いものだ。高度成長期前の「あの川 この堀」。懐かしさとともに、さびしさを禁じ得ない人も多いだろう。

※ 冒頭の日記(昭和32年2月17日)の中に出てくる「鵜入れ」「鵜入り」は118、119ページ、平野正徳氏が「野鳥と魚」でも指摘している鵜匠によるものだろうか。



表紙のアユの魚拓は惣七氏が亡くなる前年、川上川の釣り大会で優勝した時の大物(67匁=約250グラム)。裏表紙まで使い、原寸大の魚拓は斜めにしてようやくおさめられた



惣七氏のアユ釣り風景。場所は大和町川上の嘉瀬川、官人橋上流。対岸に見えるのは楊柳亭。昭和30年前後

河畔歳時記

1月 鹿島市のフナ市

鹿島市周辺には「二十日正月」と呼ばれるえびす祭りに、タイの代わりにフナを供える風習がある。フナは昆布巻きにして一昼夜、ダイコンやゴボウなどとぐつぐつ煮込む「フナンこぐい」にする。その家庭独特の味付けがあり、豊作や無病息災を祈る。昆布の風味がしみこみ、骨までやわらかく煮えた「フナンこぐい」は代表的な郷土料理の一つだ。

前日の19日早朝、同市浜中町と新天町には300年前から続く「フナ市」が立ち、この材料を求める人々にぎわう。たらいや箱舟に大小のフナを泳がせ「こっちが安かよ」「ピチピチしとつよ」と業者の威勢よい掛け声が街に響く。キロ当たり500円前後。主婦らは、たき火で暖を取りながら生きのいいフナを品定めする。

2月 シロウオ漁

満ち潮に乗って産卵のために、川を上るシロウオ。鹿児島県・志布志湾から北海道南部まで、朝鮮半島南部にも生息。県内では2月初旬から漁が始まる。東松浦郡玄界町の有浦川では、河口に向かって扇状に広げた「築(やな)」と呼ばれる仕掛けで生け捕る。築で行く手をさえぎられたシロウオは、中央に集まり「獲りかご(うけ)」の中へ。引き上げると鉛色で透き通った魚体が跳ねる。

やな漁は有浦川の他、浜玉町の玉島川、唐津市の半田川でも行われている。伊万里市の佐代川では以前はやな漁だったが、現在は四つ手網漁に代わった。



「フナンこぐい」用に生きのいいフナを求める客でぎわう鹿島市のフナ市

2月 松浦川のイダ(ウグイ)漁

伊万里市の大川町漁協(井手誠組合長、140人)が松浦川で行っている。例年なら2月中、下旬に始まる漁も、今年は今年の渇水や年明けからの降雨不足の影響から不漁が続いた。ようやく4月下旬になって、まとまった雨が降り漁が本格化。対象になるのは、降海型のウグイ。産卵のため海から遡上してくるものを捕る。

組合員が事前に堰の下の浅瀬に作った産卵床には、体長40~50cm、オレンジ色の縦縞が鮮やかなイダの群れが集まってくる。産卵床の石は川原の日に当たって乾いたものを使う。川の中のコケの付いたものは卵が付着しないため、イダも集まらないという。

「魚は何でも知っているんですよ」と網から魚を取り上げる組合員。資源保護のため、その場で人工授精も行われ、ふ化した仔魚は放流されている。

イダは珍重されており、刺し身にして酢ぬたで食べるほか、独特のイダ飯がある。米が煮立ったころあいに、はらわたを抜いて水洗いしたイダの中に入れ、醤油を落とす。御飯をよく蒸したら、身だけ箸でしごいて取り、ほぐして混ぜ合わせる。なかなかの珍味という。

5月 エツ漁

エツは、5月から6月にかけて産卵のために筑後川を上ってくる。諸富橋近くでは小舟が約200mの川幅いっぱいにはやし網を張り、これを待ち受ける。網を巻き上げると、銀色に光るナイフのような魚体が揺れる。網に掛かるとすぐ死んでしまうデリケートな魚だけに料理は鮮度が決め手。初夏の風に吹かれながら屋形舟で食べるエツ料理は格別だ。

特異な姿がアシの葉に似ていることから伝説も残る。その昔、初夏の激しい雨の日、筑後川の川べりに一人の旅の僧がたたずんでいた。貧しい身なりで、だれも相手にしなかった。見か



初夏の川風を受けて屋形舟で味わうエツ料理は格別

ねた老漁師が自分の舟で渡してくれた。この親切に、僧が岸辺のアシをちぎって川に流したら一匹の魚になった。この魚がエツで、後年、漁師はエツを捕って商いをし、幸福に暮らした。この僧は弘法大師だったという。また、不老長寿の秘薬を求めてやってきた中国・秦の徐福が、諸富に上陸する時に押しわけてできた片葉のアシの落ちた部分がエツになったとも伝えられる。

漁獲量は潮や風などに大きく左右されるが、河川改修や堰の建設、水質汚濁など環境の変化で近年激減している。地元の諸富漁協では人工授精卵の放流を行い対策に躍起だ。

12月 浜玉町のフナ食い祭り

東松浦郡浜玉町の岡口地区に、生きた寒フナを丸ごと食べて無病息災を祈る「フナ食い祭り」がある。同地区の岡神社に伝わる奇習で、毎年12月の初午（はつうま）の日に行われている。「豊臣秀吉の太閤検地の際、この地を訪れた検地官が誤って土地の守り神である白蛇を殺したため大飢饉に襲われ疫病がはやった。この時フナを唯一の栄養源として食べ、飢えをしのいだ」との伝説が残り、約400年間続いている。



生きたフナを、箸や手づかみでほおぼるフナ食い祭りの参加者

岡神社で神事を終えた後、持ち回りの座主の家に集まって行われる。フナはあらかじめ近くの玉島川、横田川で大小100匹ほどを捕獲し、流水で泥を吐かせておく。酒宴もたけなわになると、いよいよフナが登場。深鉢に泳ぐフナは元気いっぱい。箸でつかんで酔みそで食べるのだが、生きがよすぎて箸が使えず手づかみで口に運んだり、大きいフナを丸かじりする人もいて、笑い声が絶えず盛り上がる。

川は面白いぞ

多布施川で投げ網打ち

古川 国夫さん（佐賀市長瀬町）

「オジさん魚見せてえ」。古川国夫さんが営むケーキ屋さんは、淡水魚のミニ水族館として近所でも有名。小学校の校門前にお陰で、下校時に必ず立ち寄る“常連”の子もいる。「この歳になって子供の友達のいっばいできたよ」と、古川さんも予期せぬ“お魚効果”を喜ぶ。しかし、古川さんはただの魚マニアではない。なんと、三十数種類・数百匹に及ぶ淡水魚の大半を自分で捕まえたのだ。

店が閉まる夜7時、古川さんは“漁師”に変身する。漁場は多布施川上流一帯。胴長を着て投げ網、バケツを持たせ、だれもケーキ屋さんとは分からない。川に着くころには辺りはもう真っ暗。古川さんは水量と濁り具合をチェックすると、「円盤投げの要領」でエイヤッと網を放つ。網は生き物のようになやかに、魚たちを包囲する。

婚姻色が美しいアブラボテ、横に1本走った黒い線がダンディなムギツク、タナゴの仲間でも大きいカネヒラなどがきらきらと光りながら上がってくる。ときには上流の北山ダムから流されたらしいワカサギやブラックバス、下流から上ってきたウナギも姿を見せるとい

う。網には、人の手に触れただけで死んでしまう稚魚もまぎれ込む。「なるべく生かして返してやりたか



古川さんが投げ網で捕った多布施川の淡水魚は絶滅危惧種も含む35種。ケーキ屋さんのミニ水族館として、下校時の小学生に人気の的だ

けんね」と、古川さんはスプーンとナイフで根気よくすくい取り、彼らを川に返している。「そんなに捕って大丈夫?」。そんな疑問も古川さんの漁を見れば安心に変わる。

護岸工事が進み、多布施川上流の景色は一変した。ツルリとした石とコンクリートの護岸は魚たちにはつらい環境だ。ところが、たまたま残った古い堰、流れを弱める捨て石などのちょっとした場所がオアシスとなり、アリアケギバチやオヤニラミなど貴重な魚が絶滅を免れた。古川さんはたまたまそこに網を打ち、生息確認のきっかけをつくった。

公園化された河川敷にはいろんな人がいろんな目的でやってくる。中高生はジョギングに、家族連れはバーベキューに、若者は暗がりて愛を語り…。しかし、“川”そのものと接している人の何と少ないことか。

古川さんは今日も水に一番近い所で、川の自然と向き合っている。



閉店後は漁師に変身。夜、明かりのない川に向かって黙々と網を投げる古川さん

見て見てこんな大物

南米のアマゾン川ならいざ知らず、佐賀県内の川やクリークにもこんな大物（一部海産）が一。釣りや投網、もりで突いたり…悪戦苦闘で捕らえられた彼や彼女（？）をご覧ください。捕獲当時、佐賀新聞紙上に掲載され、話題となった写真を厳選して紹介します。アルビノのナマズも加えました。（日付は掲載日）



ソウギョ 全長1.48メートル、胴周り85センチ、重さ55キロ（筑後川、昭和60年7月26日）



ウナギ 全長1.35メートル、胴周り35センチ、重さ7.2キロ（肥前町高串の海、平成2年3月26日）



ウナギ 全長1.15メートル、胴の直径約9センチ、重さ3.2キロ（塩田川、昭和60年6月28日）



カムルチー 全長91.5センチ、重さ5キロ（佐賀市の南堀、昭和54年5月27日）



ナマズ 全長40センチ、ひげも含めた全身が白いアルビノ。背骨はブルーに見える（武雄川、昭和60年5月24日）

淡水魚飼育の魅力

濱野 大作（佐賀市）

みなさんは、魚を飼育したことがありますか。魚とは、水の中で何の道具も無く、生きていくことができる素晴らしい生物です。その中でも川魚（温帯性淡水魚）は、私たちの一番身近で、しかも自分で採集してきてくれる魚です。

こんな狭い佐賀県ですが、かなりの種類の川魚が住んでいます。それは幸いにも、佐賀県が田舎であったことがよかったです。最近の熱帯魚ブームのせい、最初から高価な熱帯魚を飼われる方が随分増えてきたように思われます。

川魚の飼育は、熱帯魚飼育の入門として、大いに役立ちますし、川魚を大切に飼った人は、熱帯魚や海水魚にない魅力にひかれることでしょう。天気の良い日に部屋の中でテレビゲームをさせるより家族で川や沼に行き、一緒に魚を捕るのです。自分で捕った魚には、店で買った魚より愛着がわくものです。この魚はどこで、いつ、誰と、捕ったということ、大人は忘れても子供は覚えているものです。捕った魚を飼っていると、その後死ぬこともあります。大切に飼ってあげないと死んでしまうのです。

ここで、自分以外の生物、例えば人間や魚に対して、こんな扱いをしたら死ぬ。ここまでやったら駄目になるということ、自分で覚えるものです。淡水魚飼育には、自分で捕る、自分で運んでくる、飼育する、最後に生物の一生をその狭い水槽の中で勉強することができるのです。

私は小さいころに、朝早くから夜遅くまで魚捕りをしたものです。夜遅く魚捕りをしているとき、お巡りさんに「魚捕れるかい、気をつけて帰れよ」と声を掛けられたこともありました。

一番身近にいる川魚を飼育するということは、誰にでもできる、経費があまりかからない鑑賞魚飼育としては、大変お薦めできるものです。生き物に対する優しさを養い、また水が汚れてくると魚がいなくなるという視点に立ち、河川の浄化、美化に関心を持つことができるのではないのでしょうか。

（はまの・だいさく、ペットショップ経営）

捕ったら飼ってみよう

この本を手にした方は、身近な淡水魚も意外に美しいと感じられた方も少なくないと思う。実際、私の周りにもその魅力にとりつかれてしまった人も多い。今まで、なぜその美しさに気付かなかったのであろうか？それは釣り上げられたいわば「陸に上った魚」か、魚を狙う天敵のように水面上から見ていたからである。つまり、魚の美しさを知るためには、魚と同じ目の高さから見ることである。そのためには、水槽で飼育してみることが一番である。

天然の川や湖では、植物性プランクトンが光合成を行って増殖している。これを動物性プランクトンが捕食する。動物性プランクトンは小魚に捕食され、小魚はより大型の魚に捕食される。このように生物が「食う一食われる」の関係でつながっていることを「食物連鎖」という。実際には、これらの生物の排出物や遺体(有機物)がバクテリアなどによって分解され、無機栄養(肥料)として植物性プランクトン等に吸収され、再び「食物連鎖」に取り込まれ循環(リサイクル)しているのである。つまり、物質は消滅するのではなく形を変えて存在し続けるのである。

水槽で魚を飼うということは、単に水を入れた容器に魚を入れるということではなく、先に述べたような生物間の循環の一部を切り取って屋内に持ち込むことだと考えるべきである。理論的には池の水と砂を水槽に入れ、水草と水槽壁の藻を食わせるための巻き貝を入れてやれば、餌どころか手入れの必要もないバランスドアクアリウム(永久水槽)ができるはずである。

実際には、理論通りにはいかないが、このバランスドアクアリウムの理論を理解していないと過度な給餌や世話、または、放任につながってしまい、結局「魚の飼育は難しい」ということになりかねない。

バランスドアクアリウムの問題点は、飼育できる魚の数は少ないことであ



る。水槽の中にメダカが1尾では一体何を飼育しているのか分からなくなってしまう。しかしそこには人間が手助けすることで、飼育できる魚の数を増やすことができる。

魚を増やすと、まず餌と溶存酸素(水に含まれる酸素)が不足する。餌については日本の淡水魚の多くは雑食性なので餌は金魚やコイの餌を与えればよい。溶存酸素についてはエアポンプやろ過器で対処できる。しかし、しばらくたつと魚自身が排出した有毒なアンモニアによって魚の調子が悪くなってくる。このアンモニアは砂やろ過器などの中にある種のバクテリア(硝化細菌)が繁殖していると、彼らが硝酸に作り替えてくれることで減少させることができる。硝化細菌によって生じた硝酸は水草の肥料となるのだが吸収量にも限界があるため、飼育する魚の量、つまりは餌の量にもよるが1~4カ月おきに水換えを行うことで除去する。

水槽のセットの仕方

大きな水槽は非常に高価であるが、小さな水槽は水の量が少ないため温度や水質の変化が大きく管理が難しい。コストパフォーマンスを考えると、最も普及している60cmのガラス水槽がよい。また、ろ過器、蛍光灯もセットで購入することを進める。できれば、恐ろしい白点病に備えてヒーターや小さなすくい網、魚薬(何にでも効く薬は効果は何にでも今一つと考えた方がよい)。全部合わせても普及品ならば1万円程度でそろうはずである。

設置場所……60cm水槽でも水を入れると60kgほどになる。大人が乗ってもぐらつかない丈夫な台を用意する。また、直射日光の当たる所は水温の変化も大きく、水槽壁に藻が付く原因になるため避ける。むしろ専用の蛍光灯の明かりが感じられるくらいのやや薄暗いところの方が見栄えもよい。また、水換えの手間を考えると蛇口から近い方が都合がよい。

ろ過器……有毒なアンモニアを除去するためだけでなく、酸素の補給にもなるので、必ずセットすること。通常は「上面ろ過」「底面ろ過」のどちらかが用いられる。どちらも一長一短あるが、管理の面では「上面ろ過」が楽である。また、簡易なコーナーフィルタ―は60cm水槽には容量不足である。

レイアウト…砂や小石を必ず5cmほど入れ、石や流木、水草等で生息環境をイメージして隠れ家を作ってやる。砂はお米をとぐ要領で濁りがなくなるまでよく洗うこと。多少の濁りは水ができあがると、なくなるので神経質になることはない。



60cm水槽に上面ろ過装置をセットした状態

水作り………カルキを抜くことではなく、砂やろ過器にバクテリアが繁殖することを意味する。最初、白っぽかった水も水作りがすすむと、著しく透明度が向上する。水を入れてろ過器を回し続けても、バクテリアの餌がないため時間がかかるが、少数の小魚を少量の餌で飼育すると比較的早く水作りができる。すでに軌道に乗っている水槽のフィルターの一部や砂を入れてやってもよい。また、魚薬を投与するとバクテリアが死滅することがあるので、この時も新品の水槽と同じように水作りからやり直す必要がある。

飼育の仕方

日本の淡水魚のほとんどは雑食性なので、一部を除いては市販のコイや金魚の餌で十分である。動物食性の魚の多くも、慣らせばコイの餌を食べようになる。ペットショップには様々な種類の餌が売られているが、魚の口に入る大きさなら問題は起らない。大きすぎる場合にはそれを砕いてやれば事足りる。汎用性を考えると、浮上性の餌よりも沈降性の餌が望ましい。こちらならばハゼ科等の底生魚も食べることができるし、小さな魚もふやけてから食べることができる。割高になるが、テトラ社のシュテールフードは慣れない魚でも比較的食いがいい。また、冷凍赤虫はほとんどの魚が食べるので万に備えて冷凍庫に保管しておくのもいい。

餌の量は、数分間で食べてしまう量を1日に2～3回やるのが基本である。

水温や魚の量によって異なるので、特に決まった量はない。毎日観察して、やせていなければよしと考えてよい。むしろ、おびえていたり、餌が合わなくてほとんど食べていないときに無駄に餌をやる方が、はるかに害が大きい。同様に死魚もすみやかに除去しないと、腐敗して水質を悪化させる。

水槽壁を掃除してもすぐに藻がついたり、透明度が良くても水が黄ばんできたら水換えを行う。水換え時には、上面ろ過器のフィルターウールも手もみ洗いする。年に1回は砂も洗うことが望ましい。水を全量交換するのでなければ、水道水をそのまま使っても差し支えない。しかし、湯ざましや井戸水等の場合、水温の変化が大きかったり、溶存酸素が欠乏していたりと問題があることが多いので注意を要する。

採集と運搬

魚にはそれぞれ適した環境があり、同じ様な環境には同じ様な魚しか生息しない。よって、目的の魚の習性をよく調べておく必要がある。魚種や時期、河川によって捕ってはいけない魚、漁法、禁漁区、禁漁期があるので、該当する河川の内水面漁協等に連絡し確認を取っておくこと。手網で捕れた小魚を大きく育てた方が、慣らしやすく愛着もわくものである。

また、ドンコやヌマチチブなどは危害を加えるので、他の魚と同じ水槽では飼育できない。オヤニラミにいたっては希少な魚である以前に、個人レベルでは単独飼育しかできないので遠慮したほうが無難である。また、魚食性の魚や、アユのように特殊な餌しか食べないものも飼育は難しい。逆に、成長しても5cmほどにしかならない魚は群で飼育した方がよい。こうしたことを考えて持ち帰るようにすべきである。

持ち帰る時には、欲張らずに少数ずつ持ち帰るのが基本である。乾電池式のエアポンプを取り付けたふた付きのパケツを準備しておく数時間は大丈夫である。釣具屋で生き餌を運搬するための容器を購入するのもよい。いずれにせよ、新鮮な水を入れて運ぶのだが、氷などで急激に水温を下げることはかえって危険である。

取ってきたばかりの魚が死亡する原因

「魚の飼育は難しい」と思われている人が多いのは確かである。その多く

は、かつてあやしげな水槽で金魚の飼育に失敗した経験からきたものが多い。ろ過器付きのちゃんとした水槽であれば、以下にあげる初期死亡の原因の4つのポイントに注意すれば、魚の飼育は小鳥より簡単であることが実感できることと思う。

温度の急変……水温の変化は3℃以内にとどめること。水温計がなければバケツの中に10秒間手を入れて、すぐに水槽に手を入れて温度差を感じなければ、その差は3℃以内になっているはずです。

酸素の欠乏……エアポンプやろ過器を使っている、新しい水槽（水作りのできていない水槽）には1週間は5cm以下の魚を5～6尾程度にとどめること。また、入れたばかりの魚に餌を多量にやってしまうことも、初心者が陥りがちな失敗である。死んだ魚や食べ残しの餌は、やがて腐敗し溶存酸素を減少させてしまう。

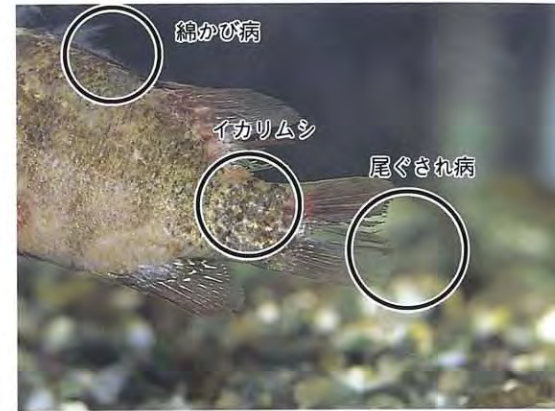
ストレス……人間と同様に魚もストレスを感じる。生息環境をイメージして石や水草、流木等で隠れ家をレイアウトしてやる。また、底に敷く砂は硝化細菌の繁殖を考えると5cm以上砂を入れておくこと。

けがや病気……特に危険なものはスレによる感染症と白点病である。これらは、早期発見・治療を行う必要がある。また、外見から見てわかるイカリ虫や魚ジラミ（チョウ）はピンセット等で取り除いてやる。その他病気は、砂の洗浄や水換えで自然治癒することが多い。

※主な魚の病気と治療法

ワカビ病・尾ぐされ病

水カビが生えたり、細菌感染によってヒレが腐っていきやがて死亡する。捕獲時の魚体のスレが原因となることが多い。市販のグリーンFゴールドもしくはパラザンを水槽の規定量使うとよい。同時に塩を50ℓに対して杯2杯程度入れるとよい。またマラカイトグリーンを50ℓに0.01g入れるとよい。捕獲時に網などでスレた魚は持ち帰らないことが一番の予防法である。



白点病

0.2mmほどの白点がまずヒレにつき、やがて全身に広がっていく。コイ科の魚に出やすく、感染性、死亡率は高い。野外から捕ってきたタナゴ類等は要注意である。また、春や秋には自然に発生することがある。市販のグリーンF、もしくは、ハイトロピカルを水槽の規定量使うとよい。またメチレンブルーやマラカイトグリーン等の色素剤も効果的である。同時に塩を50ℓに対してさじ2杯程度入れるとよい。水草を枯らしてしまうので注意すること。毎日観察し、早期発見・治療が重要である。

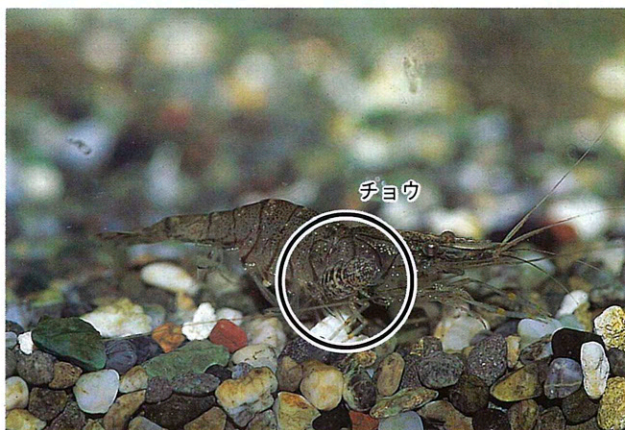


穴あき病

水が古くなると出やすい。きれいな水で飼育すると自然治癒する。水温 27 ~ 28℃で、ある程度治るまで 1/3 ずつ毎日換水する。砂を洗うことも効果的である。

イカリ虫、チョウ

外見から見て分かるイカリ虫やチョウはピンセットなどで取り除き傷口にマキアクリンまたは、エルバージュとアクアセイフを混ぜたものを、塗る。大量に発生している場合は、ディプレックス水溶液を 100 ㍈あたり 1cc 投薬する。



知っておきたい漁業制度

- ・ 漁業に関する制度には漁業者だけでなく、一般の釣り人にも関係の深いものがある。これらを知らずにうっかり違反すると罰金等の罰則を受けることとなるので十分に注意して、楽しい釣りを心掛けたい。
- ・ 漁業の制度について
漁業に関する法律は、漁業法と水産資源保護法が基本になっている。まず、漁業法は漁業権の免許や許可漁業について、また、水産資源保護法は、水産資源の乱獲防止や繁殖保護に関する基本的な事柄を定める。次に、各県で定める内水面漁業調整規則が、この二つの法律に従って、それぞれの県の実情に応じた細かいルールを定めている。また、内水面漁業調整規則を補完するために随時内水面漁場管理委員会指示が発動される。

佐賀県内水面漁業調整規則 で定められている事項(抜粋)

佐賀県で、一般の釣り人がレジャーとして使用できる漁具・漁法

- 1 徒手採捕…道具を使用せず手足で獲るもの(俗称、かちどり)
- 2 さお釣り及び手釣り
- 3 たも網及び叉手網
- 4 船を使用しない投網
- 5 やす・は具

禁じられている漁具や漁法(水産資源保護法、佐賀県内水面漁業調整規則による)

- 1 火光利用による漁法(筑後川を除く)
- 2 水中に電気を通じてなす漁法
- 3 固定式刺網、狩込網及びけんしき網
- 4 水中鉄砲
- 5 びん潰(はえとりびん)
- 6 水中服用による漁法(許可が必要)
- 7 毒物流し、爆発物の使用

禁止期間及び体長制限

魚種名	月												全長・体重制限 (捕ってはいけない大きさ)	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
コイ						■								全長15cm以下
フナ						■								なし
ウナギ	禁止期間なし												全長21cm以下	
アユ	■	■	■	■	■									なし
ヤマメ(エノハ)	■	■	■									■	■	全長15cm以下
ウグイ(イダ)				■	■	■								全長15cm以下
スッポン	禁止期間なし												重量180g以下	
シジミ	禁止期間なし												殻長10mm以下	

凡例:

■	捕って良い期間
■	捕ってはいけない期間
■	捕ってはいけない期間(委員会指示による)

※その他、各地域や各漁協によっても捕獲が禁止されている魚種があります。

移植の制限 (佐賀県環境の保全と創造に関する条例、佐賀県内水面漁業調整規則による)

本来佐賀県に生息していない水産動物を川や池等に移植したり、放流したりすることは禁じられている。これらの魚種は他の魚を捕食する害魚になったり、現在の生態系を破壊する恐れがあるからである。

ニジマス、ワカサギ、ソウギョ、オオクチバス(別名:ブラックバス・ラージマウスバス・フロリダバス等)、コグチバス(別名:スモールマウスバス)、ブルーギル(別名:ポロギレ)、タイリクバラタナゴ(別名:オカメ)、カダヤシ(別名:タツプミノー・モスキートフィッシュ)、ガー科全種、パイコ科全種

参 考

佐賀県内水面漁業調整規則 違反

(禁漁期間等違反) → 6月以下の懲役、10万円以下の罰金、拘留もしくは科料(その併科)

佐賀県内水面漁場管理委員会指示 違反 → 1年以下の懲役もしくは50万円以下の罰金又は拘留もしくは科料

漁業権がある川や池等について

漁業法では、川や池等で漁業権を有する漁業協同組合は漁業権の魚種を採捕する権利を持つように組み立てられているが、一方では限りある資源を保護増殖する義務を負うことになる。また、一般の釣り人も漁業権の区域内で漁業権魚種を採捕することができるが、この場合には漁業権者と同様に資源保護増殖のための経費の一部を負担しなければならない。これが遊漁料で、別図に示す場所での納入するか、巡回している漁場監視員へ納入しなければならない。

漁協名	漁業権魚種	遊漁料納入場所、連絡先
古 湯 地 区	コイ、オイカワ(ハヤ)、ヤマメ、カワムツ	中島商店 (TEL 0952-58-2443) やつだ屋 (TEL 0952-58-2520) 内田商店 (TEL 0952-58-2035) 富士町観光案内所 (TEL 0952-51-8126)
牟 田	フナ、オイカワ(ハヤ)	後川仁一宅 (TEL 0954-36-2815)
川 上 川	アユ、コイ、オイカワ(ハヤ)、ヤマメ	佐賀市役所大和支所産業振興課 (TEL 0952-62-1111) 「道の駅」大和そよかぜ館 (TEL 0952-64-2296) 元祖吉野家 (TEL 0952-62-0235)
玉 島 川	アユ、コイ、オイカワ(ハヤ)、ヤマメ、カワムツ、ウナギ、モクズガニ	中村酒屋 (TEL 0955-56-6537) ヘアーサロンえぐち (TEL 0955-58-2275)
相知町伊岐佐	アユ、コイ、フナ、オイカワ(ハヤ)、ヤマメ、カワムツ、モクズガニ	清流荘 (TEL 0955-62-2111) 山水 (TEL 0955-62-3190) 都荘 (TEL 0955-62-2413) 風美荘 (TEL 0955-62-3678) ふもと (TEL 0955-62-3359) 大店 (TEL 0955-62-2256) 酒のながの (TEL 0955-62-2306)
蔵 木 町	アユ、ヤマメ	唐津市役所蔵木支所産業課 (TEL 0955-53-7115)
大 川 町	アユ、コイ、オイカワ(ハヤ)、カワムツ、モクズガニ、ウグイ	前田武運宅 (TEL 0955-29-3210)

佐賀県内の内水面漁業協同組合（平成26年3月1日現在）

組合名	組合長名	所在地（連絡先）	電話番号	組合の地区
-----	------	----------	------	-------

（出資漁業協同組合）

古湯地区	江頭 三郎	佐賀市北商工会富士支所	0952-58-2434	佐賀市富士町大字古湯
牟田	後川 仁一	武雄市北方支所 まちづくり課	0954-36-6023	武雄市朝日町大字甘久、北方町大字大崎

（非出資漁業協同組合）

川上川	吉村 義清	佐賀市大和支所 産業振興課	0952-51-2430	佐賀市大和町、富士町の一部
玉島川	中村 邦彦	唐津市浜玉支所 産業課	0955-53-7105	唐津市浜玉町、七山
相知町伊岐佐	小松 潤	唐津市相知支所 産業課	0955-53-7125	唐津市相知町伊岐佐地区
巖木町	嶺川 美實	唐津市巖木支所 産業課	0955-53-7115	唐津市巖木町
大川町	前田 武運	伊万里市 農山漁村整備課	0955-23-2591	伊万里市大川町

魚の地方名

力丸 喬之 (佐賀市)

テレビもあまり普及していなかった昭和30年代の中頃だったと思う。当時人気のラジオのクイズ番組「私は誰でしょう」か何かで、「カワクジラとは一体何でしょう」という問題が出た。

その頃、私は魚貝類の地方名を集めていたので我が意を得たりとばかり小躍りしたもののだが、各界の知名士が顔を揃えた回答者から正解はなかった。

その後、縁あって佐賀の地へ来て以来、ずっと「川鯨」のルーツを探してきたが、いまだに不明のままである。

おそくなったが、正解は「メダカ」のことで、澁澤敬三著「日本魚名集覧」(昭和17年)には佐賀県三養基郡鳥栖町鳥栖でこう呼ぶとある。何とユーモラスな呼び名ではないか。

なお、この書には2,700以上ものメダカの地方名が集められており、昔の日本人がメダカを仲介に、いかに自然に親しみ、自然を慈しんでいたかがわかる。

さて、魚貝類の名前には学会で決められた世界共通の「学名」(ラテン語またはギリシャ語で表記)と日本国内で共通の「和名」(「標準和名」ともいう)がある。しかし、一般には地方特有の名前(「地方名」または「方言」)で呼ばれることが多い。

魚食国であるわが国は魚貝の地方名が非常に多く、さらに、名前は同じでもまったく別種のものであったり、同じ種類のもので別の名前と呼ばれたり、魚を調査研究していると混乱することもしばしばだ。

魚貝の名前は、そのものの色や形、雌雄・幼成、生態・習性に由来するもの及びその転化したものが多く、名前の起源をたどるとなかなか味わい深いものがある。

最近では流通の広域化、遊漁の広域化、さらには魚貝類に関する情報・知識の普及に伴って、今までなかった名前が使われるようになった反面、地方独特の名前が使われなくなっていくと同時に、魚貝にまつわる地方の民話伝説や故事来歴が語られなくなっており、一種の地方文化財が消えていくようで非常にさびしく思っているところである。

(りきまる・たかし、佐賀県物産振興協会佐賀支部事務局長)

佐賀の淡水魚類目録及び地方名

科名	和名	地方名	備考
ヤツメウナギ科	カワヤツメ スナヤツメ	ヤツメウナギ メクラウナギ ヤツメ ヤツメウナギ	
コノシロ科	コノシロ	オヤノシャクセン コノシロ ツナシ ハビラ ハビロ	
カタクチイワシ科	エツ	① エツ ウバエツ シリガレエツ	①世界で有明海だけに住む
サケ科	ヤマメ アマゴ	エノハ ヤマメ アマゴ エノハ ヤマメ	
	ニジマス	② ニジマス マス	②北アメリカ原産
	サケ	サケ シャケ シロジャケ	
アユ科	アユ	アイゴ アイノイオ アユ	
キュウリウオ科 シラウオ科	ワカサギ シラウオ アリアケシラウオ④	③ ワカサギ シラウオ	③1958年以来、霞ヶ浦、鰻池(鹿兒島)、諏訪湖などから北山ダムへ受精卵を移植した。
	アリアケヒメシラウオ⑤	シラウオ トンサンイオ	④日本で有明海だけに住む ⑤世界で有明海だけに住む
コイ科	タモロコ イトモロコ	イシバヤ ソコバエ ホンモロコ	
	ムギツク	アイノジョウトク	

科名	和名	地方名	備考
		イシバヤ クチボソ スジバヤ スポ スポバヤ スポビキバヤ ドジョウバヤ アブラバヤ アブラメ サクラバヤ カマツカ カモツカ ギョウトク ジョウトク スナセセリ スナモグリ ツチフキ ドウキョウ ボウジョ	
	カワヒガイ		
	ニゴイ ツチフキ カマツカ	} カマツカ カモツカ	
	ゼゼラ モツゴ	イシバヤ クチボソ ゼンモンバヤ	
	ウグイ	イダ ウグイ ユダ	
	タカハヤ	アブラバヤ アブラボウ アブラメ クソバエ ドロバエ ハヤ	
	ヒナモロコ カワバタモロコ ソウギョ カワムツ	(メダカ) (メダカ) ① ソウギョ アカハヤ アカブチ	

①中国大陸原産。近年、佐賀の各地でクリークの水草駆除のため埼玉県利根川水系産稚魚を放流している

科名	和名	地方名	備考
	オイカワ	サンジ シラハヤ ハヤ ヤマソウ ヤマバエ ヤマブキ アカツバ アカハヤ アカブチ アカライ サクラバヤ サンジ シラハヤ ハヤ ヤマブキ	①1978年頃から県内河川で見られるようになった。琵琶湖産の放流稚アユに混入してきたものと思われる
	ハス ハクレン コクレン オオキンブナ	① ハス ② レンギョ ③ レンギョ ④ キンブナ フナ ホンブナ マブナ	
	ギンブナ	④ ギンブナ フナ ホンブナ マブナ	②③中国大陸原産。埼玉県利根川水系産ソウギョ種苗に混入してきたものと思われる
	ゲンゴロウブナ	④ ゲンゴロウブナ フナ ヘラブナ	④フナ属魚類は自然環境下で形態的に変異し易く、分類に異論が多い
	コイ	コイ ノゴイ ヒゴイ マゴイ	
	ヤリタナゴ アブラボテ セボシタビラ		

科名	和名	地方名	備考
	カネヒラ タイリクバラタナゴ ニッポンバラタナゴ カゼトゲタナゴ	アカブチ カンノンバヤ クソバヤ シビンタ シブタ シブタゴ シュブタ シンゴツチャ タバヤ デンバヤ ニガブナ ベタンチョ ベニバヤ ベンバヤ ボテ	
ドジョウ科	ドジョウ	キネドジョウ ドジョウ ドジョウ ドンジョ ドンジョウ	
	ヤマトシマドジョウ①	シマドジョウ スナクイドジョウ	①別名 タイリクシマドジョウ
ナマズ科	ナマズ	ナマズ ヒュウタンゴ ヒョウタン ヒョウタンゴ	
ギギ科	アリアケギバチ	ギギユウ ギギョ ギユウギユウ ギンギユ ギンギョ ギンギョバチ シャチ ヘブイギンギョ	
アカザ科	アカザ	アカナマズ ウマンクソギンギョ	

科名	和名	地方名	備考
ウナギ科	ウナギ	アオウナギ ウナギ オナギ カニクイ ガネクイ ギンウナギ クチボソ クロコ ゴマ シケウナギ シラスウナギ ピリンソー ピロソツ ヨシノコウナギ ソウメンコ	
アナゴ科	マアナゴ	アナゴ ドグラ	
サヨリ科 メダカ科	クルマサヨリ メダカ	サヨリ カワクジラ ザッコ シヨシヨシイオ タイワシ タカンチョ タバヤ チャーワシ チャメゴ ペーペータンゴ マメンジャコ メザカ メザッコ メジャカ メダカ メダカンチョ メダコ メチャバヤ メンコ	
カダヤシ科	カダヤシ	① タップミンノー	①北アメリカ原産

科名	和名	地方名	備考
トゲウオ科 タウナギ科 ボラ科	グッピー イトヨ タウナギ ボラ	① グッピー ② イナ ウウボラ クロメ クロメゴ ダンギー チュウボラ ボラ セスジボラ シクチ ボラ メナダ ③ アカメ エビナ エビナゴ エプナ シクチ シュクチ ナヨシ フルヤスマ マイオ ヤスマ ワカヤスマ	①南アメリカ原産 ②成長に伴って呼び名が変わる《出世魚》 [有明海] クロメゴ→クロメ→ダンギー→ボラ→チュウボラ→ウウボラ [玄海] イナ→ボラ ③成長に伴って呼び名が変わる《出世魚》 [有明海] エビナゴ→エビナ(エプナとも)→アカメ→ワカヤスマ→ヤスマ→フルヤスマ(フツクヤスマとも)→ナヨシ(ナヨセ、マイオとも)
タイワンドジョウ科 ヒイラギ科	カムルチー ヒイラギ	④ タイワンドジョウ ライギョ シイカブラ シイラ シヌフタ シビラ チョン チョンゴロ トンバ ヒイラギ	④中国大陸から朝鮮半島を経て移入された
スズキ科	オヤニラミ	オヤニラミ セエベエ ミズクリセエベエ ミツクリセエベエ	

科名	和名	地方名	備考
サンフィッシュ科	スズキ	① ヨツメ	①成長に伴って呼び名が変わる《出世魚》 [有明海] ハクラゴ→ハクラ→アカメバクラ→ヤスマバクラ→ハネ→スズキ [玄海] セイゴ→ハネセイ→スズキ
		ヨルメヒルメ	
		アカメバクラ	
		ススキ	
		スズキ	
		セイゴ	
		ハクラ	
		ハクラ	
		ハネ	
		ハネセ	
ブルーギル	② ヤスマバクラ	②北アメリカ原産	
	ブルーギル		
オオクチバス	③ ポロギレ	③北アメリカ原産	
	バス		
タイ科	クロダイ	ブラックバス	④アフリカ原産
		クロダイ	
		チヌ	
		チン	
カワスズメ科	ナイルティラピア	④ イズミダイ	④アフリカ原産
		チカダイ	
		ティラピア	
イソギンボ科 ハゼ科	イダテンギンボ シロウオ	イサザ	⑤日本で有明海と八代海の一部だけに住む
		シラウオ	
		シロイオ	
		シロウオ	
		ミミズハゼ	
		カワアナゴ	
		ドンコ	
		ドンコ	
		ドンボ	
		ドンボツ	
ボボコヤシ			
ムツゴロウ	⑤ ムギツクドンボ	⑤日本で有明海と八代海の一部だけに住む	
	ホンムツ		
		ムツ	

科名	和名	地方名	備考		
	トビハゼ	ムツゴロウ	①日本で有明海だけに住む		
		ムットウ			
		カッチャムツ			
		カッチャン			
		カナムツ			
		トビハゼ			
		ウロハゼ		①	②形態や斑紋、生活史などの違いからいくつかの型に別れ、それぞれ分布域や生息環境が異なる
		マハゼ			
		ハゼクチ		ナガレハシクイ	
				ハシクイ	
	ハゼ				
	ハゼクチ				
アシシロハゼ	ハゼ				
	ドンコ				
ゴクラクハゼ	②	・シマヨシノボリ (横斑型) ・オオヨシノボリ (黒色大型) ・ヒラヨシノボリ (南黒色大型) ・ルリヨシノボリ (るり型) ・クロヨシノボリ (黒色型) ・アヤヨシノボリ (モザイク型) ・トウヨシノボリ (橙色型) ・アオバラヨシノボリ (中卵形・腹部るり色) ・キバラヨシノボリ (中卵形・腹部黄色)			
ヨシノボリ					
	イシビッチャ				
	イシムシ				
	イシモチ				
	イシモツチャ				
	イセモツチャ				
	イッシンチョク				
	グリーン				
	グリーンシヨ				
	サナブリ				
	サナボリ				
	ビッチャン				
	ビッチン				
	ヤマンカンジョ				
カワヨシノボリ	③	③従来のシマハゼ			
シモフリシマハゼ					
	シマハゼ				
	スジハゼ				
ヌマチチブ	アナハゼ				
	ドンコ				
チチブ	④		④世界で有明海だけに住むとされていたが、近年、朝鮮半島からも確認された		
シロチチブ					
スミウキゴリ					
ビリンゴ					

科名	和名	地方名	備考
カジカ科	ワスラボ	① ジンキチ スボ ドウキン ドキュウ ワスラボ	①日本で有明海だけに住む
	ヤマノカミ	② オコズ カワオコズ カワンカミ カワンカミドンコ カンカンジョウ タチャ ヤマンカミ	②日本で有明海だけに住む
	カジカ カマキリ	③ ウルゴ コオサズ シャチ スイツキドンコ ヤマホーリャ	③別名アユカケ
マフグ科	クサフグ	ガンバ クサブク スナブク チーチーブク ハマブク	

(注) 1. 一般に「淡水魚」とは、一生涯を、あるいは生涯の一時期を淡水域で生活する魚を指すことが多いが、ここでは本文に従って、河口や内湾の湾奥部などの汽水域で生活する魚および海水域と汽水域を行き来する魚も収めた。

2. 魚の地方名は、詳しく調べていくと市町村や集落ごとにも異なるものであるが、ここでは県内の呼び名とした。

3. 以前はたくさん住んでいて流域の人びとに親しみをもって呼ばれていた魚も、現在ではほとんど見えなくなったため、名を聞いても魚種の確認ができず、魚の形態や生息状況などの情報で推測した魚種もある。

参考文献

- 石井 恵. 1993. 川魚入門, 採集と飼育. マリン企画
- 伊藤猛夫・水野信彦・東幹夫. 1976. 松浦川水系とくに厳木川の魚類とその生息環境.
- 内田萬二. 1980. 佐賀平野の堀の漁具と漁法, 佐賀女子短大研究紀要14
- 沖山宗雄. 1988. 日本産稚魚図鑑. 東海大学出版会
- 川那部浩哉・水野信彦. 1989. 日本の淡水魚. 山と溪谷社
- 川那部浩哉・水野信彦. 1989. 川と湖の魚①②. 保育社
- 川那部浩哉. 1987. フィールド図鑑 淡水魚. 東海大学出版会
- 紀平 肇・松田雅也. 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類. たたら書房
- 小島吉雄. 1988. 魚のはなし. 技報堂
- 小仲貴雄・道津喜衛・田北徹. 1973. 多良岳山系に産する魚類, 多良岳自然公園候補地学術調査報告
- 環境庁自然保護局野生生物課. 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物脊椎動物編. 日本野生生物研究センター
- 佐賀県. 1978. 第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書(淡水魚類)
- 坂本兼吾・田島正敏ほか. 1993. 高校生物における陸水生態系の教材化の試み, 佐賀県教育センター研究紀要 17
- 坂本兼吾・田島正敏. 1995. 佐賀県嘉瀬川における淡水魚類目録, 佐賀自然史研究
- 山陽新聞社. 1984. 岡山の淡水魚. 山陽新聞社
- 末広恭雄. 1992. 魚の博物事典. 講談社
- 菅野 徹. 1981. 有明海. 東海大学出版会
- 田島正敏・坂本兼吾ほか. 1993. 田手川の生態系調査と多自然型工法. 佐賀県土木部河川砂防課
- 田島正敏・坂本兼吾. 1994. 佐賀県の淡水魚について, 第33回九州高等学校理科教育研究会熊本大会意見発表要旨
- 田島正敏・坂本兼吾. 1995. 佐賀市近郊の淡水魚類, 複合リゾートカントリー一整備計画調査報告書, 自然と共生するまちづくり構想. 佐賀市塚原 博. 1991. 魚のおもしろ生態学. 講談社

中坊徹次. 1993. 日本産魚類検索. 東海大学出版会
中村守純. 1993. 原色淡水魚類検索図鑑. 北隆館
水野信彦・後藤 晃. 1987. 日本の淡水魚類, その分布, 変異, 種分化をめぐって. 東海大学出版会
比婆科学教育振興会. 1990. 広島県の淡水魚. 中国新聞社
力丸喬之. 1994. 佐賀県主要魚貝名便覧

内田萬二. 1953—1954. 堀. 新郷土連載
中村守純ほか監修. 1992. 日本絶滅危機動物図鑑. J I C C 出版
力丸喬之. 1979. 佐賀のさかな. 佐賀県水産室

【協力者】 (五十音順、敬称略)

内川正美 (東脊振村)
川那部浩哉 (京大大学生態学研究センター教授)
熊本常夫 (唐津市)
坂本兼吾 (佐賀県教育センター)
高尾 定 (神埼町)
田中 剛 (北山湖地域振興公社事務局長)
中嶋秀利 (大牟田市動物園)
中原正登 (佐賀県立博物館)
東島 穠 (江北町)
藤井秀男 (塩田川漁協組合長)
古川国夫 (佐賀市)
古川雅通 (フジコンサルタント)
鷺尾真佐人 (佐賀県有明水産振興センター)

【協力団体】 (五十音順、敬称略)

伊万里土木事務所、唐津土木事務所、九州環境管理協会、九州農政局、干拓の里むつごろう水族館、佐賀県有明水産振興センター、佐賀県水産局漁政課、佐賀県土木部河川砂防課、佐賀新聞社、山陽新聞社、東海大学出版会、水資源機構

田島正敏 (たしま・まさとし)

佐賀県立中原特別支援学校教頭。1964年佐賀市生まれ。佐賀西高一広島大卒。県内の淡水魚の調査、研究に取り組んでいる。本書では、大半の魚の写真撮影と解説、飼育方法等を執筆。佐賀自然史研究会会員。



千代田町の堀干し風景。竹や木が林立する「ヌクメ」で悪戦苦闘の魚捕り（昭和52年1月）

「佐賀県の淡水魚一人と川と自然を考える」

平成7年8月25日発行

定価 2,700円（本体2,621円）

監修／田島正敏

発行／佐賀新聞社

佐賀市天神3-2-23 電話0952-28-2152

印刷／榊昭和堂印刷

改訂版

「佐賀県の淡水魚一人と川と自然を考える」

平成26年3月改訂

監修／田島正敏

発行／佐賀県立図書館

